新豐樹裏行人度。小苑城邊獵騎回。
聞道甘泉能獻賦。懸知獨有二子雲一才。

通釋 天子の離宮が露臺祠に連接してゐる。其の露臺に登つて眺むれば、八百里に跨る秦川は半夕陽に照されて、一望寥闊である。左右の青山を見れば盡く扈從の兵士の赤旗を以て彩られ、碧澗を流るる溫泉は却つて華淸宮から分流する。近景 新豐の驛樹の間には行人が絡繹として往來し、宜春苑のあたりには獵騎の歸るのが見える。遠景。以上章主簿の寓目を想像していふ。聞けば揚雄のやうに甘泉賦を陛下に獻じた者があるさうぢやが、其れは揚雄の文才ある君を指す。章主簿であらうと遙に想像してゐる。

語釋 漢主(漢の天子。唐の天子をいふに漢の天子を借り用ふるのが常例である。) ○露臺(祠の名。驪山の頂に在る。) ○秦川(三秦記に函谷ヨリ西隴底ニ至ル。相去ルコト千里。關中トイヒ亦秦川トイフとある。) ○朱旗(扈從の兵士の旗。) ○碧澗翻從二玉殿一來(先づ溫泉を引いて殿內に入れ、又却つて碧澗より洒ぎ出すのである。) ○新豐(地名。驪山の下に在り。) ○行人(往來する人。) ○小苑(宜春苑なり。長安城の東南隅に在り。) ○聞說(聞けばといふ意。) ○甘泉(前の興慶池侍宴應制の詩に見ゆ。) ○子雲(揚雄の字。)

大同殿生二玉芝一龍池上有二慶雲一百官共觀聖恩便賜二燕樂一敢書二卽事一

王維

敍說 開元(玄宗の年號。)中、興慶宮を增廣して南內となし、その正殿を大同といふ。天寶七載七年三月、大同殿の柱に玉芝(靈草)を生ず。龍池(前の龍池篇を見よ。)の上に慶雲(五色の雲)現る。是れ皆太平の祥なり。百官共に之を觀る。天子乃ち燕樂(宴樂なり)を賜ふ。因つて其事を記して此の詩を作る。書二卽事一とは事實について其の儘を記述する意。

欲レ笑二周文一嘲二燕鎬一。還輕二漢武一樂レ橫レ汾。
豈知二玉殿生二三秀一。詎有二銅池出二五雲一。
陌上堯樽傾二北斗一。樓前舜樂動二南薰一。

周文の鎬に燕するを嘲ふを笑はんと欲す。還漢武の汾に橫たふるを樂しむを輕んず。豈玉殿三秀を生ずるを知らんや。詎ぞ銅池に五雲を出すこと有らんや。陌上の堯樽北斗を傾け、樓前の舜樂南薰を動かす。

共歡天意同人意。萬歲千秋奉聖君。

通釋　周の文王が鎬京で羣臣と宴樂したことや、漢の武帝が汾河の中流に樓船を泛べた樂などは、今日の燕樂に比ぶれば殆ど物の數ではない。周漢の時には玉殿に靈芝を生ずる祥瑞があつたわけではなく、漢の宣帝の時には、金芝が函德殿の銅池の中に生じたといふが、ただ金芝を生じただけで、今日のやうに慶雲が現れたわけではない。然るに今日は玉芝慶雲の祥瑞があつたので、陌上に酒樽を据ゑつけて太斗柄を用ひて之を酌み、樓前に音樂を張つて南薰の曲を奏し、天人相和して此の祥瑞を呈したことを歡び、千秋萬歲の後まで永く聖天子に奉仕せんことを樂んでゐる。

語釋　周文謌レ燕レ鎬（卷四、奉和晦日幸昆明池應制に見ゆ。）　○漢武樂レ橫レ汾（同上。）　○玉殿（大同殿を指していふ。）　○三秀（靈草なり。楚辭九歌ヲ山間ニ採ルとあり。）　○銅池（銅で作つたあまどひ。）　○五雲（五色の雲。）　○陌上堯樽（淮南子に、聖人ノ道ハ其レ猶ホ中衢ニ樽ヲ設クルガ如キカ。過グル者斟酌シ、各其ノ宜シキヲ得。堯ハ衢樽。魔ハ奉樽云ニとある。衢の緣で陌上の二字を冠した。）　○北斗（楚辭に北斗ヲ援イテ桂漿ヲ酌ムとあり。北斗は星の名。共に七星あり。五より七までを杓といふ。）　○舜樂（舜の音樂。）　○南薰（舜の南風、詩に、南風ノ薰セル、以テ吾ガ民ノ慍ヲ解クベシとあるに由る。）　○萬歲千秋（千年も萬年も。）

奉レ和二聖製一從二蓬萊一向二興慶一閣道中留春雨中春望之作一應制

王維

紘說　聖製とは御製といふに同じく、天子の作れる詩歌をいふ。この詩は玄宗が蓬萊宮（大明宮とも東内ともいふ。）から興慶宮（南内ともいふ。）に向ふ閣道（複道ともいふ。元和志に秦ノ始皇閣道ヲ作リ、驪山ニ至ルマデ八十里、人ハ橋上ヲ行キ車ハ橋下ヲ行クとある。）の中途で留春閣に憩ひ、雨中春望の詩を作られたのを、王維が詔に應じて和し奉つたのである。應制は前に見ゆ。

渭水自ラ縈二秦塞一曲。黃山舊繞二漢宮一斜。
鸞輿迴二出千門一柳。閣道迴看上苑花。
雲裏帝城雙鳳闕。雨中春樹萬人家。
爲レ乘二陽氣一行二時令一。不レ是二宸遊一玩二物華一。

渭水自らは秦塞を縈つて曲り、黃山舊は漢宮を繞つて斜なり。
鸞輿迴に出づ千門の柳、閣道迴に看す上苑の花。
雲裏の帝城雙鳳闕、雨中の春樹萬人の家。
陽氣に乘じて時令を行ふが爲なり、是れ宸遊物華を玩ぶならず。

通釋 昔ながらに渭水は秦塞を繞つて曲折し、黄山は漢宮を繞つて聳えてゐる。さて吾が君には鸞輿に乘り、遙に宮門の柳を拂つて出で、閣道の上から上林苑の花を廻看せられ、更に眸を放ちては、帝城の鳳闕の雲の間に甍び峙ち、雨中の春木立の間に民家の立ち並んでゐるのを御覽になつた。今日の御出遊は陽春の氣節に乘じて時令を行はせ給はんが爲で、徒に春色を賞して樂を取らうといふ御趣意ではないのである。

語釋 渭水(川の名。秦嶺を發り曲折して流れる。) ○秦塞(長安は秦漢の古都で、山河の要害に富んだ處である。故に秦塞といふ。) ○黄山(山の名。長安の西北に在る。) ○漢宮(漢の宮殿。) ○鸞輿(天子の御車。) ○千門(建章宮に千門あり。) ○上苑(漢の武帝の作つた上林苑。) ○雙鳳闕(關中記に、建章宮ノ圓闕北道ニ臨ム、金鳳ノ闕上ニ在ルアリ、高サ丈餘故ニ鳳闕ト號スとある。) ○時令(時節時節の政令。禮記月令に、立春ノ日天子自ラ春ヲ東郊ニ迎ヘ、德ヲ布キ令ヲ行フアとある。) ○宸遊(天子の遊幸。) ○物華(春景。)

敕賜百官櫻桃

王維

敘說 唐の李潮の歲時記に、四月一日、內園進櫻桃ヲ寢廟ニ薦メ訖リテ頒ニ賜スルコト百官ニ各有レ差とある。この詩は百官に櫻桃を賜はつたことを述べた詩である。

芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上蘭。
繾是寢園春薦後。非關御苑鳥銜殘。
歸鞍競帶青絲籠。中使頻傾赤玉盤。
飽食不須愁內熱。大官還有蔗漿寒。

通釋 芙蓉園の別殿の下に百官を召集し、宮中で作つた櫻桃を上林苑中の上蘭觀から出して賜はつた。これはやつと此頃宗廟に薦めたばかりの初物で、御苑の鳥の食ひ殘した殘物などではない。さて百官がその賜を拜し之を青絲の籠に盛り、鞍に著けて歸ると、又あとからあとから宮中の吏員が赤玉の盤を傾けて更に賜はつた。併しいくら食ひ過ぎても內熱を發する心配はない。大官が聖旨を奉じて別に蔗漿と名づくる解熱劑をくれたからである。

語釋 芙蓉闕(芙蓉園は卽ち曲江の南苑、內に別殿あり。櫻桃に素し此の園で出すたものであらう。) ○千官(百官といふが如し。) ○紫禁(禁裏。) ○朱櫻(櫻桃は赤いから。) ○

上苑（親の名し上林苑中に在り。）○寢園（宗廟。）○御苑（天子の御庭。）○青絲籠（樂府陌上桑に青絲ヲ籠繫トナスとある。）○中使（宮中の役人。）○赤玉盤（赤色の盆。後漢の明帝羣臣を宴す。大官朝桃を進む。盛るに赤玉盤を以てす。月下之を視れば同色なり。羣臣皆笑つて曰く是れ空盤なりと。）○内熱（腹中の熱。）○大官（膳食をつかさどる官。）

酌レ酒與二裴廸一

王維

敍說 この詩は裴廸（卷六の孟城坳を見よ）の求むる所ありて遂げず、怏怏として樂まざるを見て之を慰めたのである。

酌レ酒與レ君君自寬。人情飜覆似二波瀾一。白首相知猶按レ劍。朱門先達笑二彈冠一。草色全經二細雨一濕。花枝欲レ動春風寒。世事浮雲何足レ問。不レ如二高臥一且加レ餐。

通釋 酒を酌んで君に與へるから、之を飲んで少し心を廣くするがよい。世間の人情の反覆常なきことは波瀾の忽ち變ずると同じである。白毛になるまで親交を續けて來た友達でも一旦利害を異にすれば忽ち疾視して劍を執つて立つこともあり、朱塗の門の立派な邸宅に住む先輩も、こちらが引立ててくれるであらうとあてにして、冠の塵を掃ひ、出仕の用意をして待つてゐると、却つて冷笑するやうなこともある。今や春のこととて樣樣の草が細雨を經て萌え出で、花の枝は開かうとしても餘寒の烈しい爲に開きかねてゐる（二句は眼前の景を述ぶると同時に、小人が時めいて君子が沈淪してゐる世間の狀態に喩へたのである。）世間の榮華は浮雲の如く定めなきものであるから、問題にするほどのものではない。寧ろ寢食を安らかにして身の息災を計るがよい。

語釋 波瀾（おほなみ。）○白首（しらがあたま。）○相知（知己。しりあひの人。）○按レ劍（劍に手をかけそゝり かからんとする。）○朱門（朱塗の門。）○先達（先輩の人。）○彈冠（冠をはじいて塵を掃ふ。他人の推薦を期して待つこと。漢書に王陽、益州刺史トナル。貢禹冠ヲ彈ジテ薦ヲ待ツ。巢シテ之ヲ薦ムとあるに。）○高臥（枕を高くして安眠する。）○加レ餐（身を大切にする。）

酬二郭給事一

王維

敍說 給事は官名。門下省に屬し、天子の左右に奉侍し省事を分判することを掌る。この詩は郭給事から詩を贈られたのに對して答へたのである。

洞門高閣靄餘暉。桃李陰陰柳絮飛。
禁裏疎鐘官舍晚。省中啼鳥吏人稀。
晨搖玉佩趨金殿。夕奉天書拜瑣闈。
强欲從君無那老。將因臥病解朝衣。

洞門高閣餘暉靄たり、桃李陰陰として柳絮飛ぶ。
禁裏の疎鐘官舍の晩、省中の啼鳥吏人稀なり。
晨に玉佩を搖かして金殿に趨り、夕に天書を奉じて瑣闈に拜す。
强ひに君に從はんと欲するも老を那ともするなし、將に臥病に因つて朝衣を解かんとす。

通釋 日が既に暮れかかり、洞門高閣のあたりは夕日ほの暗く、桃李葉茂り柳絮飛び、春も將に暮れんとしてゐる。禁中に夕の鐘が響き渡り官舍の晩るるに及んでは、百官皆退散して棲鳥が我が物顔に囀つてゐるばかりである。併し給事の官は朝は早く佩玉を鳴らして出仕し、夕には詔書を捧げて青瑣門に拜せねばならぬので、まだ退出することも出來ない。君は勤勉怠なく職を奉じてゐる。それに倣つて余も强ひて勤勉しようと思ふが、老年になつて如何とも仕方がないから、近く朝衣を脱いで隱退しようと思ふ。

語釋 洞門（門が幾重にもなつてゐて相對すること。）○餘暉（夕日の照りかへすこと。）○陰陰（葉の茂つて小暗き貌。）○柳絮（柳の花。綿の如し。故に絮といふ。）○疎鐘（間をおいて撞く鐘。）○省中（禁中なり。蔡邕曰く、省中ハモト禁中トナス。孝元皇后ノ父名ハ禁、故ニ之ヲ避ケテ省中トイフと。）○吏人（官吏。）○玉佩（腰に佩ぶる玉。佩玉ともいふ。）○天書（詔書。）○瑣闈（青瑣門。前の賈至の早朝大明宮呈兩省僚友を見よ。漢制に給事黄門の職、日暮るれば入りて青瑣門に對して拜す。名づけて夕郎といふ。）○朝衣（朝廷に出仕する時の衣服。）

過乘如禪師・蕭居士嵩丘蘭若

王維

叙說 嵩丘は嵩山（洛陽の東南五十里に在る。）蘭若は寺をいふ。乘如禪師・蕭居士は孰れも佛僧の名で、恐らく兄弟であらう。この詩は王維が乘如禪師と蕭居士との住する嵩山の寺に過ぎり、その高德をほめた詩である

無著天親弟與兄。嵩丘蘭若一峯晴。
食隨鳴磬巢烏下。行踏空林落葉聲。
迸水定侵香案濕。雨花應共石床平。

無著天親弟と兄と、嵩丘の蘭若一峯晴る。
食は鳴磬に隨つて巢烏下り、行いて空林を踏めば落葉聲る。
迸水定めて香案を侵して濕し、雨花應に石床と共に平なるべし。

深洞ノ長松何ノ所ニ有。儼然タリ天竺ノ古先生。

通釋 この寺には天竺の高僧無著・天親兄弟にも比すべき乘如禪師と蕭居士とが住してゐる。吾今來り訪へば天氣漸く晴れて嵩山の一峯が現れた。食事の時に磬を鳴らして寺僧會食の合圖をすれば、巢の中の烏まで下りて來て食を求め（德巢烏に及ぶ）地の靜寂なる歩して空林を踏めば唯落葉の聲がするばかりである。昔梁の景泰禪師は錫杖を地に立てた所が、忽ち泉が數尺も湧き上つたといふが、乘如禪師等も其れに劣らぬ德行のあることだから、水が迸出して香爐の机を濕すであらう。また梁の雲光法師が經を講じた時、天女が花をふらせたといふが、禪師等も天を感ぜしめて定めて石床を埋めるほど花をふらすであらう。更に進んで長松の聳ゆる深洞の中を見ると、ただ一軀の釋迦如來の像が儼然と立つてゐた。

語釋 石床（關中記に、嵩山ニ石室十餘孔アリ。）　○儼然（いかめし）　○天竺ニ古先生（釋迦如來をいふ。天竺は國の名。印度なり善ク無爲ニ入ルとある。）老子化胡經に、吾聞ク天竺ニ古皇先生アリ

奉レ和下聖製從二蓬萊一向二興慶一閣道中留春雨中春望之作上應制

李　憕

敍說 前に王維の此れと同じ題の詩があるから、それを參照せよ。

李憕は井州の人。左氏春秋に通ず。明經の高第に擧げられ、天寶の末、東京の留守に遷る。安祿山の爲に執へられ、害に遭うて死す。

別館春還淑氣催。三宮路轉鳳凰臺。
雲飛北闕輕陰散。雨歇南山積翠來。
御柳遙隨天仗發。林花不レ待曉風開。
已知聖澤深無限。更喜年芳入二睿才一。

別館春還つて淑氣催す、三宮路轉ず鳳凰臺。
雲飛んで北闕輕陰散じ、雨歇んで南山積翠來る。
御柳遙かに天仗に隨つて發し、林花曉風を待たずして開く。
已に知る聖澤の深うして阯無きを、更に喜ぶ年芳の睿才に入るを。

通釋 今や別館（留春閣を指して言ふ。）には春の和氣がめぐつて來た。（春の來たことと天子の留憩とを兼ねていふ。）蓬萊・興慶・望春の三宮に通ずる鳳凰臺（閣道を指して言ふ。）が眼下に回轉してゐる。やがて陰雲が飛散して宮城のあたりが晴れわたり、雨が歇んで終南山の翠色が手に取るやうに現れ、行幸の道筋の柳が儀仗兵の行列に隨つて綠を呈し、上林の花は曉の風を待だずに開いてゐる。既に天恩の深くして限なく、徧く草木に及べるを知り、更に春色が陛下の詩となつて光輝を發したのを喜ぶ次第である。

語釋 別館（興慶宮を指すと解する說あり。今取らず。）○淑氣（春の和氣。）○三宮（蓬萊宮は一殿にして三面ある故、蓬萊宮をいふと解く說あり。今取らず。）○北闕（宮城なり。）○南山（長安の南に在る終南山。）○積翠（疊綠といふが如し。）○御柳（天子の御通路植ゑてある柳。）○天仗（儀仗兵。）○不レ待二曉風一開（太平御覽に、唐の則天武后の詔を載せて曰く、明朝上苑ニ遊バン、火急ニ春ニ報ジテ知ラシヨ、花須ラク夜ヲ連ネテ　クベシ、曉風ノ吹クヲ待ツ莫レト。晨ヲ凌イデ名花皆發クと。この語當時に傳誦せられ、ここに之を用ひたのであらう。一本に晚風とあれども、今取らず。）○聖澤（天子の恩惠。）○年芳（春景色。）○睿才（天子のすぐれた文才。）

送二魏萬之一レ京

李頎

叙說 魏萬の長安に往くのを送る送別の詩である。

朝聞游子唱離歌。昨夜微霜初渡河。
鴻雁不レ堪二愁裏一聽。雲山況是客中過。
關城樹色催レ寒近。御苑砧聲向レ晚多。
莫是長安行樂處。空令三歲月易二蹉跎一。

朝に聞く游子の離歌を唱ふるを、昨夜微霜初めて河を渡る。
鴻雁愁裏に聽くに堪へず、雲山況や是れ客中に過ぐるをや。
關城の樹色寒を催して近く、御苑の砧聲晚に向つて多し。
是れ長安行樂の處、空しく歲月をして蹉跎し易からしむること莫からんや。

通釋 君は昨夜微霜を侵し黃河を渡つてここに來たばかりで、今朝は早くも一曲の別れの歌を歌つて此の地を去らうとする。あまりにあわただしき別れである。既に旅愁に鎖されて、鴻雁の聲を聞くに堪へなかつたであらう。況んや此れから雲山萬里の旅程に上ることであるから、君の苦況が思ひ遣られる。途中では關山の樹色は寒氣の迫るを感ぜしめ、いよ〳〵長安に到れば、御苑をめぐつて、砧聲の夜あちこちに響くのを聞くであらう。その時の君の悲みは果して如何ばかりであらう。だから長

安に着いたら愁を霽らすことを考へるもよいが、長安といふ處は繁華行樂の場所であるから、風流に溺れて徒に歲月を費し、悔を後日に遺すことのないやうにするがよい。

語釋 遊子（旅人。魏萬を指す。）　○離歌（旅立ちの歌。）　○愁裏（愁の中。）　○客中（旅行中。）　○關城（逓中の宿驛。）　○樹色（微霜の後に樹の葉の色の變つたこと。一本に曙色とあれども、寒を催して近しと云ふに適切ならず、且つ起句の朝の字と重複するから、樹色とある方がよい。）　○御苑（天子の御庭。）　○砧聲（きぬたの聲。）　○蹉跎（空しく時を過ごすこと。）

寄盧司勳員外

李頎

敍說 この詩は年末に洛陽を發して新年に長安に着いた盧司勳員外郎（司勳員外郎は吏部に屬し、官吏の勳級を掌る。）に寄せたのである。時に李頎は新鄉縣尉で洛陽にゐた。

流澌臘月下河陽。草色新年發建章。
秦地立春傳太史。漢宮題柱憶仙郎。

通釋 流澌（河の氷のとけること。）臘月（十二月をいふ。）に河陽（洛陽なり。）を下り、草色新年建章（漢の宮の名。）に發す。
秦地（長安をいふ。秦の地だから。）の立春は太史（昔の官名。）より傳へ、漢宮の題柱仙郎（卷四、酬蘇員外味玄晩夏寓直省中見贈の題漢柱ろ見よ。郎官なる故仙郎といふ。）を憶ふ。

歸鴻欲度千門雪。侍女新添五夜香。
早晩薦雄文似者。故人今已賦長楊。

通釋 歸鴻渡らんと欲す千門の雪、侍女新に添ふ五夜の香。
早晩か雄文似たりと薦むる者あらん、故人今已に長楊を賦す。

語釋 歸鴻（北に歸る雁なり。）　○千門（雁は春になれば北に歸るなり。）　○侍女（宮女。）　○五夜（五更。）　○早晩（いつか。）　○雄文（揚雄の文章。）　○似者（似たり。）　○故人（李頎自ら謂ふ。）　○長楊（漢の宮名。）

通釋 君は十二月のそろ〳〵河の氷の解め始める頃洛陽を立ち、新年になり若草の建章宮外に萌え出る頃長安に着いた。長安では太史が立春を天子に謁げ、君は其の當日尚書郎に任ぜられて、天子が君の風韻を感嘆したであらう。また建章宮の千門萬戸に雪の白き夜、北に歸る雁の聲を聽きつゝ當直すれば、侍女が朝早く起きて香を添へ、君の朝衣を薰ずるであらう。君の得意想ふべしである。昔漢の成帝の時、揚雄の文は司馬相如に似てゐると薦めた人があつたので、成帝は忽ち揚雄を召したといふが、君も程なく我を陛下に薦めるであらう。我は既に揚雄の長楊賦に劣らぬ文章を作る技倆を持つてゐるのだから。

語釋 流澌（河の氷のとけること。）　○臘月（十二月をいふ。）　○河陽（洛陽なり。）　○建章（漢の宮の名。）　○秦地（長安をいふ。秦の地だから。）　○立春（傳ニ太史ニ（禮記月令に、立春ニ先ダツコト三日、太史之ヲ天ニ謁ゲテ曰ク、某日立春ナリトとある。）　○漢宮題柱憶仙郎（卷四、酬蘇員外味玄晩夏寓直省中見贈の題漢柱ろ見よ。郎官なる故仙郎といふ。）　○歸鴻

（歸雁なり。）○千門（建章宮に千門萬戸あり。）○五夜（五更。今の午前四時頃。）○早晩（いつか。そのうち。）○故人（君の舊友といふ意で李頎自ら謂ふ。）○長楊（揚雄の作つた賦の名。）

題璿公山池

李頎

叙說 この詩は璿公（僧の名。僧を呼ぶには名の一字を略し公の字を添ふるを普通とす。詩中の遠公も惠遠の惠の字を略したのである。）の山池に題し、その高德をほめたのである。

遠公遁跡廬山岑。開士幽居祇樹林。
片石孤雲窺色相。清池皓月照禪心。
指揮如意天花落。坐臥閒房春草深。
此外俗塵都不染。唯餘玄度得相尋。

遠公遁跡す廬山の岑、開士幽居す祇樹の林。片石孤雲色相を窺ひ、清池皓月禪心を照す。如意を指揮して天花落ち、閒房に坐臥して春草深し。此の外俗塵都て染まず、唯玄度を餘して相尋ぬるを得しむ。

通釋 璿公の此の山池に居るのは、恰も晉の高僧惠遠が廬山の岑に遁世せしが如く、菩薩が祇陀太子の園に幽居せしが如くである。色相の觀ずべきは唯山中の片石孤雲のみ。禪心を照すものは唯清池皓月のみ。如意を把つて法を說けば天花亂れ落ち（前の過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若を參照せ。）常に閑室に坐臥して出ないから、階前の春草が人を沒する程伸びてゐる。この山池の邊は一切俗塵の來り染むなく、ただ許玄度にも比すべき我の來り訪ふを得るのみである。

語釋 遁跡（世を遁れること。）○廬山（江西省星子縣の西北、九江縣の南に在る山の名）○開士（菩薩なり。）○祇園（祇陀太子の園、嘗て佛の住せし所。）○色相（肉眼で見られる形。）○皓月（明月。）○指揮（ふりまはす。）○如意（僧侶の道具。玉鐵竹などにて造り、長さ一尺ばかり、心の表として之を執る。）○此外（此の邊の意。）○玄度（晉の許詢、字は玄度、高僧支道林と毎に相論難せり。李頎借りて自ら比す。）

寄綦母三

李頎

叙說 綦母三、名は潛、三は其の輩行である。時に潛は宜壽縣尉より洛陽縣尉に遷り、李頎は新鄉縣尉であつた。

新加大邑綬仍黃。近與單車向洛陽。

新に大邑を加へて綬仍黃なり、近く單車を與て洛陽に向ふ。

顧眄一過丞相府、風流三接令公香。
南川粳稻花侵縣。西嶺雲霞色滿堂。
共道進賢蒙上賞。看君幾歲作臺郎。

通釋 新に宜壽縣尉から洛陽縣尉にたつたのは、榮轉ではあるが、官位はもとの儘だから、印綬は相變らず黃色である。兎も角も君は近く單車に乘つて洛陽に赴任するであらう。洛陽には宰相などの顯官も多く居るから、一たび訪へば共の知遇を蒙ろやうにもなり、君は風流才士だから、中書令官名の座に陪して眷愛を受けるやうにもなるであらう。まして君は政治的手腕もあるから、治化成りて豐年に逢ひ、南川の粳稻の花が徧く一縣に及び、西嶺の雲霞の色が堂に滿つるといふやうな祥瑞をも呈するであらう。されば貴顯諸公が皆「賢人を進むれば上賞を蒙る」と言つて、君を進めるであらうから、程なく君の昇進して尙書郎となるを看るであらう。

語釋 大邑（大縣。洛陽縣を指して言ふ。）○綬仍黃（漢の制によれば丞尉は綠三百石で、銅印黃綬を帶ぶ。）○與二單車一（與は以と同じ。單車とは伴の者もつれずに唯一人で行くこと。漢書循吏傳に龔遂が渤海太守となり、單車獨り行くとある。）○顧眄（知遇を受けること。）○丞相府（宰相の役所。）○令公香（魏の荀彧、中書令となる。薰香を好み、其の坐する處常に三日香し。人令公の香と稱す。）○南川（地名。）○粳稻（うるち。）○進レ賢蒙二上賞一（史記灌何傳に、上曰ク我聞ク賢ヲ進ムレバ上賞ヲ受ク。蕭何ノ功高シト。乃チ鄂千秋ヲ封ジテ安平侯トナスとある。）○幾歲（程なくの意。）○臺郎（尙書を中臺といひ、その官なるをいふ。）

送二李冏一

敘說 李冏は司農丞の官に在り。司農は穀貨調度の事を掌るを以て、驪山行幸の供奉を仰せ付けられたのを送る詩である。

知君官屬二大司農一。詔幸二驪山一職事雄。
歲發二金錢一供二御府一。晝看仙液注二離宮一。
千巖曙雪旗門上。十月寒花輦路中。
不レ覩二聲明與一レ文物一。自傷留滯去二關東一。

知る君が官大司農に屬するを、驪山に幸せんと詔して職事雄なり。
歲ごとに金錢を發して御府に供し、晝に看る仙液の離宮に注ぐを。
千巖の曙雪旗門の上、十月の寒花輦路の中。
聲明と文物とを覩ず、自ら傷む留滯關東に去るを。

通釋　我固より君が大司農の屬官たるを知る。このたび詔あつて驪山に行幸することになり、供奉を仰せ付けられたから、君が職事は更に光榮を增したわけである。既に年年郡國の金錢を徵發して御府の用に供したが、今度は又每日灞泉の離宮驪山の華淸宮に流注するやうに檢察看視するのである。因つて想ふに、驪山の千巖の雪が曙光を帶びて旗門の上に照映し、十月の菊花が行幸の道筋に咲いてゐるのを觀るであらう。誠に羨ましいことである。自分はかゝる盛典に陪するを得ず、新鄕縣尉として下僚に沈淪し、去つて關東に在るのは、自ら傷まざるを得ない。

語釋　大司農（司農の長官。）　○御府（宮廷なり。）　○仙液（温泉なり。）　○旗門（旗を立てて門を表すなり。）　○聲明文物（左傳に、藏哀伯曰ク、文物以テ之ヲ紀シ、聲明以テ之ヲ發ス。火龍、黼黻ハ其ノ文ヲ昭ニスルナリ。五色比象ハ其ノ物ヲ昭ニスルナリ。三辰旂旗ハ其ノ明ヲ昭ニスルナリとあり。一本に聲名とあるは誤。）

宿鑒公禪房聞レ梵ヲ

李頎

叙說　鑒公も僧の名。名の一字を賂して公の字を添へたのである。前の題鑒公山池を見よ。　この詩は鑒公の禪室にとまつて梵唄聲を長く引いて經文を讀誦するなり。聲名ともいふ。を聞いたことを述べたのである。

花宮ノ仙梵遠微微。月隱二高城一鐘漏稀。
夜動二霜林一驚二落葉一。曉聞二天籟一發二淸機一。
蕭條已入二寒空一靜。颯沓仍隨二秋雨一飛。
始覺浮生無二住著一。頓令二心地一欲二歸依一。

通釋　夜更け月傾き鐘漏聲稀なる時、寺の梵唄の聲が遠くから微に聞えて來る。やがて其の聲が高調して來て霜林の落葉かと怪まれ、更に其の聲が澄み渡つて、天籟が我が淸淨なる心機を啓發するが如くである。已にして有るが如く亡きが如く遠く寒空に入りて滅え、忽ち又響を揚ぐること秋雨の飛ぶが如くである。梵唄の緩急疾徐一ならざるを聞いて忽ち浮生の定住ならぬことを覺り、我をして佛法に歸依しようとの心を起さしめた。

花宮の仙梵遠くして微微たり、月高城に隱れて鐘漏稀なり。
夜霜林を動かして落葉かと驚き、曉に天籟を聞いて淸機を發す。
蕭條として已に寒空に入りて靜に、颯沓として仍秋雨に隨つて飛ぶ。
始めて覺る浮生住著なきを、頓に心地をして歸依せんと欲せしむ。

語釋 花宮（寺をいふ。）○仙梵（梵唄なり。）○微微（かすかに聞えるさま。）○鐘漏（鐘や水時計の音。）○天籟（自然の聲。人工的の聲でないこと。）○清機（清淨なる心機。）○蕭條（淋しき貌。靜まるをいふ。）○住著（當住不變なること。）○頓（忽ち。俄に。）○浮生（定めなき人生。）○心地（心なり。）

贈盧五舊居

李頎

叙說 盧五は輩行。前に見ゆる盧司勳員外であらう。

盧五の舊宅に題した詩である。贈の字は題の字の誤であらう。

物在り人亡して見期無し、閒庭馬を繫ぎて悲みに勝へず。
牕前の綠竹空地に生じ、門外の青山舊時に似たり。
悵望すれば秋天墜葉鳴り、嶙峋たる枯柳寒鴟宿す。
君を憶うて淚落つ東流の水、歲歲花開くは知んぬ誰が爲ぞ。

通釋 君が舊宅を訪へば、器物などは今尙ほ存してゐるが人は既に死んで復見ることは出來ない。

青楓江上秋天遠。白帝城邊古木疎。
聖代卽今多二雨露一。暫時分レ手莫二躊躇一。

青楓江上秋天遠く、白帝城邊古木疎なり。
聖代卽今雨露多し、暫時手を分つて躊躇する莫れ。

通釋 君等が貶せられて此の都を去るのは如何ばかり悲しいか、吾も共に嗟嘆する所である。故に馬を駐め別れの杯を擧げて謫居の情を問ふ次第であるが、李君の行く巫峽は猿の多い處であるから其の聲を聞けば定めて涙を流すであらう。また王君の行く長沙の近くに在る衡陽には回雁峯といふ峯があつて、雁はこゝから南へは行かずに、更に北に歸るといふから、故郷からの音信も容易に得られまい。（昔漢の蘇武が雁の足に帛書を繋つて通信した故事に本づき、雁は通信の役目をする。）まして青楓江（長沙にある。）のほとり秋色の茫茫たるを見、白帝城（夔州にあり。）のあたり古木の蕭條たるを見ては、さぞ悲に堪へないであらう。併し聖明の御代は恩澤洽く臣下に及び、遠からず召還の恩命に浴するであらう。暫しの別れだから躊躇せずに行き給へ。

語釋 ○衙杯（酒を飲む。）　○巫峽（夔州に在り。三峽の一。漁歌に巴東ノ三峽巫長シ。猿鳴クコト三聲淚裳ヲ沾スとある。）　○數行（涙のぼろ〳〵と流れること。）　○衡陽（長沙の西に在る衡山の南。）　○幾封書（幾本の手紙。）　○卽今（只今。當今。）　○雨露（君の恩澤。）　○躊躇（しりごみする。）

夜別韋司士　高適

敍說　司士は官名、刺史の屬官に司士・參軍あり。これも送別の詩である。

高館張レ燈酒復清。夜鐘殘月雁歸聲。
只言ふ啼鳥堪レ求侶、無那春風欲レ送レ行。
黃河曲裏沙爲レ岸。白馬津邊柳向レ城。
莫レ怨他鄉暫離別。知君到處有二逢迎一。

通釋　夜高樓の上に送別の宴を設け、紅燈を張り清酒を酌み、覺えず夜をふかして曉の鐘を聞き殘月の影を仰ぎ、歸雁の聲をさへ聞くに至つた。鳥の啼くのは友を求めるのでなくて、友に別れて北に歸るのである。春風はもと行樂の時節である。然るに今高館燈を張りて酒復清く、夜鐘殘月雁歸る聲。
只言ふ啼鳥侶を求むるに堪へたりと、那ともする無し春風行を送らんと欲するを。
黃河曲裏沙岸と爲り、白馬津邊柳城に向ふ。
怨む莫れ他鄉暫く離別するを、知んぬ君が到る處に逢迎有るを。

語釋　高館（高樓といふが如し。）　○啼鳥堪レ求レ侶（詩經に、伐木丁丁、鳥鳴ク嚶嚶、幽谷ヨリ出デテ、喬木ニ遷ル。嚶トシテ其レ鳴キ、其ノ友生ヲ求メザランヤとある。）　○無レ那（いかんともするなきことが出來ない。悲むべき意。）　○白馬津（黎陽津ともいふ。太名府滑縣、夜の宴は送別の宴であつて行樂の宴ではない。況んや君一たび去れば、黃河の曲岸白沙際なく、白馬の津邊楊柳道を夾んで城に向ふ處に到るのであるから、悲に堪へないのである。併し旅は道連れ世は情で、他鄉暫く吾と離別するとも敢て怨恨せぬがよい。到處君を逢迎する人があるであらうから。

和賈至舍人早朝大明宮之作　岑參

敍說　前に王維の同じ題の詩がある。參照せられよ。

雞鳴紫陌曙光寒。鶯囀皇州春色闌。
金闕曉鐘開萬戶。玉階仙仗擁千官。

通釋　雞鳴いて紫陌曙光寒し、鶯囀じて皇州春色闌なり。
金闕の曉鐘萬戶を開き、玉階の仙仗千官を擁す。

花迎ニ劍佩一星初落。柳拂ニ旌旗一露未レ乾。
獨有ニ鳳凰池上客一。陽春一曲和皆難。

通釋 雞が鳴いて都大路の朝風が寒く、鶯があちこちに囀つて都の春は、今方に闌である。夜明の鐘が響き渡ると宮中の千門萬戸が一齊に開かれ、儀衞の兵士が玉階の下に整列して參內する百官を取り圍み、星の光が消えると俄に禁中の花が色を增して劍佩と相映じ、露のまだ乾かない宮裏の柳が旌旗を拂つて垂れてゐる。さて參朝の百官の中に中書舍人賈至といふ者があつて、非常な結構な詩を作つたが、惜しいかな誰も唱和することが出來ない。

語釋 紫陌（前の賈至の詩を見よ。）○皇州（帝都。）○金闕（金殿なり。）○萬戸（建章宮に千門萬戸あり。）○仙仗（儀仗の兵士。）○千官（百官。櫻桃川の勅賜の詩を見よ。）○鳳凰池上客（中書省を鳳凰池といふ。因つて中書舍人賈至を指す。）○陽春一曲（宋玉の對問に、客、郢中ニ歌フ者アリ。其ノ始ヲ下里巴人トイフ。國中屬シテ和スル者數百人。其ノ陽春白雪ヲナスヤ、國中屬和スル者數十人、是レイヨ〳〵高ケレバ其ノ和イヨ〳〵寡シとある。高尚な歌の意で賈至の原作を指す。）○和（唱和す。）

和ニ祠部王員外雪後早朝卽事一

岑參

敍說 祠部員外郎名王氏の雪後に「朝早く參朝する時の實況を詠じた詩」に和したのである。卽事とは其の場の景色を述べる意。

長安雪後似ニ春歸一。積レ素凝レ華連ニ曙輝一。
色借ニ玉珂一迷ニ曉騎一。光添ニ銀燭一見ニ朝衣一。
西山落月臨ニ天仗一。北闕晴雲捧ニ禁闈一。
聞道仙郎歌ニ白雪一。由來此曲和人稀。

通釋 長安の都の雪後の景色は丁度春の俄に歸つて來たやうで、草樹の上に白い華が積み重つて旭の光と相映じてゐる。雪の色は玉珂にまがうて騎して朝する者が迷ひ、雪は光を燭光に添へて朝衣が一入きらびやかである。殘月が西山に懸つて儀仗を照し、禁門が高く聳えて晴色が下から捧げてゐる

やうだ。（以上早朝の實景。）聞けば王員外は雪後參朝の實景に就いて結構な詩を作つたさうぢやが、元來そんな結構な詩は唱和する人が少いものぢや。僕の詩などは到底比べ物にはならない。

語釋 積レ素凝レ華（素は白なり。白い花を積み重ねる。）○曙輝（旭日の光。）○玉珂（くつわの玉の飾。）○銀燭（明なるともしび。）○朝衣（朝廷に出る時の官服。）○天仗（前の李嶠の詩を見よ。）○北闕（宮殿。）○禁闈（禁中の門。）○聞道（聞く所によれば。）○仙郎（前の岑參の和祠部員外郎雪後早朝即事に見ゆ。）○白雪（すぐれた詩、前の詩の陽春一曲を見よ。）○此曲（上の句の白雪の曲を指す。）

西掖省即事

岑參

叙說 西掖とは中書省をいふ。岑參は此の時右補闕（官名）となり中書省に出仕してゐた。この詩は中書省出仕の實況を述べたのである。

西掖重雲開二曙暉一。北山疎雨點二朝衣一。
千門柳色連二青瑣一。三殿花香入二紫微一。

西掖の重雲曙暉を開き、北山の疎雨朝衣に點ず。
千門の柳色青瑣に連り、三殿の花香紫微に入る。

平明端レ笏陪二鵷列一。薄暮垂レ鞭信レ馬歸。
宦拙自悲頭白盡。不レ如レ巖下掩二荊扉一。

通釋 朝早く參朝すれば、中書省のあたりは夜が纔に明け初め、北山の雨がまだ全く收らず、ポツ〳〵朝衣に落ち、垂柳の色は青瑣門と相映じ、蓬萊・興慶・望春三殿の花の香は禁裏まで漂つて來る。我は曉には笏を正し百官の行列に加はつて出仕し、夕には鞭を垂れ馬に信せて我が家に歸り、碌として日を送り、頭髪の白くなるまで下僚に沈淪してゐるのは悲みに堪へない。こんなことなら寧ろ巖穴の下に柴の扉を掩うて寢てゐる方がましである。

語釋 曙暉（旭日の光。）○朝衣（朝廷に出る時の服。）○千門（建章宮に千門萬戸あり。）○端レ笏（シャクを正しく持つ。）○鵷列（百官の行列。鵷の整齊にして順序正しきが如くなれば、かくいふ。）○青瑣（前の賈至の詩に見ゆ。）○殿（前の李嶠の詩の三宮に同じ。）○紫微（禁裏な り。）○平明（夜が明けてから。）○薄暮（夕方。）○宦拙（無能で昇進のおそいこと。）○白盡（ことごとく白くなる。）○荊扉（柴扉に同じ。）

九日使君席奉餞衛中丞赴長水

岑參

叙說 九日は前の崔署の詩に見ゆ。使君は刺史の稱。別宴の主人公。衛中丞は御史中丞衛氏。長水は河南の長水縣か。併し詩中に西出師とか胡塵とかいふ文字のある所から觀れば天水の誤かも知れない。天水ならば唐の隴西郡即ち漢の天水郡で、陝西省鞏昌府である。餞は送別の宴をいふ。

節使横行西出師。鳴弓擐甲羽林兒。
臺上霜威凌草木。軍中殺氣傍旌旗。
預知漢將宣威日。正是胡塵欲滅時。
爲報使君多泛菊。更將絃管醉東籬。

節使横行西師を出し、弓を鳴らし甲を擐く羽林の兒。臺上の霜威草木を凌ぎ、軍中の殺氣旌旗に傍ふ。預め知る漢將威を宣ぶる日、正に是れ胡塵滅せんと欲する時。爲に報ず使君多く菊を泛べ、更に絃管を將て東籬に醉はしめよと。

通釋 衛君は勇壯な兵士を率ゐ、節使となつて横行し、西の方軍を長水に出ださんとする。衛君は本來霜臺に在つて草木をも枯らす程の威力があつた。御史臺を霜臺といふ。故にかくいふ。まして武將となつたからには軍中の殺氣が旌旗に傍うて振ふであらう。されば君が大に威力を振へば胡兵の忽ち潰滅することは明である。誠に目出たい軍の門出だから、衛君の爲に特に注意するが、使君に於てはウンと菊花を酒に泛べ更に管絃を奏して歡を佐け、東籬の下に醉を盡さしめるがよい。

語釋 節使（天子から符節を賜はりて行く使者。）○出師（兵を出す。）○鳴弓擐甲（弓をならし甲冑を被る。勇壯な樣をいふ。）○羽林兒（禁衛の名。漢の武帝建章衛騎を置く。後名を羽林と改む。）○臺上（臺は御史臺。御史の役所。憲臺ともいふ。非違を糾察することを掌る。）○殺氣（ものすごきいきはひ。）○漢將（衛氏を持す。唐將といはないで漢將といふのは唐詩の常である。）○胡塵（えびすの兵の塵。）○絃管（管絃に同じ、樂器なり。）○東籬（東の垣根。陶淵明の詩に菊ヲ東籬ノ下ニ採リ、悠然トシテ南山ヲ見ルとあるので、菊の緣で東籬の字を用ひた。）

首春渭西郊行呈藍田張二主簿

岑參

叙說 首春は春の初。渭西は渭水の西。藍田は縣の名、長安の南に在る。春の初に渭西の郊外を散歩し、藍田縣主簿官名張二二は輩行に呈した詩である。

回風度雨渭城西。細草新花踏作泥。

回風度雨渭城の西、細草新花踏んで泥と作す。

秦女峯頭雪未盡。胡公陂上日初低。
愁窺白髮羞微祿。悔別青山憶舊溪。
聞道輞川多勝事。玉壺春酒正堪携。

秦女峯頭雪未だ盡きず、胡公陂上日初めて低る。
白髮を窺ふを愁へて微祿を羞ぢ、青山に別れしを悔いて舊溪を憶ふ。
聞道らく輞川勝事多しと、玉壺の春酒正に携ふるに堪へたり。

通釋 風雨一過の後、細草新花の泥となるをも厭はず、渭西の郊外を足に任せて歩きまはつた。秦女峯（藍田に在り。）の頂にはまだ雪が全く消えず。胡公陂（藍田の西。鄠縣に在り。）のあたり日は既に傾いた。因つて思ふに余も既に人生の暮に迫り、自ら白髮を窺ひ見るを恐れては卑官に在るを羞ぢ、住み慣れた青山を去つて官界に足を入れたことを悔いては、舊廬を戀ふの情に堪へない。聞けば君の居る藍田の輞川には景色のよい處が多いさうだが、春酒を携へて倶に勝地に遊び、憂悶を霽らさうではないか。

語釋 回風度雨（風雨が過ぎ去つたこと。）○渭城（一名。長安の東に在り。）○微祿（少しの俸祿。官位の低いこと。）○舊溪（もとのタニ。舊廬といふが如し。）○聞道（聞く所に據れば。）○勝事（勝地に同じ。景色のよい處。）○玉壺（金樽といふが如し。）

暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬

岑參

叙說 春の末に虢州（卷四、岑參の詩に見ゆ。）の東亭で李司馬（司馬は官名。）が扶風（陝西省鳳翔府）の別宅に歸休するのを送つた詩である。

柳嚲鶯嬌花復殷。紅亭綠酒送君還。
到來函谷愁中月。歸去磻溪夢裏山。
簾前春色應須惜。世上浮名好是閒。
西望鄉關腸欲斷。對君衫袖淚痕斑。

柳嚲れ鶯嬌びて花復殷たり、紅亭綠酒君が還るを送る。
到來函谷愁中の月、歸去磻溪夢裏の山。
簾前の春色應に須く惜むべし、世上の浮名好是閒なり。
西鄉關を望めば腸斷えんと欲す、君に對して衫袖淚痕斑なり。

通釋 柳條垂れ、鶯語嬌び、花紅なる暮春の時節に、東亭に綠酒を酌んで君の故鄉に歸るのを送

る。君は從來函谷（虢に在り。）に客居し、月に對して愁を生じ、歸心を起したであらうが、今乃ち夢寢の間にも思慕してゐた磻溪（扶風に在り。）の青山に歸るのである。今や春の末で簾前の春色將に盡きんとしてゐる。これこそ大に惜むべきである。それに比すれば世間の浮名などは等間に付して宜しいので、敢て惜むには足らない。君が官を辭して故山に歸臥するのは誠に當を得た仕方である。所が僕は今以て足を洗つて歸休することが出來ないので、西、故鄕の空（岑の家は杜陵に在り、扶風と鄰す。）を望んで斷腸の思をなし、君に對して袖の涙を絞る次第である。

語釋 殷（赤き意。音はアン。）○紅亭（裝飾した亭。即ち題の東亭なり。）○浮名（浮いた名譽。）○間（等間なり。なほざりにすること。）○鄕關（故鄕。）○衫袖（うはぎの袖。）○涙痕斑（點點と涙のあとが殘ること。）

萬歲樓

王昌齡

敍說 萬歲樓は鎭江府城（唐の潤州）の西南隅に在り。晉の刺史王恭の建てたものである。この詩は王昌齡が江寧縣丞たりし時の作であらう。

江上巍巍萬歲樓。不知經歷幾千秋。

江上巍巍たり萬歲樓、知らず經歷幾千秋ぞ。

年年喜見山長在。日日悲看水獨流。
猿狖何曾離暮嶺。鸕鷀空自泛寒洲。
誰堪登望雲煙裏。向晩茫茫發旅愁。

年年喜び見る山長へに在るを、日日悲み看る水獨り流るゝを。猿狖何ぞ曾て暮嶺を離れん、鸕鷀空しく自ら寒洲に泛ぶ。誰か登望に堪へん雲煙の裏、晩に向ひ茫茫として旅愁を發す。

通釋 長江の上に巍然として萬歲樓が聳え、その創建以來幾千年を經たかを知る者なく、誠に萬歲の名に負かない。從來この樓に登つた者は山の長へに存するを見て喜び、水の一たび逝いて還らないのを見て悲んだであらう。なるほど山は勿論、山中の猿ですら常に暮嶺を離れず安住の地を得てゐるが、水上の鸕鷀（水鳥の名）は處定めず寒洲の間に漂泊してゐる。（鸕鷀を以て自ら比す。）余は、夕に此の樓に登つて雲煙の茫茫たるを望み、旅愁のむら〳〵と起るに堪へない。

語釋 巍巍（高く聳ゆる貌。）○幾千秋（幾千年。）○猿狖（さる。）○向晩（ゆふがた。）○茫茫（ひろ〴〵としてゐる貌。）○旅愁（旅のかなしみ。）

題張氏隱居

杜甫

叙說　李白の傳に、白少うして魯中の諸生張叔明・孔巢父等と徂徠山（山東省泰安縣の南四十里に在り。）に隱居し、竹溪六逸と稱すとあり、この張氏は或は張叔明ではあるまいか。この詩は張氏の隱居を訪うて其の壁に題したのである。

春山無伴獨相求。伐木丁丁山更幽。
澗道餘寒歷氷雪。石門斜日到林丘。
不貪夜識金銀氣。遠害朝看麋鹿遊。
乘興杳然迷出處。對君疑是泛虛舟。

通釋　道連れもなく唯獨り、春、山に入りて吾が友張氏を訪へば、木を伐る音のトン〳〵と聞えるのが一入山の靜けさを感ぜしめる。餘寒の尙ほ殘つてゐる澗道の氷雪を踏み、夕日の西に傾く頃、林丘の中なる張氏の隱居の石門に着いた。慾心が深いと慾の爲に智慧の目がくらんでしまふが、張氏は春山伴無く獨り相求むれば、伐木丁丁として山更に幽なり。
澗道の餘寒氷雪を歷、石門の斜日林丘に到る。
貪らずして金銀の氣を識り、害に遠ざかりて朝に麋鹿の遊ぶを看る。
興に乘じ杳然として出處に迷ふ、君に對して疑ふ是れ虛舟を泛ぶるかと。

無慾だから、靜夜、山中に金銀の氣のあることを識り、又排擠爭鬪息む時なき世間の危害を避けて朝に麋鹿の羣居輯睦する樣を眺めてゐる。實に高潔の士と謂つて宜しい。君と共に語り合へば吾が心も杳然と虛淡になつて出處進退に迷ひ、虛舟を泛べたるが如く何等の執着もなくなつた。

語釋　無伴（道連れのないこと。）　○相求（張氏を尋ねる。）　○伐木丁丁（木を伐る音のトントンと響くこと。詩經に伐木丁丁、鳥鳥クコト嚶嚶、嚶トシテ其レ鳴キ、其ノ友ヲ求ムル聲ヲヌとある。故に上の相求むを受けて伐木丁丁と受けたのである。）　○澗道（谷間の道。）　○石門（自然の石を二本立てて作つた張氏の門、山の名と解するは誤。）　○斜日（西に傾いた日。）　○不レ貪（無慾なこと。左傳に、宋子罕曰ク、吾貪ラザルヲ以テ寶トナスとあり。）　○金銀氣（史記天官書に、敗軍亡國ノ墟、下ニ金寶ヲ積メバ、上皆氣アリとある。）　○遠レ害（世間の危害を超脫する。晏子春秋に、孔子曰ク、能ク害ニ遠ザカルト謂フベシとある。）　○杳然（廣くかすかなる貌。）　○出處（出でて仕ふべきか、退いて隱るべきか。）　○虛舟（人の乘つてゐない舟。莊子に舟ヲ方ベテ河ヲ濟ル。虛舟アリ來リテ舟ニ觸ル。褊心ノ人ア人ヨク己ヲ虛ウシテ以テ遊ベバ、ソレ孰カ能ク之ヲ害センとある。）

宣政殿退朝晩出左掖

叙說　宣政殿は大明宮の後に在り。天子毎日ここに出御して群臣を見る。之を常參といふ。左掖は其の東側の小垣門である。宣政殿から退出して夕に東の垣門を出て門下省に歸る時の詩で、杜甫が拾遺官として門下省に勤めてゐた時の作である。

杜甫

天門日射黃金榜。春殿晴曛赤羽旗。
宮草菲菲承委珮。爐煙細細駐游絲。
雲近蓬萊常五色。雪殘鶺鴒亦多時。
侍臣緩步歸青瑣。退食從容出每遲。

通釋 夕日が宮門の黃金で飾つた懸額を照し、春晴の晩氣が宣政殿の朱雀を畫いた旗に閃いてゐる。宮庭の綠草が香氣を發して、佩玉の垂るるを承け、香爐の煙が細細と上つて遊絲に代り、雲は蓬萊宮に近く五色の瑞を呈し、雪は鶺鴒觀に殘つて久しく消えない。吾は天子の侍臣であるから青瑣門から引出して歸ることが毎に遲い。

語釋 天門(宮門。) ○赤殿(春は時節を示す。宣政殿を指す。) ○曛(日の暮れかかること。) ○赤羽旗(朱雀旗。) ○宮草(宮庭にはえてゐる草。) ○菲菲(草の茂る貌。) ○委珮(委は垂れて地に委するなり。珮は佩玉。腰に佩びる玉。) ○遊絲(かげろふ。庭から立ち上た方しき貌。) ○蓬萊(宮の名。大明宮とも漢の時の觀の名。今漢代のものを借用したのである。) ○侍臣(杜甫自ら謂ふ。) ○青瑣(前の置室の詩に見ゆ。卽ち入掖なり。) ○退食(役所から退出すること。詩經に退食公ヨリス委蛇委蛇ダリとある。) ○從容(ついてゐる貌。)

紫宸殿退朝口號

杜甫

綱說 紫宸殿は宣政殿の後に在り。ここは天子の便殿である。朔日一望十五に食を諸陵寢祖先の廟に薦むる時、天子ここに出御して群臣を見る。之を入閣といふ。口號とは口づから吟ずること、紫宸殿から退出する時口ずさんだ作である。

戶外昭容紫袖垂。雙瞻御座引朝儀。
香飄合殿春風轉。花覆千官淑景移。
晝漏稀聞高閣報。天顏有喜近臣知。

戶外の昭容紫袖垂る、御座を雙瞻して朝儀を引く。
香は合殿に飄つて春風轉じ、花は千官を覆うて淑景移る。
晝漏聞くこと稀にして高閣より報じ、天顏喜有りて近臣知る。

宮中每出歸東省會送夔龍集鳳池

通釋　二人の昭容が殿戸の左右に對立し、腰を屈め紫袖を垂れて朝臣の殿に升るのを迎へ、玉座を瞻望し朝臣を引導し、其の位に就いて拜謁せしめる。春風徐に回轉して御爐の香が滿殿に漂ひ、日光漸く移りて花は千官を覆ふ。紫宸殿は最も奥まつた處で晝漏（水時計。）の聲を聞くことも稀なる故、外廷高閣より時を報じ、天子の御顏に喜あれば吾吾近臣のみんを知ることが出來る。さて朝見の式が終り宮中から退出して門下省に歸る時には、先づ一旦古の夔・龍にも比すべき宰相を會送して中書省に集るのを常とする。吾は拾遺の微官にこそ在れ、每日かかる光榮ある仕事に奉仕するのは幸の至である。

語釋　昭容（女官なり。九嬪の一。朔臣の殿に升る者を引導し、天子の出御を待ち、拜謁の儀を行はしむることを掌る。）　○引ニ朝儀一（朝臣百官を引導し之をして拜謁の儀を行はしめる。）　○千官（百官といふが如し。）　○淑景（日光なり。）　○晝漏（晝の水時計。漏壺なり。）　○高閣（紫宸を指すといふ說あり。今取らず。）　○天顏（天子の御顏。龍顏ともいふ。）　○東省（左掖、卽ち門下省。杜甫は拾遺の官に在り。門下省に屬す。故に朝儀罷めば己の役所に歸るなり。）　○會送（百官が集り送るなり。）　○集ニ鳳池一（中書省を鳳凰池といふ。前に見ゆ。唐の制に、省臣中書を尊しとなす。三省の群僚必ず丞相を會送して中書に至り、然る後分散するなり。）　○紫袖（紫の袖。）　○雙瞻（二人ならんで仰ぎ見る。）　○御座（玉座。）　○夔・龍（共に舜の臣なり。ここには借りて宰相を指す。）

曲江對レ酒

敍說　曲江は長安の芙蓉苑の北に在る遊賞の地なり。肅宗の至德二載十月、宰相房琯安祿山の軍と戰つて陳濤斜に敗れ、遂に相を罷む。杜甫上書して之を救ひて帝の意に忤ひ、翌乾元元年六月、終に出されて華州司功參軍となる。この詩は乾元元年春の作で、仕進に困んで意緖煩亂してゐる狀が見える。前半は曲江の叙景、後半は自身の述懷。

苑外江頭坐不レ歸。水晶宮殿轉霏微。
桃花細細逐レ楊花一落。黃鳥時時兼二白鳥一飛。
縱飮久拌人共棄。懶朝眞與レ世相違。
吏情更覺滄洲遠。老大徒傷未レ拂レ衣。

杜甫

苑外の江頭坐して歸らず、水晶の宮殿轉た霏微。
桃花細に楊花を逐うて落ち、黃鳥時に白鳥と飛ぶ。
縱飮久しく拌して人共に棄て、懶朝眞に世と相違ふ。
吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを、老大徒に傷んで未だ衣を拂はず。

通釋　芙蓉苑の北の曲江の頭にどつしりと坐り込んで歸るのを忘れてゐる。醉眼を擧げて苑中の宮殿を望めば、江上の波と相映じて眼前にちらつき、桃の花や柳の花がチラ〳〵と落ち、黃鶯と白鷺とが相雜つて飛んでゐる。（以上の四句、俱ニ醉ノ字ヲ題シテ內ニ在リ、宜シク細玩スベシと津阪東陽が言つてゐる。今その說に從つて解す。）世にも用ひられ人にも知られねば、酒をもひかへ人柄をも愼むのであるが、人に棄てられてゐるから、やけになつて大酒を飮み、自ら身を棄ててゐる。既に世と合はないから、宮仕へに勤める心も失せて參朝するのが大儀である。日に吏情に遠ざかりて隱退しようとは思ふが、滄洲の更に遠きを思ひ、勇退することも出來ずに、老の身を以て獨り自ら悲んでゐる。

語釋　○苑外（苑は芙蓉苑。）　○江頭（江は曲江。頭はホトリ。）　○水晶宮殿（宮殿の立派なこと。）　○轉（いよ〳〵。看る。などの意。）　○霏微（はつきりとかないこと。ちらつくなり。一說に暮色なりといふ。今取らず。）　○拌（捨、或は判、或は拚に作る。正字通に拌ヲ捨棄スルトイフとある。）　○懶朝（朝廷に出勤するがものういこと。）　○吏情（宦情なり。官吏として榮達を計る心。）　○拂レ衣（官を辭し衣を拂つて去る。）　○兼ニ白鳥ニ（兼はトと訓ず。）　○縱飮（酒をほしいままに大酒を飮むこと。）　○滄洲（仙境なり。海外十洲の一。江湖といふが如し。歸隱の地をいふ。）　○老大（老身なり。）

餘論　桃花細逐ニ楊花ニ落の桃花と楊花と相對し、黃鳥時兼ニ白鳥ニ飛の黃鳥と白鳥と相對する。かくの如く一句の中で對句を成してゐるのを當句對といふ。

九日藍田崔氏莊

敍說　九月九日、重陽の節句（前の崔署の詩を見よ。）に、藍田（縣の名。前の岑參の詩に見ゆ。）の崔氏の山莊に酒宴した時の詩である。

老去悲秋强自寬。興來今日盡君歡。
羞將短髮還吹帽。笑倩傍人爲正冠。
藍水遠從千澗落。玉山高並兩峯寒。
明年此會知誰健。醉把茱萸仔細看。

通釋　老いては殊に悲秋の感に堪へないけれど、つとめて自ら紛らしてくよ〳〵しないやうにしてゐる。今日は君（崔氏を指す。）の盛宴に陪し、大に感興が湧いて十分の歡を盡し、冠を風に吹き飛ばされて禿頭を人に見られるのも恥かしく、笑つて傍の人に賴んで冠をかぶせてもらふなどの狂態まで演じ

た。この山莊から眺むれば、藍水川の名。は遠く千澗の水を集めて落ち來り、玉山藍田山には美玉を產する。故に玉山といふ。は高く他の二峯と並んで寒げに聳えてゐる。さて山水は常住不變であるが老少不常は世の習である。山水を覩るにつけ思ひ出されるのは此の事だ。今年はかうして樂んでゐるが、來年の重陽の會には此の中で誰が健在でゐるであらう。吾の如き老人は最も覺束ない方だと思ひ、再び見ることは出來まいと氣遣つて。腰こ佩びてゐる茱萸を把り、醉眼を定めてシミ〴〵と看た。

語釋 悲秋 楚辭に悲シイカナ秋ノ氣タルヤ、蕭瑟タリ、草木搖落シテ變衰スとある。）○自寬（自ら心を廣く持つこと。）○短髮（はげあたま。）○吹レ帽（晉孝桓溫荊州ニ鎭ス。九日從ツテ龍山ニ宴ス。風嘉ノ帽ヲ吹キ落ス。溫孫盛ニ命ジテ之ヲ嘲ラシム。嘉紙ヲ取ヒテ答ヲ作リ、擧止自若タリとある故事を用ふ。）○千澗（澤山の谷川。）○知誰健（誰が健在であるかわからないとの意。知は知らずの意。卷一の草廬物の幽居の不知を見）○仔細（つくづくと。よく。）○シミ〴〵と。）

餘論 羞將ニ短髮一還吹レ帽と笑倩ニ傍人一爲正レ冠とは對句を成し且つ意味が連續してゐる。これを流水對といふ。

野望

敍說 肅宗の寶應元年、杜甫が成都の浣花草堂にゐた時、無聊のあまり馬に跨り郊を出で、物淋しき四方の景色を眺めて作つた詩で、一に望野と題するは誤である。

杜甫

西山白雪三城戍。南浦清江萬里橋。
海內風塵諸弟隔。天涯涕淚一身遙。
唯將ニ遲暮一供ニ多病一。未有ニ涓埃一答ニ聖朝一。
跨レ馬出レ郊時極レ目。不レ堪ニ人事日蕭條一。

通釋 仰げば西山（成都の西に在り、雪山と名づく。）の白雪皚皚たる中に三個の城寨が聳えてゐる。南浦の清江に萬里橋が橫はつてゐる。思へば打ち續く戰亂の爲に諸弟と離散し、天涯の孤客となつて、淚の中に日を送り、衰老の身は病がちで、皇恩の萬分の一にも報いることが出來ない。無聊のあまり馬に跨つて郊を出で、遙に四方を見渡せば、世間の樣子が日增に淋れ行くやうに見えて、少しも吾が心を慰めるに足らない。

登樓

語釋　三城戍（戍は守る意。三個の城。松城・維城・保城なり。吐蕃の入寇を防ぐ爲に設く。）　○南浦（浣花溪の南。）　○清江（錦江なり。）　○萬里橋（錦江に架する橋の名。昔諸葛亮が費禕の吳に使するを送りてここに至り、萬里の行此に始まると言つたので此の名が起つたといふ。）　○海內（天下中。上の萬里の緣である。）　○風塵（戰亂をいふ。）　○遲暮（衰老ことで、微少の意。）　○聖朝（聖天子。）　○人事（正事なり。）　○蕭條（物淋しき貌。）

紋說　代宗の廣德元年十月、吐蕃の兵京師を陷れ、代宗は難を避けて陝西に幸し、郭子儀、恢復の功によつて纔に還幸することが出來た。併し吐蕃の勢は尙ほ猖獗を極め、蜀邊を侵擾して松・維・保の三城（前の野望の詩を見よ。）を陷れた。この詩は廣德二年春、杜甫蜀の成都に在り、樓に登りて眺矚し、感慨を逃べたのである。

花近高樓傷客心。萬方多難此登臨。
錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今。
北極朝廷終不改。西山寇盜莫相侵。
可憐後主還祠廟。日暮聊爲梁甫吟。

通釋　高樓の近くに花が咲いてゐる。世が世ならば花は心を慰むるものであるが、處處方方に戰亂のある今日は、樓に登つて花を見れば却つて客心を傷ましめる。今や春色天地に滿ちて錦江のあたりの風景は昔に變らないが、玉壘山上の浮雲は去來定りなく、古今の盛衰變化を示すものの如くである。併し天は我が唐室に幸して、吐蕃の兵が一旦は都を陷れても、終に變改顚覆することがなかつたのであるから、西山（雪山ともいふ前の詩を見よ。）を侵すことなどはやめるがよい。蜀の後主は亡國の君でも人民は永く其の遺德を忘れないので、猶ほ廟祀せられて現に其の祠が樓下に見える。亡國の君でも人民は永く其の遺德を忘れないのであるから、まして我が堂堂たる唐室に於ては、ただ蜀の忠臣諸葛亮の如き人物を得れば、國家の中興は期して待つことが出來る。因つて日暮に梁甫吟を爲して忠臣の出現を冀つた。

語釋　客心（旅の心。）　○萬方（諸方といふが如し。）　○多難（戰亂のあること。）　○登臨（樓に登つて四方を眺める。）　○錦江（蜀の成都の川の名。）　○玉壘（山の

名、蜀の漢縣の西北に在る。）○北極（北極星、ここでは長安を指す。）○西山（蜀の野望の詩を見よ。）○寇盜（吐蕃を指し、時に迷ひ、國勢爲に衰へ、遂に魏に滅さる。）○梁父吟（諸葛亮は好んで梁父吟をなせりと傳ふ。）

秋興四首

敍說 もと八首あり。ここには四首を選出したのである。秋興とは秋に因りて感興を起したといふ意。皆時事を慨したもので、夔州にゐた時の作である。

玉露凋傷楓樹林。巫山巫峽氣蕭森。
江間波浪兼天涌。塞上風雲接地陰。
叢菊兩開他日淚。孤舟一繫故園心。
寒衣處處催刀尺。白帝城高急暮砧。

通釋 秋になり、白露が下つて楓樹の林（この邊には楓樹が多いのである。）を凋傷し、巫山や巫峽のあたりは一帶に蕭條として物淋しく、長江の波浪（上の巫峽を受けて言ふ。）は天に連つて騰り、塞上の風雲（上の巫山を受けて言ふ。）は地に接して暗い。叢菊は再び開いて去秋と同じく懷鄕の涙を灑がしめ、吾が乘る孤舟は故鄕を思ふ心を繫ぎ留め、一たび泊して復移らない。今や冬着の用意に忙しい時節であるが、旅の空にさまよつて冬着の用意もない身には、白帝城の高く聳ゆるのを眺めつつ、夕方砧の聲の處處に鳴りしきるのを聞くのは、堪へられぬ悲しみである。

語釋 玉露（秋になつて降る白露。）○凋傷（葉をしぼませる。）○楓樹（楓樹の多いのである。）○巫山（夔州に在る山。）○巫峽（前の高適の詩に見ゆ。）○蕭森（淋しき貌。）○塞上（巫山の上の城塞。）○他日（異日といふに同じ。）○故園（故鄕。）○寒衣（冬着。）○暮砧（夕方の砧の聲。）○刀尺（剪刀やモノサシ。裁縫の道具。）○白帝城（前の高適の詩に見ゆ。）

其二

千家山郭靜朝暉。日日江樓坐翠微。

通釋 千家の山郭朝暉靜なり、日日江樓翠微に坐す。

信宿漁人還泛泛。清秋燕子故飛飛。
匡衡抗レ疏功名薄。劉向傳レ經心事違。
同學少年多不レ賤。五陵衣馬自輕肥。

通釋 千戸の民家の集團たる夔州の城下をば旭の光が靜に照してゐる。余は毎日山の半腹に在る江樓に坐して此の景色を眺めてゐる。泊りがけの漁父は眼下に泛泛として去らず、燕は秋になつては南に歸るべきのに、わざと歸らずに飛びまはり、恰も吾が飄泊して歸らざるが如くである。吾は漢の匡衡のやうに上書して、房琯を救はんとしたが却つて貶黜の憂目に遇ひ、又漢の劉向のやうに經術を修めたが志業竟に成らず。尾羽打ち枯らしてゐるが、昔の同窓の友たりし五陵の少年は、今多くは顯榮の地位に登り、肥馬に乘り輕裘を衣て富貴を極めてゐる。

語釋 朝暉(旭の光。) ○江樓(長江のほとりの樓。) ○翠微(山の中腹をいふ。) ○信宿(再宿を信といふ。雜日めとまること。) ○泛泛(いつまでもただよつてゐる。) ○飛飛(飛ぶこと。) ○匡衡(漢の人。上書して政を論じ、進んで光祿大夫となる。) ○抗レ疏(上書する。) ○劉向(漢の人。五經を講論して用ひらる。) ○五陵(卷一岑參の詩に見ゆ。この邊は長安の郊外に在りて、貴族の住む處である。) ○輕肥(論語に肥馬ニ乘リ輕裘ヲ衣ルとあり。)

其三

蓬萊宮闕對南山。承露金莖霄漢間。
西望瑤池降王母。東來紫氣滿函關。
雲移雉尾開宮扇。日繞龍鱗識聖顏。
一臥滄江驚歲晩。幾回青瑣點朝班。

通釋 蓬萊宮は高く終南山と相對し、承露の金莖は雲の上に聳えてゐる。西の方の瑤池には西王母が降り、楊貴妃册立の盛典をいふ。按ずるに開元二十八年十月、玄宗驪山の温泉宮に幸し、高力士をして楊氏の女を壽王の邸より取らしめ、度して女道士となし、太眞と號す。天寶四載七月册して貴妃となす。瑤池は温泉宮に喩へ、王母は楊貴妃に喩へたのである。仙女の名。

蓬萊の宮闕南山に對す、承露の金莖霄漢の間。
西望すれば瑤池王母降り、東來の紫氣函關に滿つ。
雲移りて雉尾宮扇を開き、日繞りて龍鱗聖顏を識る。
一臥滄江歲晩に驚く、幾回か青瑣朝班に點ぜし。

東の方からは紫の仙氣が來て函谷關に滿ち渡つた。（老子を祀つた盛典をいふ。唐老子を以て大聖祖となし、玄元皇帝に封ず。唐書玄宗紀に、天寶元年玄元皇帝丹鳳門に降る。帝卽ち新廟に享し二年昇仙宮を作るとある）是れ皆帝都長安の偉觀である。我も嘗て長安にゐて、雲の移るが如く雉尾扇が開き去つて天子が出御になり、その御前に伺候して瑞日の繞る所に龍顏を拜したものであつた。然るに今や一たび夔州に病臥して復歸るを得ず、年の將に晩れんとするに遇ひ、これが以前は幾度となく宮門に出入し、朝臣の位に列した身だとは自分ながら思はれず、坐に驚嘆する次第である。

語釋 蓬萊（長安の宮の名。大）○南山（長安の南に在る終南山。）○承露金莖（巻二、長安古意の）○霄漢（天空。）○瑤池（仙境の）○王母（仙女西王母。列子に周ノ穆王駕ヲ命ジテ遊遨シ、崑崙ノ丘ニ升リ遂ニ西王母ニ賓シ、瑤池ノ上ニ觴スとある。）○東來紫氣（列仙傳に、老子西遊ス。函谷關ノ令尹喜先ヅ東來ノ紫氣アルヲ見、眞人ノ當ニ此ヲ過グベキヲ知ルとある。）○函關（函谷關。）○雉尾（八子朝に臨む時は雉尾扇を以て左右を擁障し、坐定まれば乃ち開き去る。ともいふ。）○宮扇（卽ち雉尾扇。殿の雨廂に設けて直接に龍顏を拜することの出來ぬやうにするもの。）○聖顏（天子の御顏、龍顏は加はる意。）○滄江（あを〳〵とした長江。ここは其の邊にある夔州を指す。）○歲晩（年の暮れること、身の老ゆるを兼ねていふ。）○靑瑣（前の賈至の詩に見ゆ。）○點ニ朝班ニ（朝班は朝臣の列位。點は加はる意。）

其四

昆明池水漢時功、武帝旌旗在眼中。

昆明池水漢時の功、武帝の旌旗眼中に在り。

織女機絲虛夜月、石鯨鱗甲動秋風。

織女の機絲夜月に虛しく、石鯨の鱗甲秋風に動く。

波漂菰米沈雲黑、露冷蓮房墜粉紅。

波菰米を漂はして沈雲黑く、露蓮房に冷にして墜粉紅なり。

關塞極天唯鳥道、江湖滿地一漁翁。

關塞極天唯鳥道、江湖滿地一漁翁。

通釋 長安の昆明池は漢の武帝の開鑿したもので、當時水戰を習ふに用ひた旌旗は、今尙ほ眼に見えるやうである。併し池の邊の織女石や石鯨も今は空しく夜月に照され、秋風に鱗甲を動かし、池上の波は菰米を漂はして其の色沈雲の黑きが如く、露は蓮の實にかかつて紅の花が凋落してゐるであらう。一たび長安に歸つて此等の景色をも見たいと思ふが、夔州のあたりは何處を見ても山ばかりで、纜に鳥の通ふ道が通じてゐるのみであるから、歸らん由もなく、我が身は處定めず漂流する漁父のやうである。

語釋 昆明（漢の武帝の時此の池を開いて水戰を習はしめた。）○織女（昆明池の東西の岸に石を立てて牽牛・織女の像を刻し、以て天河に象つた。）○石鯨（西京雜記に、昆明池ニハ玉石ヲ刻ンデ鯨魚トナス。雷雨ニ至ル毎ニ常ニ鳴吼ス。漢ノ世之ヲ祭リテ以テ雨ヲ祈ルとある。）○菰米（菰は草の名。水中に生じ秋に至れば實を結び米の如し。其の皮黑褐色なり。）○蓮房（に過ぎない。）

（蓮の實。）○墜粉紅（實が結べば花は凋落するものである。墜粉紅は紅の花の凋落すること。）○關塞（夔州地方を指して言ふ。）○極天（見渡すかぎり。）○江湖滿地（到る處とか處處とかいふ意。）

吹笛

杜甫

叙說 夔州にゐる時、夜吹笛の聲を聞き故鄉を思うた詩である。

吹笛秋山風月清。誰家巧作斷腸聲。
風飄律呂相和切。月傍關山幾處明。
胡騎中宵堪北走。武陵一曲想南征。
故園楊柳今搖落。何得愁中却盡生。

笛を吹いて秋山風月清し、誰が家ぞ巧に斷腸の聲を作す。
風は律呂を飄して、相和すること切に。
月は關山に傍うて幾處か明なる。
胡騎中宵北走するに堪へたり、武陵の一曲南征を想ふ。
故園の楊柳今搖落す、何ぞ愁中却つて盡く生ずるを得たる。

通釋 風月清寒なる秋の夜に笛を吹いてゐる者がある。笛の主は誰だか知らないが、巧に人をして斷腸の思を起さしめる。風は笛聲の律呂を飄揚して其の應和すること悽切を極め、月は遍く關山を照して幾處の旅客を愁べしめるであらう。中夜に此の聲を聞けば胡騎をして北走せしめ、又武陵深の一曲を聞けば人をして馬援南征の苦艱を想はしめる。さても吾が故鄉の楊柳は今既に凋落してゐるであらうのに、どうして今更盡く枝葉を生じて、我をして愁へしめるのであらう。（折楊柳といふ笛曲があるので、其の意を翻案してかくいうたのである。）

語釋 誰家（誰といふ意。）○律呂（音調をいふ。）○關山（關所や山。關山月といふ笛曲がある。暗に其れを用ひたのである。）○胡騎（えびすの騎兵。卷三、胡笳曲の掩涙歸を見よ。）○武陵一曲（武陵深の曲。後漢の馬援南武陵蠻を征す。門人袁寄生善く笛を吹く。援歌を作りて以て其の曲に和し、武陵深と名づく。）○故園（故鄉。）○搖落（秋に遇ひて凋落する。）

閣夜

杜甫

叙說 杜甫夔州に在り夜閣に登つて此の詩を作る。時に荊羌諸蠻の侵擾、漢州刺史崔旰の亂などがあつた。

歲暮陰陽催短景。天涯風雪霽寒霄。

歲暮陰陽短景を催し　天涯の風雪寒霄霽る

五更鼓角聲悲壯。三峽星河影動搖。
野哭千家聞戰伐。夷歌幾處起漁樵。
臥龍躍馬終黃土。人事音書漫寂寥。

通釋 日月運行して歳暮に迫り、日增に日脚が短くなつて忽ち夜になつた。身は天涯夔州を指しの孤客となり、風雪始めて霽るる寒夜に坐して寝もやらず、夜明けに吹き鳴らす鼓角の聲の悲壯なるを聞き、三峽のあたりに星影の動搖するのを見、晝は戰亂の爲に父兄子弟を失つて、夔州千戸の妻子父母が野に哭するを聞き、樵夫漁父の、いつしか蠻夷の風に化し、あちこちで夷の歌を歌つてゐるのを聞く。あゝ思へば諸葛亮の如き忠臣も終に同じく黃土と化し、落つれば同じ谷川の水だ。世間の事を彼此と悲喜するのは無益の沙汰だ。ままよ人事も寂寥に任せて、頓着しないことにしよう。

語釋 陰陽（日月といふが如し。）○短景（日の短くなること。）○五更（今の午前四時。）○鼓角（鼓は陣大鼓。角はツノブエ。共に軍中に用ふるもの。）○三峽（夔州に在る長江の難處。）○星河（星ヤアマノガハ。）○影動搖（漢書に元光中、天星驟ク搖ク以テ疾星皆ニ問フ。對ヘテ曰ク、星ノ搖ク ハ民勞スレバナリとある。）○野哭千家聞戰伐（戰伐の爲に千家の妻子父母の野に哭する聲を聞くといふ意。千家は夔州の民戸なり。秋興四首の二を見よ。）○夷歌幾處起漁樵（漁父や樵夫があちこちで夷歌を歌つてゐるのを聞くといふ意。）○臥龍（諸葛亮をいふ。徐庶が諸葛亮を評して謂つた言葉。）○躍馬（公孫述をいふ。蜀都賦に、公孫馬ヲ躍ラシテ帝ト稱スとある。）○黃土（死して土に化すること。）○漫（漫然として深く意に留めないこと。）○寂寥（ひつそりと音沙汰なきこと。）

返照

杜甫

敘說 この詩は雨後の晩景を叙したもので專ら返照を賦したのではない。ただ句中の二字を取つて題としたのである。大曆元年夔州に在りて作る。前四句は景、後四句は情。

楚王宮北正黃昏。白帝城西過雨痕。
返照入江翻石壁。歸雲擁樹失山村。
衰年病肺唯高枕。絶塞愁時早閉門。
不可久留豺虎亂。南方實有未招魂。

楚王宮北正に黃昏、白帝城西雨の過ぎた痕。
返照江に入つて石壁を翻し、歸雲樹を擁して山村を失す。
衰年肺を病んで唯枕を高うし、絶塞時を愁へて早く門を閉づ。
久しく豺虎の亂に留まるべからず、南方實に未だ招かざるの魂あり。

通釋 楚王宮の北は日正に夕ならんとし、白帝城の西は雨が初めて晴れた。夕日は江波を照して石壁の影を翻へし、歸雲は樹木を包んで山村を呑んでしまつた。（以上四句眼前の景。）吾は老いて肺を病み、唯枕を高うして臥し、絕域に留滯し、時世の亂離を愁へて、日の暮れない中に門を閉ぢる。豺虎の如き盜賊の横行する地には久しく留るべきではない。併し我が旅魂は久しく爲に驚散し、未だ之を招いで北に歸ることが出來ないのである。

語釋 楚王宮（楚の襄王の舊迹。夔州の巫山縣の西北に在り。）○黃昏（暮。）○白帝城（前に見ゆ。）○返照（夕日のてり。）○石壁（江岸の絕壁。）○歸雲（山に歸る雲。）○失ニ山村一（山の村落を覆ふこと。）○衰年（老年。）○絕塞（遠く都を離れた城塞。夔州を指していふ。）○不レ可ニ久留一（楚辭招魂に魂歸り來レ、南方ニハ以テ留ルベカラズとあるに本づく。）○未レ招魂（杜甫の彭衙行に、剪紙招我魂の句あり。これも驚魂を安定する意である。死んだ魂を招くことではない。）

登高

敍說 前四句は登高の景。後四句は登高の情。八句皆對句を成してゐる。胡元瑞の詩藪に此の詩を詳論し、古今七律中の第一と謂つてゐる。

風急ニ天高猿嘯哀。渚清ク沙白鳥飛廻。
無邊ノ落木蕭蕭下。不盡ノ長江滾滾來。
萬里悲秋常作レ客。百年多病獨登レ臺。
艱難苦恨繁霜鬢。潦倒新停濁酒杯。

通釋 風急に天高く、秋氣肅殺として猿の聲も哀しく、是れ秋山。渚清く沙白く、秋江冷にして、水鳥が飛びかはしてゐる。是れ秋江。一望限なき樹林の枯木は蕭蕭として下り（第一句を承く。）日夜息むことなき長江は滾滾として流れてゐる。（第二句を承く。）吾は久しく萬里の異境に旅寓し、悲秋の情に堪へないのに、病軀を以て獨り此の臺に登り、此の景を見たのであるから、其の悲たるや推して知るべきであらう。平生艱難が多いので、白髮の殖えるのを恨んでゐるが、昨今は特に衰弱が甚しい爲に禁酒してゐるので、酒を飮んで愁を霽らすことも出來ない。

語釋 天高（秋の空は澄んで高い。）○猿嘯（猿の鳴くこと。夔州の（あたりには猿が多い。）○落木（木の枯枝などの落ちること。楚辭に風颯颯トシテ木蕭蕭タリとある。）○蕭蕭（物淋しき聲。）○無邊（落木蕭蕭として下り、不盡の長江滾滾として來る。）○萬里悲秋（萬里悲秋常に客と作り、百年多病獨り臺に登る。）○艱難苦恨（艱難苦だ恨む總霜の鬢、潦倒新に停む濁酒の杯。）○濁酒（濁酒一杯。）

長江（支那の南方の大川。）○滾滾（水の流るる貌。）○悲秋（悲しき秋。前の九日藍田崔氏莊の詩に見ゆ。）○百年（人の一生をいふ。常に病んでゐるから百年多病といふ。杜甫は肺病患者であるゝ）○繁霜鬢（いの鬢。）○潦倒（衰癈の貌。）

闕下贈裴舍人

敍說 闕下は宮闕の下といふ意。裴舍人は中書舍人名裴夷直をいふ。前四句は春日闕下の景。後四句は自己流落の懷。

錢起

錢起、字は仲文、吳興の人。天寶十年及第して秘書郎官を授けられ、考功郎中官を以て終つた。大曆中、郎士元と俱に詩名あり。當時「前に沈・宋あり、後に錢・郎あり」と稱せられた。この詩を作つた時はまだ及第しない頃で、暗に裴舍人の引薦を求めたのである。

二月黃鸝飛上林。春城紫禁曉陰陰。
長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。

陽和不散窮途恨。霄漢長懸捧日心。
獻賦十年猶未遇。羞將白髮對華簪。

通釋 今や春の半であるから鶯が上林苑には飛びかうてゐるが、まだ夜が明けきらない。暗に我の如き不遇の境地に在る者もある由をいふ。長樂宮中の鐘の音は花の中から漏れ聞え（第一句を承く。）龍池の柳は雨に烟つてゐる。（第二句を承く。）陽和の春も吾が窮愁を一掃することが出來ず、吾は徒に宮闕を仰いで忠誠の心を寄せてゐるばかりである。賦を獻じて登庸を待つこと十年であるが、まだ好運に遇はないで碌碌として微官を守つてゐるので、白髮を以て華簪を挿してゐる足下に對するのは、實に羞かしくてたまらない。

語釋 黃鸝（うぐひす。）○上林（天子の御庭。）○春城紫禁（紫禁は宮中をいふ。春城の中に在り。）○曉陰陰（小暗き（前の沈佺期の龍池篇を見よ。）○陽和（陽氣で暖かな春。）○窮途（世に用ひられない雖儀な境遇。）○霄漢（天をいふ。朝廷に喩ふ。）○捧日心（忠誠の心。魏志に程昱夢ニ奉曹操曰ク、卿當ニ終ニ吾ガ腹心トナスベシ云云とあるを用ふ。）○華簪（立派な簪。簪は冠を留めるカンザシ。）○陰陰（黯。）○長樂（宮の名。）○龍池

和王員外晴雪早朝

錢起

叙說 岑參の和祠部王員外雪後早朝即事と題する詩、前に見ゆ。この詩は彼と同時の作であらう。

紫微晴雪帶恩光。繞仗偏隨鵷鷺行。
長信月留寧避曉。宜春花滿不飛香。
獨看積素凝清禁。已覺輕寒讓太陽。
題柱盛名兼絕唱。風流誰繼漢田郎。

紫微の晴雪恩光を帶ぶ、仗を繞りて偏に鵷鷺の行に隨ふ。
長信月留まりて寧ぞ曉を避けん、宜春花滿ちて香を飛ばさず。
獨り看る積素の清禁に凝るを、已に覺ゆ輕寒の太陽に讓るを。
題柱の盛名絕唱を兼ぬ、風流誰か繼がん漢の田郎。

通釋 宮城の雪後の景色は、天子の御寵光を受けて、他の處とは自ら別な趣がある。百官が儀仗を繞り順序正しく列んで參朝する。長信宮の上には殘月が尚ほ留つて曉を照し、宜春苑には花が咲き滿ちてゐるが香氣を發しない（雪を花に見立てたのである。）この時君（王員外を指す。）は禁中の降り積つた雪が、日の光を受けて稍寒氣がゆるんで來たことを覺つたであらう。（暗に仁德の洽きを謂ふ。）さて君は既に題柱の盛名があり兼ねてすぐれた詩才を持つてゐる。されば風流文采よく漢の田鳳に繼ぐ者は君を措いて外にはあるまい。

語釋 紫微（禁裏をいふ。）○恩光（天子の恩澤。光耀なり。）○繞仗（仗（天）の儀仗。）○鵷鷺行（百官の順序正しくならぶ行列。）○長信（西方に在る宮の名。）○宜春（苑の名。芙蓉苑ともいふ。）○積素（素は白なり。降り積つた雪。）○清禁（禁城。）○太陽（日なり。）○題柱盛名（卷四、酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈の題漢柱を見る。）○絕唱（すぐれた詩。）○田郎（田鳳なり。尚書郎たり。）

自鞏洛舟行入黃河即事。寄府縣寮友

韋應物

叙說 鞏は縣名。河南省に在り。洛は川の名、洛水なり。源を陝西省の冢嶺山に發し東流して洛京に入り、偃師縣・鞏縣を經て黃河に入る。即事とは其の場の出來事並に見た儘の景色を述ぶる意。韋應物が洛陽縣丞たりし時、其の同寮の友に寄せた作であらう。

夾レ水蒼山路向レ東。東南山豁大河通。
寒樹依微遠天外。夕陽明滅亂流中。
孤村幾處臨二伊岸一。一雁初晴下二朔風一。
爲二報洛橋遊宦侶一。扁舟不レ繫與レ心同。

通釋 川の流を夾んで青青とした山の連る中を舟に乘つて東に進めば、やがて東南に當つて山勢豁開し黄河の流れるのを見る。遠樹の色は依微として見え分かず、夕陽の餘照が亂流の中に明滅してゐる。人里離れた村が幾個處か伊水の岸に臨み、一羽の雁が北風に依つて晴天を下るのを見た。さて雁に頼むが、我が爲に洛橋の同僚題の府縣の寮友なり。に傳へてくれ 雁の通信機關であることは前に述べた。 今我が扁舟の繫がざるは我が心と同じで、泛として定る所がないと。

語釋 大河（黄河を。）○依微（ぼんやりして、はつきり見えないこと。）○伊岸（伊水の岸。伊水は源を河南省盧氏縣に發し、偃師縣に至りて洛水に入る。）○朔風（北風。）○遊宦（官吏生活を送ること。）○扁舟（小舟。）

贈下錢起秋夜宿二靈臺寺一見上レ寄

郎士元

敍說 靈臺寺は廬山に在る。○贈は酬ユの誤であらう。錢起が秋の夜に廬山の靈臺寺に宿して寄せた詩に酬いたのである。前四句は靈臺寺の夜景を寫して錢起を主とし、後四句は靈臺等中の錢起を寫して自己を主とす。

郎士元、字は君胄、中山の人。天寶十五年の進士。寶應元年、京畿の縣官に選ばる。詔して中書に試し、渭南尉に補す。右拾遺を經て、出でて昂州刺史と爲りて卒す。

石林精舍武溪東。夜叩二禪扉一謁二遠公一。
月在二上方一諸品靜。心持二半偈一萬緣空。

石林精舍武溪の東、夜禪扉を叩いて遠公に謁す。
月は上方に在りて諸品靜に、心は半偈を持して萬緣空し。

蒼苔古道行應遍。落木寒泉聽不窮。
更憶雙峯最高頂。此心期與故人同。

通釋 石林精舍（靈巢の別名か。）は武溪の東に在る。君は夜そこの禪室を訪うて住僧に謁した。折しも月は高く山寺に懸つて、群物盡く靜息し、君は偶絶唱（すぐれた詩。郎士元に寄せた詩を指す。）を得て、心は枯木の如く萬慮すべて空しくなつた。君は尚も蒼苔の古道を踏み破り、落木の聲、寒泉の響を聽き盡して、幽賞を肆にするであらう。併し余にして若し其の地に宿するを得ば、更に雙峰最高の頂を尋ねるであらうと思ふ。

語釋 石林（寺の所在地か、寺名か、詳でないが、多分巖石の林立してゐる所から、此の名があるのであらう。卷三、杜甫の題玄（寺をいふ。）） ○武溪（廬山に在る虎溪なり。唐人太祖の諱を避け虎を改めて武となす。） ○禪扉（僧廡。禪室。）梵の所で述べた。惠遠は廬山に居ること三十餘年で） ○上方（佛語に上方世界あり。今借りて山寺をいふ。） ○諸品（諸塵とゝふが如し群物なり。） ○半偈（短き偈文。報恩經に、波羅門大師、轉輪大王ノ爲ニ半偈ヲ說クトアル。ここには借りて絶起の詩をいふ。） ○萬緣（種々の妄想。寶燈錄に、二祖曰萬緣ノ心ヲ息メテ枯木ノ如シトある。） ○落木（前の杜甫の登高の詩に見ゆ。） ○雙峰（廬山に雙劍峯あり。）

○故人（舊友。錢起をいふ。）

長安春望

盧綸

敍說 長安の春景色を望み、身の不遇を悲んで作つた詩である。

盧綸、字は允言、河中の人。大歷の初、進士に擧げられて第せず。元載其の文を取つて以て閿鄉尉に補す。監察御史に遷る。輒ち疾と稱して去る。綸が舅韋渠牟其の才を表して宮中に召見し、帝作る所あれば、輒ち賡和せしむ。時に韓翃等十人と皆詩名あり。大歷十才子と稱す。

東風吹レ雨過ニ青山一。却望千門ヲ草色閒。
家在ニ夢中一何日到。春來ニ江上一幾人還。
川原繚繞浮雲外。宮闕參差落照間。

誰念爲レ儒逢二世難一。獨將二衰鬢一客二秦關一。

通釋 春風が雨を帶び青山を吹いて去つた。春晴に乘じて宮城のあたりを望めば草色萋萋として物靜である。夜夜夢には故郷を見るが、いつ歸ることが出來るであらう。年年春は江上に廻つて來るが客遊の人の故郷に歸り得る者は稀である。野原の茫茫として雲外に連り、宮闕の落日の間に高低してゐる景色を見ては、坐に我をして感慨に堪へざらしめる。儒者となつて世路の艱難に遇ひ、老衰の身を以て永く長安に留滯しようとは夢にも思はなかつた。

語釋 東風(春風をいふ。)　○千門(建章宮に千門萬戸あり。宮城をいふ。前に長安の民家をいふのではない。)　○川原(一帶の平原をいふ。)　○繚繞(まとひめぐる。)　○參差(高低齊しからざる貌。)　○落照(日夕。)　○衰鬢(衰白の鬢。)　○秦關(長安をいふ。秦の關中の地なればなり。)

敍說 陸勝の家で秋雨の降る日に同志の友相會し、韻を探つて同席の人人と韻字を分けて詩を作ることをいふ。詩を賦したことに就いて、謝意を表した詩である。題の末に「同レ前」の二字のあるのは誤である。

陸勝ノ宅ニテ秋雨中探レ韻同レ前ニ

張南史

張南史、字は季眞、幽州の人。少うして奕を好み、中歲感激し節を折つて文を學ぶ。蕭宗の時、左衞倉參軍となり、後亂を避けて揚州に居る。再び召さるるに及び赴かずして卒す。

同人永日自相將。深竹閒園偶辟疆。
已被秋風敎憶鱠。更聞寒雨勸飛觴。
歸心莫レ問三江水。旅服從レ沾九月霜。
醉裏欲レ尋騎馬路。蕭條是處有垂楊。

通釋 同志の友が相携へて宴樂をなさんと、陸勝が深竹間園の中に相會した。吾は秋風に吹かれて張翰のやうに故鄉の鱸魚の膾を憶ひ出し、寒雨の音を聞いて頻に觴を重ね、懷鄉の思を鎭壓せざるを得ない。併し君(陸勝を指す。)の歡待に預つて吾が歸心も落ち着いて、松江の水に問ふを要せず。旅衣の九月の霜に沾うて寒いのも、敢て厭はぬやうになつた。大分酩酊して前後もわからなくなつたが、吾

語釋 同人(同志の友。)　○永日(春日。)　○辟疆(園の名。)　○已被(已に…ふ。)　○秋風敎憶鱠(晉の張翰、秋風に吹かれて故鄉の鱸魚の膾を憶ひ出し、官を棄てて歸つたことをいふ。)　○更聞寒雨勸飛觴(寒雨の音を聞いて頻に觴を重ねることをいふ。)　○歸心莫レ問三江水(歸心も落ち着いて、松江の水に問ふを要せずといふ。)　○旅服從レ沾九月霜(旅衣の九月の霜に沾うて寒いのも、敢て厭はぬやうになつたといふ。)　○醉裏欲レ尋騎馬路(醉裏騎馬の路を尋ねんと欲すといふ。)　○蕭條是處有垂楊(蕭條として是の處垂楊あり。)

が馬に乘つて歸る路には、ションボリと柳が一本立つてゐたとうろ覺えに覺えてゐる。

語釋　同人（同志の人をいふ。易經に見える。）　○永日（妄樂すること、詩經に、子ニ酒食アリ。何ゾ日ニ懲ヲ鼓シ、且ツ以テ日ヲ永ウセザルとあるに本づく。）　○深竹間（竹の密生する靜な庭園。）　○偶三辟疆一（晉の顧辟疆名園あり。常に賓客を會す。今偶は對すること。）　○憶レ鱠（晉の張翰は吳の人。洛陽に在りて秋風の起るを見、吳の菰菜・蓴羹・鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。）　○飛觴（杯を人にさすこと。）　○歸心（故鄕に歸りたいと思ふ心。）　○三江（松江の源。太湖と連接。分れて三江となつて吳地に在り。因つて松江の意に用ふ。松江は鱸魚の産地。張翰と上郡の顧氣、翰の言を聞きて曰く、吾が亦子と南山の巖を採り、三江の水を釣まんのみと。）　○旅服（旅中の服。）　○蕭條（淋しき貌。）

鹽州過胡兒飲馬泉

李益

敍說　鹽州は漢の五原郡、明の山西省大同府。ここに驚鵜泉あり。胡人馬に此に飲ふ。李益適その地を經て、景を寫し情を敍したのである。

李益、字は君虞、隴西姑臧の人。大歷四年の登第。末秩を受け事に從ふこと十八載、多く兵閒に在り。小疾有りて用ひられず。嘗て「恩に感じて地有るを知り、望京樓に上らず」の句あり。憲宗召して祕書少監と爲す。太子賓客に遷る。禮部尚書を以て致仕して卒す。

綠楊著レ水草如レ煙。舊是胡兒飲馬泉。
幾處吹レ笳明月夜。何人倚レ劍白雲天。
從來凍合關山道。今日分流漢使前。
莫レ遣二行人照一レ容鬢一。恐驚二憔悴一入二新年一。

通釋　時方に春で、柳の枝は水に垂れ、草は煙のやうに茂つてゐる。ここは昔胡の兵が馬に水を飲ませた處ださうな。幾度か明月の下に悲笳の聲が響き渡つたことであらう。又漢の將軍が天を仰ぎ劍に倚つて胡兵を掃蕩したであらう。併し從來胡の兵を防ぎ得たのは、多くは關山の道に氷がはりつめたからであつて、必ずしも漢の將卒の力に由るのではない。然るに今その氷が吾が眼前に釋けて流れてゐる所を見れば、いつまた胡の兵が入寇するかも知れない。此を思ひ彼を思へば坐に我をして悲傷せしめるのである。因つて余は此の水に照して吾が姿を見ることをやめよう。恐らくは時の新春で

あるにも拘らず、吾が容色の憔悴してゐるのに自ら驚くであらうから。

語釋 胡兒（えびすの兵）　○笳（胡兵の軍中で吹く笛）　○倚レ劍（劍を杖について。）　○關山（關所や山。）　○漢使（李益自ら謂ふ。）　○行人（旅人。）　○容髮（顏色。）

登二柳州城樓一寄二漳・汀・封・連四州刺史一　柳宗元

敍說 永貞元年、王叔文失脚し、その黨皆連坐し、柳宗元・韓泰・韓曄・劉禹錫・陳諫・凌準・程异・韋執誼の八人皆州の司馬に貶せられた。之を八司馬の貶といふ。元和十年、宗元等五人召されて京師に至り、又皆出されて刺史となり、宗元は柳州（廣西省に屬す。）韓泰は漳州（福建省に屬す。）韓曄は汀州（福建省に屬す。）陳諫は封州（廣東省に屬す。）劉禹錫は連州（廣西省に屬す。）に遷された。この詩は柳宗元が柳州の城樓に登り、觸目感懷のあまり、四友に寄せたのである。

城上高樓接二大荒一。海天愁思正茫茫。
驚風亂颭芙蓉水。密雨斜侵薜荔墻。
嶺樹重遮二千里目一。江流曲似二九廻腸一。
共來百粵文身地。猶自音書滯二一鄕一。

通釋 柳州城樓が高く聳え立つて大海と相接してゐる。此に登つて眺望すれば我が愁思は海天と共に茫茫として限がない。風土の惡い處であるから、驚風は亂れ吹いて蓮花咲く水を飜し、密雨は斜に降り注いで蔦葛のはえまつはる墻を侵しなどしてゐる。嶺樹は目を遮つて長安の都は視れども見えず。江流は屈曲して恰も吾が九廻する腸のやうである。諸君と同じくかかる百越文身の地に來てゐるのであるから、書信の往復でもして互に心を慰めたいと思ふが、各一鄕に留滯してそれも出來ない。誠に悲むべき境遇である。

語釋 大荒（文選の注に海外とある。）　○茫茫（廣く際限のないこと。）　○芙蓉（蓮花。）　○薜荔（つた、かづら。）　○千里目（千里は長安を指していふ。卷一、魏徵の詩に、既傷驚風亂颭芙蓉の水、密雨斜に侵す薜荔の墻。嶺樹重なりて千里の目を遮ぎり、江流曲りて九廻の腸に似たり。共に來る百粵文身の地、猶自ら音書一鄕に滯る。

千里日、還驚九折魂とあり。）　○九廻腸（司馬遷の文に、腸一日ニシテ九廻スとある。）　○百粤（南方蠻夷の地。粤は越に同じ。）　○文身（身にいれずみすること。越人は斷髮文身の風あり。）　○音書（書信。手紙。）　○一鄉（一地方。）

奉レ和ニ庫部盧四兄曹長元日朝廻一ニ　韓愈

叙意　庫部は兵部の屬官、戎器・鹵簿・儀仗を掌る。盧四兄曹長は盧汀をいふ。曹長は尚書・丞郎中相呼ぶの稱。時に韓愈は比部郎中であつた。この詩は盧汀の元日に朝廷より退出する詩に和したのである。

韓愈、字は退之、南陽の人。少にして孤。兄の嶺表に官たるに隨ひ、兄卒し、愈自ら刻苦して儒を學び、長ずる比、六經百家に通ず。貞元八年進士に擢んでられ、累に四門博士に調せらる。監察御史に遷り、上疏して宮闈を論じ、陽山令に貶せらる。元和の初、擢でられて國子博士と爲り、東都に分司す。都官・外郎に改められ、尋いで復博士と爲る。既に才高うして數ば黜けられ官又下遷す。乃ち進學解を作りて以て自ら喩ふ。執政其の才を奇とし、比部郎中に改む。中書舍人に進む。裴度が行軍司馬と爲つて、蔡を伐つ。蔡平らぎ、刑部侍郎に遷る。上疏して佛骨を論ず。上怒りて潮州の刺史に貶す。袁州に量移せらる。召して國子祭酒に拜す。兵部侍郎に轉ず。穆宗の時、鎭州を宣撫す、歸奏して、吏部侍郎に遷り、京兆尹兼御史ノ夫に轉ず。李紳に劾せられて罷む。未だ幾ならず吏部侍郎に復す。長慶四年卒す。年五十七、禮部尚書を贈られ、謚して文といふ。

天仗宵嚴建ニ羽旄一ヲ　春雲送レ色曉雞號ク
金爐香動蟠ニ頭暗一ク　玉佩聲來雉尾高シ
戎服上趨承ニ北極一ニ　儒冠列侍映ニ東曹一ニ
太平ノ時節身難レ遇ヒ　郎署何須笑ニ二毛一ヲ

通釋　前の晩から先づ儀衛を嚴にして羽旄を建て列ね、明くれば鷄が鳴き瑞雲が現れ、いよ〳〵元旦となつて百官ここに朝會し、金爐の香煙が浮動して蟠頭が暗くなり、玉佩の音が響き渡り雉尾扇が高く立つて、天子が出御になる。時に武官は殿に昇り趨走して北に列し、文官は列を成して東曹に立

ち、光彩相映ずる。吾は幸に太平の時に生れながら、常に不遇で郎署に沈滯してゐるが、今更白髪を笑ふのも烏滸がましい。

語釋 天仗（天子の儀仗。）○羽旄（羽で飾つた旗。）○金爐（香爐。）○螭頭（螭は龍の類。玉階の扶欄の上に螭を刻んで飾となす。）○玉佩（佩玉に同じ。卷二の王勃の詩に見ゆ。）○雉尾（前の杜甫の秋興四首の三に見ゆ。）○戎服（軍服。因つて武官をいふ。）○東曹（東の刻。）○郎署（卷二の帝京篇に見ゆ。）○二毛（白毛まじりの頭をいふ。）○北極（殿上の北をいふ。）○儒冠（儒者の冠。文官の總に用ふ。）

唐詩選新釋卷之六

五言絕句

五言の句、四句から成る短詩形である。

題二袁氏別業一

賀知章

敍說 袁氏の別業（別莊なり。）に遊び、其の壁に書きつけた詩である。

賀知章、字は季眞、越州永興の人。武后の時拔羣類科に擢でられ、太常博士に遷り、開元の初、秘書監に擢でられ、禮部侍郎兼集賢殿學士に遷り、天寶の初辭して歸る。晩に四明狂客と號し、乃ち請うて道士（道教の僧。）となる。敕して鏡湖（越州にある湖の名。）一頃を賜ふ。

主人不二相識一　偶坐爲二林泉一。
莫レ謾レ愁レ沽レ酒。　囊中自有レ錢。

主人相識らず、偶坐林泉の爲なり。
謾に酒を沽ふを愁ふる莫れ、囊中自ら錢あり。

通釋 自分はここの主人とは相識の間柄でも何でもないが、主人とかく對坐してゐるのは林泉を聞いて、つひうか〳〵とはいり込んだ爲である。主人は酒でも馳走せねばなるまいと心配するかも知れないが、その心配は御無用になされ、私の財布の中に酒を買ふ錢ぐらゐはあるのだから。

語釋 主人（袁氏を指していふ。）○偶坐（對坐なり。）○林泉（庭園。世說に、王子猷、顧辟彊名園アリト聞キ、先ニ主人ヲ識ラザルモ、徑チニ其ノ家ニ往ク。顧方ニ賓友ヲ集メテ聞燕スルニ値フ。而シテ王遊歷既ニ畢リ、指麾好惡シテ旁ニ人ナキガ若シとある故事を暗用す。）○謾（みだりに、やたらに。）○沽レ酒（酒を買ふ。）

夜送趙縱

楊炯

叙說 蓋し趙縱は郡守であつて、京に入りて超遷することを得ず、再び郡に歸る。卽ち不遇の人である。故に趙璧完くして國に還つた故事を用ひて、不遇を慰めたのである。

趙氏連城璧。由來天下傳。
送君還舊府。明月滿前川。

趙氏連城の璧、由來天下に傳ふ。
君が舊府に還るを送れば、明月前川に滿つ。

通釋 趙の惠文王の連城の璧（趙の璧を引用して趙縱の才に喩へたのである。）は從來天下に傳唱せられてゐる。さればにや、今君（趙縱を指す。）が舊府（もとの役所。）に歸るのを送れば月の光が君の行手の川に滿ちて明皎皎としてゐて、恰も璧の光の掩ふべからざるが如くである。

語釋 趙氏連城璧（史記藺相如傳に、趙の惠文王、楚ノ和氏ノ璧ヲ得タリ。秦ノ昭王人ヲシテ十五城ヲ以テ璧ニ易ヘンコトヲ願ハシムとある。故に連城璧といふ。）○由來天下傳（史記に、和氏ノ璧ハ天下ノ共ニ傳ヘテ寶トスル所ナリとあるを用ふ。）○還舊府（趙縱が、もとの役所に還ることであるが、秦王が欺いて璧を奪はんとした時、藺相如が秦王と爭ひ璧を完うして趙に還つた故事を暗用したのである。）○明月（實物の月である。題に夜とある所以である。これを明月の珠と解するのは宜しからず。）

易水送別

駱賓王

叙說 易水は戰國時代の燕の西境を流るる川で、今の直隷省保定府に在る。燕の太子丹が荊軻をして秦王を刺し殺させようとして、ここまで送つて來て別れる時に、荊軻が風ハ蕭蕭兮易水寒シ。壯士一去兮不復還ラと悲壯な歌を歌つた處である。此の詩は本集には於テ易水ニ送レ人ヲと題してある。

此地別燕丹。壯士髮衝冠。
昔時人已沒。今日水猶寒。

此の地燕丹に別れ、壯士髮冠を衝く。
昔時人已に沒し、今日水猶ほ寒し。

通釋 ここは昔荊軻が燕の太子丹に別れた處で、荊軻が風蕭蕭兮易水寒と歌つた時送別の士は皆目を瞋らし髮盡く上りて冠を衝いたと戰國策（書名）に書いてある。昔の義士は今已に歿して見る由もないが、易水は今猶ほ昔の如く寒げに流れてゐる。

語釋 燕丹（燕の太子丹。）○壯士（送別の人を指す。一說に荊軻を指すといふ。今取らず）

餘論 駱賓王は則天武后を除かんと謀り、どこまでも唐室に忠勤を勵んで國事に奔走した義士である。この詩は昔人已に沒すと雖も其の跡猶ほ存せり。古人の遺風を學ぶは當に我等の務むべき所なりとの餘意を含め、友人と義氣相許したものである。この詩の三四の句は對句を成してゐる。これを後對格といふ。

贈喬侍御

陳子昂

叙說 喬は姓。侍御使は官名、紀綱を肅正し不法を糾彈することを掌る。喬侍御に贈つて其の不遇を憐んだ詩である。

漢庭榮巧宦。雲閣薄邊功。
可憐驄馬使。白首爲誰雄。

漢庭巧宦を榮し、雲閣邊功を薄んず。
憐む可し驄馬の使、白首誰が爲にか雄なる。

通釋 今の世は利口に立ち廻る者が榮えて、邊功を建てた者などは一向重んぜられない時勢である。君（喬侍御などを指す。）なども雄傑の氣象を有しながら、白毛頭になるまで重用せられないのは氣の毒なことだ。

語釋 漢庭（漢の朝廷。唐代のことを言ふのに漢を借りるのは唐人の詩の常である。）○巧宦（便佞を以て昇進する者。漢書汲黯傳に、司馬安文深ニシテ巧ニ善ク宦スとある。）○榮（顯榮にする。）○雲閣（東觀漢記に、永平中、顯宗前世ノ功臣ヲ追感シ、乃チ二十八將ヲ南宮雲臺ニ圖畫スとある。）○邊功（外夷と防戰して邊塞に功を立てること。）○可レ憐（氣の毒なことだといふ意。）○驄馬使（後漢の桓典侍御使となり。常に驄馬に乘る。人之を畏憚す。驄馬使は桓典を借りて喬侍御に比す。）○白首（白頭に同じ。しらがあたま。）○爲レ誰（誰の爲に。何の爲にの意。つまらないことだといふ意を含む。）

餘論 これは前の詩と反對で前對格である。

子夜春歌

郭振

叙說 卷一の子夜吳歌を見よ。閨怨の詩である。

郭振、字は元振、魏州貴鄉の人。初め通泉尉となり、任俠放縱にして小節に拘らず、武后召して之を詰らんと欲し、與に語りて大に其の人となりを奇とし、遂に之を擢用す。後同中書門下となり代公に封ぜられ、年五十八にして卒す。

陌頭楊柳枝。已被春風吹。
妾心正斷絕。君懷那得知。

陌頭楊柳の枝、已に春風に吹かる。
妾が心正に斷絕す、君が懷那ぞ知るを得ん。

通釋 街頭の柳の枝已に春風に弄ばれてよれつもつれつしてゐる風情を見るにつけても我が腸はちぎれさうだ。戀焦がれる御方の胸の中を早く聞きたいものだ。

語釋 陌頭（街路のほとり。）○斷絕（呉筠の詩に、春草攬結スベシ。妾ガ心正ニ斷絕スとあり、古詩に肝腸斷絕スともある。）○君懷（君は夫を指す。わが夫の心の中。）

餘論 蜀山人の「一話一言」に、岡多冲之を端唄に譯して、「ちまた〳〵の青柳さへも、アレ春風が吹くわいナ。私の心のやるせなや。思ふお方に知らせたや」と作つたとある。（津阪東陽の夜航餘話には、柳澤淇園だとある。未だ孰れか是なるを知らず）。又大江玄圃の間合早學問に、之を和歌に譯して「ゆきかへる巷の柳枝垂れて、春の嵐に吹かるめり。心亂れし此の憂さを、こひしき人の知るべくもがな」としたとある。

南樓望　盧僕

叙說 南樓は蜀（四川省。）の巴江の上に在る。この樓に登り四方を望んで感想を述べた詩である。盧僕は中宗の時の人。聞喜（縣名）の尉より入りて學士となり、吏部員外郎に終る。

去國三巴遠。登樓萬里春。
傷心江上客。不是故鄉人。

國を去つて三巴遠し、樓に登る萬里の春。
心を傷ましむ江上の客、是れ故鄉の人ならず。

通釋 我は都を去つて遠く三巴（卷三、杜甫の禹廟を見よ。）に來り、偶春に遇ひ、樓に登つて遙に四方を眺めた。江上を往來する人は數多あるが、吾が故鄉の人とては一人もないのが傷ましい。

語釋 去國（國は國都長安をいふ。）

汾上驚秋　蘇頲

叙說 汾上は汾水のほとり、汾水は山西省太原府より出で黃河に入る。漢の武帝が樓船を泛べ秋風、

辭を作つた處である。この詩は偶〻汾上を經て秋に遇ひ、驚いて作つた詩である。

北風吹二白雲一。萬里渡二河汾一。
心緒逢二搖落一。秋聲不レ可レ聞。

通釋 北風の白雲を吹き捲く時、我は遠く旅して汾河を渡つた。凋落の氣節に逢うて心は千千に亂れて悲に滿ち、秋風を聞くに堪へないのである。

語釋 白雲（秋風辭に、秋風起ツテ白雲飛ビ、草木黃落シテ雁南ニ歸ルとある。）○河汾（汾河なり。韻を合せる爲に順倒したのである。）の詩に、心緒亂レテ糸ノ如シとある。）○搖落（草木の凋落すること。楚辭九辯に、悲シイカナ秋ノ氣タルヤ蕭瑟タリ。草木搖落シテ變衰スとある。）○心緒（心が纍纍に思ひ亂れること。孫萬壽秋扈辭に、櫂船を花ベテ汾河ヲ濟ルとある。）○不レ可レ聞（聞くに堪へざるなり。）

蜀道後レ期

張　說

敍說 蜀から洛陽に還る時、道の險難な爲に豫期に後れたことを述べた詩である。

客心爭二日月一。來往預レ期レ程。
秋風不二相待一。先至二洛陽城一。

通釋 旅の心は還りを急ぐ所から、豫め往復の日限をきめて置いたが、秋風の方が一足先きに洛陽にはいつてしまつて、終に豫期に後れた。

語釋 客心（旅客の心。）○爭二日月一（一日も早く還らうとすること。）○來往（往復なり。）○預（豫に同じ。）○期レ程（日程をきめる。）○不二相待一（秋風は西から吹く。張說も西の蜀から東の洛陽に赴くのである。故にかくいふ。）

照レ鏡見二白髮一

張　九齡

敍說 鏡に照して見て己の衰老を慨いた詩である。

宿昔青雲志。蹉跎白髮年。
誰知明鏡裏。形影自相憐。

通釋 昔少い時は顯榮の地位に登らうと志してゐたが、竟に事志と違ひて白髮老衰の身となつた。今日我が形と鏡中の影とが互に相憐まうとは全く豫想もせぬ事である。

語釋 宿昔（昔。嘗て。）○青雲志（榮達を期すること。史記范雎傳に、意ハザリキ君能ク自ラ青雲ノ上ニ致サントハとある。）○蹉跎（つまづきて進まぬ貌。）○誰知（何ぞ期せんといふが如し。）

○形影（己の身と鏡の中の影と。李密陳情表に煢煢獨立、形影相弔フとある。）

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃　孫逖

叙說　舊唐書契丹傳に「開元三年契丹の首領李失活種落（部落といふが如し）を率ゐて內附す。帝封じて松漢郡王となす。明年入朝す。宗室外甥の女楊氏を封じて永樂公主（公主とは皇女をいふ。ここは假に皇女と稱したのである。）となして之に妻す」とある。この詩は洛陽の李少府（少府は縣尉の稱。）の永樂公主の蕃地（契丹）に入るのを觀る詩に和したのである。同は和なり。（卷三、同王徵君洞庭有懷を見よ。）

邊地鶯花少。年來未覺新。
美人天上落。龍塞始應春。

邊地鶯花少く、年來れども未だ新なるを覺えず。
美人天上より落つ、龍塞始めて應に春なるべし。

通釋　蕃地は氣候が寒いので、春になつても鶯や花が少いから、少しも新年らしく感じない。併し今度は美人が天上から落ちたのであるから、（美人を以て花に比し、公主の蕃地に往くをいふ。）龍城の邊塞でも始めて春が來たことを知るであらう。

語釋　邊地（北邊の蕃地。）　○年來（春來るの意。卷六の最後にある答人の寒盡不知年の年に同じ。）　○龍塞（龍城の邊塞。龍城は匈奴の地名、卷三從軍行に見ゆ。）

靜夜思　李白

叙說　靜夜思は樂府題で、秋夜月を觀て故鄉を思ふ意を述べた詩である。

牀前看月光。疑是地上霜。
擧頭望山月。低頭思故鄉。

牀前月光を看る、疑ふらくは是れ地上の霜かと。
頭を擧げて山月を望み、頭を低れて故鄉を思ふ。

通釋　夜更け四鄰人定まる時、寢臺の前に月光の白く指し込むのを見て、霜が降つたのではないかと疑つたが、頭を擧げてよく〳〵見れば山上の月であつた。月を望むに因つて故鄉を思ひ出し、また頭を垂れて感慨に沈んだ。

語釋　牀前（寢臺の前。）

怨情　李白

叙說 美人の怨情を傍觀者の立場から寫した詩である。

美人捲ニ珠簾一。深坐顰ニ蛾眉一。
但見ニ淚痕濕一。不レ知心恨レ誰。

通釋 美人が珠の簾を捲き上げ、暫し戸外の夜景を眺めてゐたが、やがて奥深き座敷に坐し眉をひそめて物思ひに沈んでしまつた。よく見れば淚の痕が乾かずに殘つてゐるが、一體心に誰を怨んでゐるのであらう。定めて旅に出て歸らぬ夫を怨んでゐるのであらう。

語釋 蛾眉(蛾の如く美しき眉。)

秋浦歌

李白

叙說 秋浦は安徽省池州府秋浦縣の地、古の宣城郡である。李白この地に客たりし日、秋浦歌十七首を作る。これは其の第十五である。

白髮三千丈。緣レ愁似レ箇長。
不レ知明鏡裏。何處得ニ秋霜一。

通釋 久振りで鏡に照して見ると、吾が頭は一面に霜に掩はれて眞白だ。この霜は何處から降つて來たものだらうと、先づ自ら驚いた。よく〳〵見れば霜ではなくて白髮が三千丈もあらうと思はれるほど伸びてゐるのだ。永年の積る愁の爲に白髮がこんなに伸びたので、無理もないと合點した。

語釋 三千丈(仰山な意である。必ずしも實數ではない。食客三千人、宮女三千人など皆同じ。) ○秋霜(左思の白髮賦に、秋霜生ジテ皓素とある。)

餘論 この詩は倒置法より成り、三四の句は驚嘆を謂ひ、一二句は然るべきの愁を述べたものと見るがよい。忍海和尚之を「わが黒髮も白絲の、千ひろ千ひろに又千ひろ。うさやつらさのます鏡、いづくよりか置く霜」と端唄に譯したと蜀山人の一話一言に見える。又津阪東陽の夜航餘話に此の詩を詳細に解釋してあるが、煩を厭うて此には揭げない。

獨坐敬亭山

李白

叙說 敬亭山は宣城(秋浦歌に見ゆ。)に在る。獨坐して敬亭山を望んで作つた詩である。

衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。
相看兩不厭。只有敬亭山。

通釋 衆くの鳥は高く飛び盡し、一片の雲は離れ去つて、あたりはひつそりと靜になつた。いつまで看合つてゐても看飽きないのは敬亭山ばかりである。

語釋 相看（相對すといふが如し。山と李白と相看るなり、）〇兩（山も李白も。）

見京兆韋參軍量移東陽

李白

敘說 罪を得て遠方に貶謫せられた者が、少しく罪を輕められて近地に移されることを量移といふ。この詩は今迄日南郡（今の安南の順化等の地。）に貶せられてゐた京兆（長安附近。）の生れの韋參軍（參軍は官名。）が、東陽（後の婺州東陽郡。吳地に屬す。）に量移せられたのに遇うて贈つたのである。

潮水還歸海。流人却到吳。
相逢問愁苦。淚盡日南珠。

通釋 潮水はもとの海に還るものである。流人たる韋參軍ももとの都に還るかと思の外、纔に吳の地に量移せられたに過ぎない。相逢うて此迄の愁苦を問へば、日南の珠のやうな淚をとめどもなくこぼした。

語釋 流人（國を去つて流落する人。）〇吳（卽ち東陽。）〇日南珠（洞冥記に、吠勃國ハ長安ヲ去ルコト九千里、日南ニ在リ。人アリ長七尺、髮ヲ被リテ踵ニ至ル。象ニ乘リ海底ニ入リ寶ヲ取ル。鮫人ノ舍ニ宿シ、淚珠ヲ得タリ則チ鮫人泣ク所ノ珠ナリとある。）

臨高臺

王維

敘說 臨高臺は樂府題である。本集には送二黎拾遺昕一と題し、送別の詩である。

相送臨二高臺一。川原杳何極。
日暮飛鳥還。行人去不レ息。

通釋 高臺の上から君の行手を見送れば、一路渺茫として極る所がない。空飛ぶ鳥は夕になつて塒に歸るが、君は日暮になつても役役として息みもせずに旅程を貪る。旅の苦境が思遣られる。

語釋　川原（行手の道）　○杳（遙なる貌。）　○行人（旅人。黎昕を指す。）

班婕妤

王維

叙說　漢書外戚傳に據れば、班婕妤は初め漢の成帝の寵愛を受けたが、後、趙飛燕が君寵を得るに及び、自ら請うて長信宮に退居し、飛燕が驕妬の禍を避けたといふ。幽閑貞靜の德を具へた賢婦人と謂ふべきである。この詩は能く其の性格を描き出してゐる。

怪來妝閣閉。朝下不相迎。
總向春園裏。花閒語笑聲。

通釋　人或は我が近來妝閣に閉居し、內廷の常例に依つて一たび君前に伺候する外、嘗て人に迎接することなきを怪む者もあらう。併したとひ相迎へて春園に向ふとも大抵花間に笑語嬉遊するのみで、別に好い事のあるわけではない。つまらないから閉居してゐるまでのことであるとて、取人と寵を爭ふに意なきを示したのである。

語釋　怪來（來は助辭で意味はない。）　○妝閣（化粧する樓閣。）　○朝下（毎日の朝見を終つて退出する。）　○語笑（笑つたり語つたりする。）

雜詩

王維

叙說　本集に雜詩五首と題し、二首は古詩で三首は絕句である。種種取りまぜて作る。故に雜詩といふ。この詩は諸說紛紛であるが閨怨と解するがよい。

已見寒梅發。復聞啼鳥聲。
愁心視春草。畏向玉階生。

通釋　已に寒梅の開いたのをも見、春になつて鳥の囀る聲をも聞いた。今又春草の生ずるを視て、其れが追追と玉階までもはびこつて來ることを畏れるとの意で、楚辭に王孫遊兮不レ歸ラ。春草生ジテ兮萋萋とあるのを飜用し、夫の歸りを待ち詫びてゐる情を示したのである。

語釋　寒梅（薔薇中に咲く梅。）　○玉階（本集には階前に作る。）

鹿柴

敍說 柴・一に砦とも書く。籬落なり。鹿柴とは鹿の臥所をいふ。王維は晩年官を退いて西安府藍田縣の西南なる輞川に別墅を營み、中に孟城坳・華子岡・木蘭柴・鹿柴等二十景があつた。

空山不レ見レ人。但聞二人語ノ響一。
返景入二深林一。復照二青苔ノ上一。

通釋 空山の中何處にも人影は見えず、ただ人聲の谷間に響くのを聞くのみである。折しも夕日の光が斜に深林の樹木にさし込み、青苔の上を照してゐる。誠に幽邃の極である。

語釋 返景(夕日のてりかへし。初學記に、日西ニ落チ光東ヲ返照ス、之ヲ返景トイフとある。)

竹里館

敍說 竹里館は輞川二十景(前の詩を見よ。)の一。竹林中に在る館なり。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。
深林人不レ知。明月來相照。

王維

通釋 奥深い竹林の中に獨り坐し、琴を彈いたり吟嘯したりして樂んでゐる。我が林中の樂は世人の知る所ではないが、唯天上の明月のみは心ありげに來て我を照してゐる。

語釋 幽篁(奥深い竹の林。) ○長嘯(口をすぼめ聲を長く引いてうそぶく。) ○深林(言ふまでもなく竹林である。)

長信草

敍說 班婕妤(前の王維の詩に見ゆ。)退いて長信宮に居る。此の詩は長信宮中の草を詠じたのである。

崔國輔は吳郡の人。許昌の令を授けられ、集賢直學士禮部員外郎に累遷し、後王鉷が近親に坐し、竟陵郡司馬に貶せらる。

長信宮中草。年年愁處生。
時侵二珠履ノ跡一。不レ使二玉階一行。

通釋 長信宮中の草は年年班婕妤の愁居する處に生じ、成帝の御履の跡を埋めて、帝をして玉階に近づくことを得ざらしめるものゝやうである。

崔國輔

語釋 珠履（珠で飾つた履。ここは天子の御履をいふ。）　○玉階（長信宮の階段。）

少年行

崔國輔

敍說 これも樂府題で、春日少年遊樂の狀を寫した詩である。

遺却珊瑚鞭、白馬驕不行。
章臺折楊柳、春日路傍情。

通釋 長安の貴公子が珊瑚の鞭を忘れて來たので、馬が驕つて仲仲進まない。因つて章臺の柳を折つて鞭に代へようとする。併し實は路傍の娼婦に心を牽かれて、嬌姿を盜み視んが爲である。

語釋 遺却（わすれて來ること。）　○珊瑚鞭（珊瑚で飾つた鞭）　○章臺（長安の花柳街なり。漢書張敞傳に、敞威儀ナシ。時ニ朝會ヲ罷ムレバ馬ヲ走ラシテ章臺街ヲ過グ自ラ便面ヲ以テ馬ヲ拊ツとある。）

送朱大入秦

孟浩然

敍說 朱は姓。大は輩行第一なるをいふ。朱大の長安に往くのを送る詩である。

遊人五陵去。寶劍直千金。
分レ手脫相贈。平生一片心。

通釋 君が長安に往くについて、いざ別れるといふ時に、千金の値ある寶劍を解いて贈つた。これぞ僕が君に對する平生の心を表するものである。

語釋 遊人（旅人。朱大）　○五陵（卷五、杜甫の秋興四首の二に見ゆ。）

春曉

孟浩然

敍說 春の朝の情景を叙した詩である。

春眠不レ覺レ曉。處處聞二啼鳥一。
夜來風雨聲。花落知多少。

通釋 春の夜は寢心地がよいので、夜の明けたのも知らずに、グツスリと寢込んでしまつたが、あちこちで啼く小鳥の聲にフト夢を破られた。されど猶ほ起きるに懶く、獨り自ら枕上に考へた。昨晩

から大分雨風が吹き荒れたやうであつたが、定めし花が澤山落ちたことであらう。

語釋 夜來（昨夜から以來。）　○多少（多いと。少は帶説として單に添へた。だけで意味を持たないのである。）

餘論 一二句春曉の情景を寫して眞に逼り、古今獨歩の妙を見る。思他事に及ばず先づ花に及ぶ。三四句何等の高趣ぞ。

洛陽訪袁拾遺不遇

孟浩然

敍說 洛陽に往きて袁拾遺（拾遺は官名。）を訪ひしに、袁は謫せられて江嶺に行きたりと聞き、惋惜の意を述べた詩である。

洛陽訪才子、江嶺作流人。
聞說梅花早、何如此地春。

通釋 洛陽に往き漢の賈誼にも比すべき才子袁拾遺を訪ひしに、嶺南に流されて去つたさうだ。暗に賈誼が長沙に謫せられた意味を含む。聞けば嶺南地方は梅の花が早く咲くさうだが、到底洛陽の春には及ぶまい。そんな處に流されるとは氣の毒なことだ。

語釋 才子（袁を指す。潘岳の西征賦に、賈生ハ洛陽ノ才子とあるに本づく。）　○江嶺（江南地方。江は長江。嶺は五嶺。大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽をいふ。江南に在り。）　○流人（國を去つて流落する人。）　○聞說（聞く所に據れば。）　○梅花早（南康記に、大庾嶺ニ梅多シテ先ツ發クとある。）　○此地（洛陽を指す。）

洛陽道

儲光羲

敍說 これも樂府題である。洛陽市中の光景を詠じた詩である。山本北山の作詩志彀に、「唐詩歸・唐萬首絕句の諸書みな洛陽道。獻呂四郎中に作る。且此の詩の前篇に、洛水春氷開ッ。洛城春樹綠ナリ。朝ニ看レバ大道ノ上ヲ。落花亂ル馬蹄ニとありて、次に大道直クシテ如レ髮ノ云云とあり。洛陽道の詩たること勿論なり。唐仲言が五陵といふ長安の地名あるより、長安道に作るべし洛陽は誤れりといふは、この一首ばかり見て前篇を見ざればなり」とある。從ふべし。

大道直如レ髮。春日佳氣多。
五陵貴公子。雙雙鳴二玉珂一。

大道直くして髮の如く、春日佳氣多し。
五陵の貴公子、雙雙玉珂を鳴す。

通釋 洛陽の大道は其の直きこと髪の如く、春に方りて和氣殊に佳なるを見る。其の間を貴公子だちが玉珂を鳴らしつゝ相竝んで往來してゐる。

語釋 大道（梁の元帝の洛陽道の詩に、洛陽ニ大道ヲ開キ。城北ヨリ城西ニ達スとある。）○佳氣（吉祥の氣象をいふ。）○五陵（長安の郊外に在り。貴族の多く住む所なり。故に貴公子のことを五陵の貴公子と謂つたので、必ず長安を指すと窮屈に考へない方がよい。）○雙雙（ぞろ〳〵と並んで。）○玉珂（卷三、春宿左省に見ゆ。）

長安道

儲光羲

叙說 これも樂府題で、長安の貴公子遊蕩の狀を述べた詩である。

鳴鞭過酒肆。袨服遊倡門。
百萬一時盡。含情無片言。

鳴鞭酒肆に過り、袨服倡門に遊ぶ。
百萬一時に盡く、情を含んで片言無し。

通釋 長安の貴公子は馬に跨がり美服をまとひて茶屋や妓樓に遊び、百萬錢の金を一時の遊興に使ひ果し、惜しいことをしたとは思ふも、敢て其の悔心を言葉には出さない。

語釋 鳴鞭（鞭をならす。）○酒肆（さかや。日本でいふ茶屋。）○袨服（美服。）○倡門（娼妓の居る家。）○片言（一言なり。）

關山月

儲光羲

叙說 これも樂府題で、胡地の光景を叙した詩である。

一雁過連營。繁霜覆古城。
胡笳在何處。半夜起邊聲。

一雁連營を過ぎ、繁霜古城を覆ふ。
胡笳何の處にか在る、半夜邊聲を起す。

通釋 仲間をはぐれた一羽の雁が、立ち竝ぶ陣屋を飛び過ぎ、深い霜が古城を覆ふ。胡地の夜半に、何處からともなく胡笳の聲が起つて、邊地の哀韻を四方に傳へる。

語釋 一雁（雁は多くは南に歸つて、殘つてゐるものの少き意を示す。）○連營（いくつもならんでゐる陣屋。連の字は上の一の字と照し合つてゐる）○繁霜（深き霜。詩經に正月繁霜とある。）○胡笳（卷二岑參の詩に見ゆ。）○邊聲（邊地の聲。笳曲馬鳴鼓吹の類をいふ。）

餘論 此の詩に月の字を用ひてはないが、月中の景たることは明である。

送郭司倉

王昌齡

敍說 郭司倉（刺史の官屬に司倉參軍あり。）を送る詩である。

映レ門淮水綠。留レ騎主人ノ心。
明月隨レ良掾一。春潮夜夜深。

通釋 君の馬に乘つて去るのを引き留めようと思ふ主人の心の深いことは、丁度この門前の淮水の深きが如くである。天上の明月は何處までも君に隨つて行かれるけれども、潮水は主人と倶に此の地に留り、夜な夜な別離の恨を引くであらう。

語釋 良掾（郭を指す。掾は屬官の稱。）

餘論 この詩は或る人が淮水の上で郭を餞する時、昌齡も其の席にゐて之を送つたのであらう。故に其の人を指して主人と謂つたのである。昌齡ってはなかろうか。

答二武陵ノ田太守一

敍說 武陵郡（後の湖南省常德縣。）の太守田氏に答謝した詩で、昌齡は龍標縣（湖南省黔陽縣。）尉たりし時、田太守の眷遇

王昌齡

を受けたのであらう。

仗劍行二千里一。微軀敢テ一言。
曾爲二大梁ノ客一。不レ負二信陵ノ恩一。

通釋 私は一劍を携へてこれから千里の行に上るにつき、微賤の身ではあるが敢て一言答謝の意を表する。これまで信陵君（田太守に比す。）の客となつて知遇を辱うしたからには、其の厚恩に負くやうな事は決して致さぬであらう。（必ず其の恩に報いるであらうとの意。）

語釋 仗レ劍（劍ヲツエックと讀むと可なり。史記淮陰侯傳に、項梁淮ヲ渡ルトキ、韓信劍ニ仗リテ之ニ隨フとある。）○微軀（いやしき身。）○大梁（魏の都。）○信陵（魏の信陵君、名は無忌。安釐王の異母弟なり。食客三十人を致す。）

孟城坳

裴迪

敍說 孟城坳は前の王維の鹿柴を見よ。

裴迪は關中の人、王維と共に輞川に隱居す。或は云ふ河東の人と。

結廬古城下。時登古城上。
古城非疇昔。今人自來往。

通釋 古城の下に庵を結び、時時登つて眺望する。古城とはいひでう、昔のまゝではない。其の下を往來するのは古人でなくて今人だから。

語釋 古城(卽ち孟城。) ○疇昔(昔時。)

鹿柴

裴迪

敘說 前に王維の同じ題の詩がある。就いて見るべし。

日夕見寒山。便爲獨往客。
不知松林事。但有麑麚跡。

通釋 日夕寒山を見、便ち獨往の客と爲る。朝晩ただ寒山を見るのみ。興に乘じて獨り往きて樂む。松林中の事業は如何であるか、そんな事は一向知らない。ただ鹿の足跡のあつたことだけ知つてゐる。

語釋 寒山(寒空の上に聳ゆる山。) ○麑麚(鹿の類。)

復愁

杜甫

敘說 復愁とは一愁既に去りて一愁復生ずるをいふ。此の詩は安祿山の亂後、夔州に流落してゐた時の作である。

萬國尙戎馬。故園今若何。
昔歸相識少。早已戰場多。

通釋 天下到處今尙ほ戰亂がやまないが、我が故郷はどうであらうか。昔歸つた時ですら知合の人も四方に離散し、あたり近所が戰場と化した位だから今は尙更であらう。

語釋 萬國(天下中なり。) ○戎馬(兵馬に同じ。戰亂をいふ。) ○故園(故鄕。) ○相識(しりあひの人。)

絶句

杜甫

敍說 この詩は漫興の作であるから、姑く絶句と題したのである。

江碧鳥逾白。山青花欲レ燃。
今春看又過。何日是歸年。

通釋 江水の綠なるにより鳥が一層白く見え、山が青いので花が火の燃えるやうに赤い。（以上二句春の景。）さて今年の春も見る間に過ぎ去つてしまふが、いつになつたら故郷に歸れるであらう。

餘論 これも前對格である。

長干行

崔顥

敍說 これも樂府題である。長干は金陵（南京）城下の船着場の名。江東では山岡を干といふ。此の詩は長干の賣笑婦が賈客を引留めて媚を賣らんとする狀を叙したのである。

君家住何處。妾住在二橫塘一。
停レ船暫借問。或恐是同鄉。

君が家何の處にか住する、妾は住して橫塘に在り。船を停めよ暫く借問せん　或は恐る是同鄉ならん。

通釋 あなたは何處のお方でせうか。妾は今橫塘に住んでゐる者ですが。其の舟ちよつと停めては下さらぬか、少しお尋ね申したい事がある。ひよつとしたら貴下は故鄉のお方ではないかしら。

語釋 君家（家の字はただ添へたのみ。賈客を指す。）　○橫塘（長干の近所）　○借問（お尋ね申す。）

詠史

高適

敍說 范雎の史實を詠じたのである。范雎は魏の人で嘗て須賈に從つて齊に使した。范雎は齊王から金十斤をもらつたので、須賈は國の秘密を齊に漏したのだらうと疑ひ、歸國の後宰相魏齊に其の事を告げた。魏齊は大に怒つて范雎を半殺の目に遇はせた。時に范雎は命からく逃げ出し窃に秦に行き、姓名を改めて張祿といつた。遂に秦に用ひられて宰相になつた。かくとは知らぬ須賈は魏の爲に秦に使した。その時范雎はわざと身裝をやつし見すぼらしい裝をして須賈の處を訪うた。須賈は旣に死んだことだと思つてゐた范雎が、突然尋ねて來たので坐に憐愍の情を起し「范叔一寒此の如きか」と言つて綈袍を一枚贈つて着せ、酒食を饗したといふ。

尙有二綈袍ノ贈一。應レ憐二范叔寒一。
不レ知二天下士一。猶作二布衣ノ看一。

通釋　須賈は本來范雎の仇である。然るに范雎の寒さうなのを見るに忍びずして綈袍を贈つた。誠に深く人を憐んだと謂ふべきである。けれども當時范雎は堂堂たる天下の士で秦の宰相であつたのに、それを知らずに猶ほもとの貧賤の范雎だと誤認したのは、人を見るの明なしと謂はねばならない。

語釋　綈袍（綿入のどてら。）　○范叔（叔は弟の意。范雎の方が須賈より年少だから叔といつたのである。）　○天下士（或る一國、一地方の士でない、もつとえらい人をいふ。）　○布衣（庶人、賤の人。）

田家春望

高適

敘說　田舍にゐて春四方を眺め天下に知己なきを嘆じた詩である。

出レ門何所レ見。春色滿二平蕪一。
可レ歎無二知己一。高陽一酒徒。

通釋　門を出て四方を眺めても何も見る所のものなく、ただ草茫茫たる平野を見るのみである。自分は相變らず高陽の一酒徒で、天下に知己なきは慨嘆の至だ。

語釋　平蕪（平野。）　○知己（己を知つてくれる人。）　○高陽一酒徒（高陽は河南省開封府杞縣の地。酒徒は大酒飲み。史記に酈食其軍門ニ謁リ生ヲ延ラシ劍ヲ按ジ使者ヲ叱シテ曰ク、吾ハ高陽ノ酒徒ニシテ儒人ニ非ルナリト。沛公之ヲ見ルとある。）

行軍九日思二長安故園一

岑參

敘說　行軍中、九月九日重陽の節句に遇ひ長安の故郷を思ひし詩なり。

強欲二登レ高去一。無レ人送レ酒來。
遙憐故園菊。應二傍戰場一開。

通釋　今日は重陽の節句だから高い處へ登り菊花酒を飲んで惡魔祓をしたいと思ふが、行軍中のこととて、酒を送り來る人のないのは遺憾である。これに就いて思遣られるのは吾が故郷の菊花である。賞翫する人もなく、戰場の近くに空しく咲いてゐるであらう。

語釋 登レ高去（去の字は意義なし。登高は卷五、崔署の詩の叙説を見よ。）○送レ酒來（陶淵明彭澤の令を辭して閑居す。嘗て九日に酒なし。菊を摘み把に盈てて坐すゝ久うして白衣の人の至るを望見す。太守王弘酒を送りしなり。この故事を用ひたのである。）○戰場（安祿山の亂以來長安の附近は戰亂の巷となつた。）

見渭水思秦川

叙說 渭水（甘肅省渭源縣の西北鳥鼠山より出で、涇西の境に入り、潼關に至りて黃河に入る。）の流を見て秦川（秦の關中の地。古の雍州。岑參の故郷なり。）を思ひし詩なり。

渭水東流去。何時到二雍州一。
憑添二兩行淚一。寄向二故園流一。

通釋 この渭水は東に流れるから、いつかは吾が故郷の雍州に到るであらう。自分は故郷へは還れないが、責めては兩眼から落つる涙だけでも此の流に託して、故郷へ屆けたいものだ。

語釋 故園（故郷）

餘論 「風は西風、思ふ樣東、風のたよりに文をやろ」といふ俗歌と同意。

登鸛雀樓

王之渙

叙說 鸛雀樓（鸛雀、一に鵲に作るは誤なり。）は山西省平陽府蒲州城北に在り、前に中條山を瞻、下に大河を瞰る。山本北山の作詩志彀には朱斌の作なりといふ。王之渙は幷州の人。高適と同時なり。或は云く王昌齡と友たりと。

白日依レ山盡。黃河入レ海流。
欲レ窮二千里一目。更上二一層一樓。

通譯 樓上から眺むれば、西には夕日が山に依りついて沒せんとする所が見え、東には黃河の遠く東海に向つて流れるのが見える。實に一望空闊で何等の目を遮るものもない。因つて更に展望を恣にしようと思つて、もう一層上まで登つて見た。

語釋 窮二千里目一（更に遠方まで覩ようとすること。楚辭に「目千里ヲ極メテ春心ヲ傷マシムとある。）

餘論 この詩は一二の句が、對句を成し、三四の句が對句を成してゐる。これを全對格といふ。また三四の句は流水對（卷五、九日藍田崔氏莊の餘論を見よ。）である。ただ樓上の見る所を述べ、更に上つて見た所を述べないで、讀者の想像に任せた所に妙味がある。

終南望餘雪

叙說 終南は長安の南に在る山の名。この詩は祖詠が進士の試驗を受けた時に作つたものである。當時の應試の詩の形式は律體であるが、彼は此の四句だけを提出したので、試驗官が詰つた所が彼は「意盡きたり」と答へたといふ。

終南陰嶺秀。積雪浮雲端。
林表明霽色。城中增暮寒。

通釋 長安の都から望めば終南山の北嶺が屹然と聳え立ち、山上の積雪は高く浮雲の端までとどきさうである。山下林外一點の雲翳を留めず。長安城中まで暮寒がひしひしと襲つて來る。

語釋 餘雪（殘りの雪。）○陰嶺（北の方の峯。北だけ雪が殘つてゐるのである。）○林表（林外な り。）○城中（長安の城下を指す。）

祖詠

終南望餘雪

李適之

叙說 李適之は常山愍王の孫で、天寶元年牛仙客に代つて左相となり、時譽甚だ美であつたが、李林甫の爲に排誣せられ、袁州に貶死した。この詩は左相を罷めた時の作である。卷二、飲中八仙歌を參照せよ。

避レ賢初罷レ相。樂レ聖且銜レ盃。
爲問二門前客一。今朝幾箇來。

通釋 自分のやうな愚物が賢者の進路を塞いでゐるのは宜しくないと考へて相を罷めた。今後は聖人の道を樂んで天命に安んじ、酒でも飲んで自ら慰めようと思ふ。我が爲に試に問うて見たまへ。今朝は吾が家に幾人客が來たか。恐らくは一人も來ないであらう。さて〳〵世間は輕薄なものだ。

語釋 樂レ聖（聖の字は聖人の道といふ意と、清酒といふ意と、兩樣の意味とを兼ねてゐる。飲中八仙歌を參照せよ。）○幾箇（幾人の意。相位に在りて時めいてゐる時は、人が寄り附いて來るが、相を罷めてお勢を失へば、誰一人寄り附く者もない。）

奉送五叔入京兼寄綦毋三

李頎

綦毋三は輩行。名は潛、時に京兆槐里縣令であつた。五叔が京に入る道筋に當つてゐるので、

託して此の詩を寄せたのである。

陰雲帶殘日、悵別此何時。
欲望黃山道、無由見所思。

通釋 君と別るゝ折しも、愁雲が夕日を蔽うた。何とまア悲むべく悵むべき光景であらう。吾が思ふ所の人は黃山に居るのだけれども、雲深くして望めども見えない。益悲を增した。

語釋 陰雲（愁雲といふが如し。）○殘日（夕日。）○此何時（恨む意味である。）○黃山（三輔黃圖に黃山宮八京兆槐里縣に在りとある。）○所思（思ふ所の人。蔡母三を指す。）

左掖梨花

敍說 左掖は宣政殿の左の傍門のことで、そこに門下省が在る。そこの梨花を詠じた詩である。丘爲は嘉興の人、繼母に事へて孝なり、嘗て靈芝の堂下に生ずるあり。太子右庶子に累官す、卒する年九十六、王維と交深し。

丘爲

冷艷全欺雪、餘香乍入衣。
春風且莫定、吹向玉階飛。

通釋 梨花の淸冷豐艷なことは雪をも凌ぐばかりで、その香氣が漂ひ來つて吾が着物にまで襲く。春風は一向定まりがなく、猶且玉階に向つて花を吹き飛ばしてゐる。

餘論 この詩は眼前の景を叙したのであるが、兼ねて梨花の左掖に在るを羨み、己の薦用を冀つたのである。

九日陪元魯山登北城留別

蕭穎士

敍說 元魯山は汝州（河南省に屬す。）魯山縣令たる元德秀をいふ。北城とは魯山縣の北城である。この詩は元德秀が縣令を罷めて歸る時、適九月九日の重陽の節句に當つたので、北城に登つて（重陽に當つて菊花酒を酌むことは前に見え）留別の宴を擧げたのに陪して作つたのである。

蕭穎士は開元中進士に擧げられた。時に年十九であつた。秘書正字に補せられ、後汝南の旅寓で死んだ。門人謚して文元先生といふ。

綿連滋川迴。杳渺鴉路深。
彭澤興不淺。臨風動歸心。

【通釋】北城の上から望めば、滋川が一條の絲筋の如く遙に流れ、鴉路がかすかに雲に翳はれてゐるのが見える。陶淵明にも比すべき我が魯山縣令は、此の幽景に逢うて坐に感興を催し、風に臨んで歸隱官を罷めて歸郷する」の心を起した。

【語釋】綿連（長く續くこと。）○滋川（汝州魯山縣から源を發する川、また、いふの名がある。）○杳渺（遙に暗き貌。）○鴉路（汝州から洛陽に赴く便路。後漢の光武帝が河湖に赴かうとして路を失ひし時、鴉が馬前に飛んで案内したので因つて魯山縣の名がある。）○彭澤（晉陶淵明は彭澤縣令になつた。因つて彭澤に比して言つたのである。）

平蕃曲二首

劉長卿

【敍說】平蕃曲は樂府題で、胡を平げて凱旋したことを歌ふ歌曲である。

渺渺戍煙孤。茫茫塞草枯。
隴頭那用閉。萬里不防胡。

【通釋】遙に見渡せば戍樓の烽火の煙も稀になり、ただ邊塞の草が一面に冬枯れしてゐるのを見るばかりである。もうこれからは隴山の關所を閉ぢる必要はない。萬里に亙つて胡を防ぐ警備がいらなくなつたのであるから。

【語釋】渺渺（ひろ〳〵とした貌。）○戍煙（戍はマモルと訓じ、守備すること。守備兵の居る樓で擧げるのろしの煙。胡兵が入寇すれば合圖として烽火を擧げるのである。孤は少いことで、戍卒の警備が少くなつたことをいふ。）○茫茫（渺々に同じ。）○塞草（塞境の城塞の草。）○隴頭（隴山のほとり。隴山は陝西省の縣に在る。山下に隴水がある。）

其二

絕漠大軍還。平沙獨戍閒。
空留一片石。萬古在燕山。

【通釋】沙漠を横切つて大軍が還つた後には、平々坦々たる沙漠の間にただ一個の戍營（守備兵の陣屋。）を設け、それも甚だ閑暇無事で、功を刻した一片の記念碑が永久に見る人もなく燕然山上に留めてあるのは、國家の爲に慶賀の至だ。

語釋 絶漠（沙漠を横切る。まつすぐに横切ることを絶といふ。）○平沙（平な沙漠。）○獨戍（一個の守備の兵營。）○萬古（永久といふが如し。）○燕山（燕然山なり後漢の竇憲車騎將軍となり、北單于を破り、遂に燕然山に登り、石に刻して功を勒した故事を用ひたのである。）

逢俠者

錢起

叙説 豪俠の士に逢うて作つた詩である。

燕趙悲歌士。相逢劇孟家。
寸心言不盡。前路日將斜。

燕趙悲歌の士、相逢ふ劇孟が家。
寸心言ひ盡さず、前路日將に斜ならんとす。

通釋 燕悲趙歌慷慨の士に比すべき吾は、今劇孟（俠者の名。）に對うて意氣大に投合し、胸中の感慨を語つたが、いくら語つても語り盡せない。吾年既に老い此の人と事を俱にすることの出來ないのは誠に殘念である。

語釋 燕趙悲歌士（燕や趙は昔から悲歌慷慨の士が多く出る。江淹の書に齊魯奇節之人、燕趙悲歌之士とある。錢起自ら比して言ふ。）○劇孟家（家の字は韻を合せる爲に添へたのである。劇孟は漢の洛陽の人、任俠を以て諸侯の間に顯れた。）○寸心（吾が心中の感慨。）○前路日將斜（前途は日が暮れかかつてゐるといふ意で、老境に入つて餘命の幾何もないのに喩へたのである。）

江行無題

錢起

叙説 この詩は江行の際匡廬を望んで作つたのである。錢起嘗て楚を歷て吳に入り江行百首を作る。蓋し其の時の作であらう。無題とは別に題を定めないので、宋の陸放翁は「唐人ノ詩中有下曰フ無題ト者上。率ネ杯酒狎邪之語、以テ其ノ不ルヲ可カラ指言ス。故ニ謂フ之ヲ無題ト。非ニ眞ニ無キニ題也と言つてゐる。

咫尺愁風雨。匡廬不可登。
秪疑雲霧窟。猶有六朝僧。

咫尺風雨を愁ふ、匡廬登る可らず。
秪疑ふ雲霧の窟、猶六朝の僧あらんかと。

通釋 匡廬の山は眼前咫尺の間に見えるけれども、風雨の驟に至らんことを愁へて登ることが出來ない。それにも拘らず蜘蛛懸戀の情に堪へないのは、あの雲霧の深く罩めた窟の中に今でも六朝時代の高僧などが居はしまいかと思はれるからである。

語釋 咫尺（咫は八寸、尺は一尺。極めて近きこと。）○匡廬（廬山。江西省南康府に在る。）○六朝僧（六朝とは吳・宋齊梁陳をいふ。六朝の僧とは支遁・惠遠等の廬山に住した高僧をいふ。）

秋夜寄丘二十二員外

韋應物

敘說 秋の夜に丘二十二員外（二十二は排行、員外は官名。）に寄せた詩である。

懷レ君屬二秋夜一　散歩咏二涼天一
山空松子落　幽人應レ未レ眠

通釋 秋の夜は君を懷ふことが一入まさり、庭上を散歩し涼天に嘯詠してゐるが、君も寂寂たる空山の中に在り松子の落つる音を聞き、未だ眠に就かずして我を懷ひ居るであらう。

語釋 屬（當るといふが如し。）　○涼天（秋の時節。）　○松子（松の實。）　○幽人（閑寂を愛する人。丘員外を指す。）

韋應物

聽二江笛一送二陸侍御一

敘說 江上の笛の音を聽き陸侍御（侍御は官名。）を送る詩である。韋應物が蘇州刺史たりし時の作であらう。

遠聽二江上笛一　臨レ觴一送レ君
還愁獨宿夜　更向二郡齋一聞

通釋 別の杯を擧げて君の去るのを送れば、遠く江上に聲き渡る笛の音が特に我が悲を添へる。今さへかうなのであるから、君と別れて我獨り郡齋に宿する時、この聲を聞いたら、いかばかり悲しいであらうか。それが今から思ひ遣られる。

語釋 一（ひとへに。）　○向（於と同意。）　○郡齋（郡守即ち刺史の居る所の官舍。）

聞レ雁

敘說 雁の聲を聞いて故郷を思ふ詩である。

故園渺何處　歸思方悠哉
淮南秋雨夜　高齋聞二雁來一

通釋 淮南の秋雨の夜に、獨り高樓に坐して雁の鳴き渡る聲を聞けば、懷鄉の情がむら〳〵と起り、我が故鄉はどちらの方かと望めども見えず、ます〳〵我が歸心を深うする。

語釋 故園（故鄉。）　○渺（遙遠の貌。）　○歸思（故鄉に歸りたく思ふ心。）　○悠哉（やまざるをいふ。）　○淮南（淮水の南。この詩は作者が滁州刺史たりし時の作であらう。滁州は淮南に在る。）　○高齋（高樓。）

答李澣

韋應物

叙說 楚地に退隱してゐる李澣に答へた詩である。

林中觀易罷。溪上對鷗閒。
楚俗饒詞客。何人最往還。

林中易を觀罷んで、溪上鷗に對して閒なり。
楚俗詞客饒し、何人か最も往還する。

通釋 君は林中に易經を讀み、天人の理を窮め、倦めば鷗に對して溪上に閑坐するであらう。楚地には屈原・宋玉以來詞人が多いが、君は誰といふ詞人と親交を結んでゐるか。誠に羨ましいことだ。

語釋 詞客（詩人。）〇往還（往來なり。交際すること。）

婕妤怨

皇甫冉

叙說 婕妤怨は樂府題で班婕妤（前の王維の班婕妤を見よ）の事を詠じたものである。

皇甫冉、字は茂政、潤州の人。天寶の間、弟曾と倶に登第す。無錫の尉を授けられ、難を避けて陽羨に居る。大曆中、王縉が掌書記と爲り、後左金吾衛兵曹參軍左輔闕となつて卒す。

花枝出建章。鳳管發昭陽。
借問承恩者。雙蛾幾許長。

花枝建章を出で、鳳管昭陽に發る。
借問す恩を承くる者、雙蛾幾許か長き。

通釋 花の枝が高く建章宮外に擢で、笙の聲が盛に昭陽宮から湧き起る。定めて天子樣が御臨幸になつて宴を張つてゐられるのであらう。ちよつと聞きたいものだが、一體我に代つて天子樣の御恩寵を蒙つた趙飛燕は、眉がどの位長いのであらう。自分も長く眉を畫いて容色を飾ればよかつたものをと、婦人の痴情を述べたのである。

語釋 建章（漢の宮殿の名。）〇鳳管（笙なり。）〇昭陽（趙飛燕の居る宮の名。）〇借問（かりに問ふといふ意。）〇雙蛾（蛾の如く美しき二ツの眉。眉を畫くは長きを以て美となす。）

題竹林寺

朱放

叙說 廬山（江西省南康府に在る山）の竹林寺の壁に書きつけた詩である。

朱放、字は長通、襄州の人。越の燕溪に隱居してゐたが、後江西節度參謀となり、貞元の初、召され

て拾遺となりしも就かず。

歲月人間促。煙霞此地多。
殷勤竹林寺。更得幾回過。

通釋 歲月は急速に遷轉して人生は短いが、此の地には幽景の賞すべきものが多い。生きてゐる間に幾度も來ることは出來まいと思ふので、ねんごろに此の竹林寺に心を寄せて遊賞する。

語釋 煙霞(幽景を云ふ。) ○殷勤(ねんごろに。情を厚くすること。)

秋日

耿湋

叙說 秋の荒涼たる景を叙した詩である。

耿湋は河東の人。代宗の寶應二年の進士。大理司法となり左拾遺に終る。

返照入閭巷。憂來誰共語。
古道少人行。秋風動禾黍。

通釋 夕日の寂寂たる陋巷を照す時、共に語るべき友もなく憂を抱いて獨り坐すれば、古道には人の往來も絶え、ただ秋風が淋しく黍を吹き動かしてゐる。

語釋 返照(夕日のてりかへすこと。) ○閭巷(陋巷なり。) ○禾黍(き。)

和張僕射塞下曲

盧綸

叙說 張僕射は尚書の官名の塞下曲は樂府題で邊塞のことを詠ずる詞に和した詩である。

月黑雁飛高。單于遠遁逃。
欲將輕騎逐。大雪滿弓刀。

通釋 月暗く雁の高く飛ぶ時、夜に乘じて匈奴王が遠く北に逃げ去つた。因つて輕騎を率ゐて之を逐はんと欲すれば、俄に大雪が降つて來て弓も刀も雪に埋められ、追擊することが出來なくなつた。

語釋 月黑(暗夜なり。) ○單于(匈奴の王なり。) ○輕騎(身輕な騎兵。)

別盧秦卿

司空曙

叙說 盧秦卿の去らんとする時、別を惜んだ詩である。司空曙、字は文明、廣平の人。貞元の初、水部郎中となり、虞部郎中に終る。

知有前期在。難分此夜中。
無將故人酒。不及石尤風。

前期の在る有るを知れども、分れ難し此の夜の中。故人の酒を將て、石尤風に及ばずとする無かれ。

通釋 前途の期限があつて緩りしてはゐられないでもあらうが、今夜君に別れるにはどうしても忍びない。若し今颶風が起ればいくら前途を急ぐとも船出することは出來まい。然るに我が酒に對し、徒に前期あるを以て辭して去らば、故人の酒を以て石尤風に及ばずとするものである。だからそんなすげない仕打をせずに、我が勸むる酒を飲んで、今夜はゆつくり歡を盡されよ。

語釋 前期（行先の期限。）○故人（舊友。司空曙自ら謂ふ。）○石尤風（颶風をいふ。）

幽州

李益

叙說 幽州は唐の范陽郡、今直隸省に屬する。この詩は李益が幽州節度使劉濟の幕僚となつてゐた時の作である。

征戍在桑乾。年年薊水寒。
殷勤驛西路。此去向長安。

征戍して桑乾に在り、年年薊水寒し。殷勤にす驛西の路、此を去つて長安に向ふ。

通釋 吾は桑乾河の邊に征戍し、年年河の寒き流を見て故鄉を思うてゐる。この驛西の路を去れば故鄉の長安に行けるのだと思へば、何となく心が牽かれて懷かしさに堪へない。

語釋 征戍（行きまもる。）○桑乾（河の名。幽州に在る。）○薊水（薊州の河。即ち桑乾河。）○殷勤（前の朱放の題竹林寺を見よ。）○此去（此は驛西の路を指す。）○長安（唐の都。李益の故鄉。）

三閭廟

戴叔倫

叙說 三閭大夫（官名）屈原の廟に詣でて作つた詩で、廟は長沙府湘陰縣に在る。戴叔倫、字は幼公、潤州の人。蕭穎士の門人。

沅湘流不盡。屈子怨何深。

沅湘流れて盡きず、屈子怨何ぞ深き。

日暮秋風起。蕭蕭楓樹林。

通釋 沅湘の流れて盡きないのは屈原の怨の深くして消えないやうである。折しも日暮れて秋風起り、蕭蕭として楓樹の林を吹いてゐる。誠に物淋しい景色である。

語釋 沅湘（二川の名。長沙に在る。）○屈子（屈原をいふ。屈原は楚の王族で三閭大夫となり、一時懐王の信任を受けたが讒に遇うて江南に流され、汨羅に投じて死んだ。）○蕭蕭（秋風の聲。）○楓樹林（湘江のあたりには楓樹が多い。）

思君恩

令狐楚

敘說 思君恩は樂府題で失寵者の怨思を詠ずる詩である。

令狐楚、字は穀士、燉煌の人。進士に擧げられて太原の書記となり、德宗の時、中書侍郎同平章事に累遷し、後山南節度使となりて卒す。

小苑鶯歌歇。長門蝶舞多。
眼看春又去。翠輦不曾過。

通釋 小苑には鶯の歌が歇み、長門には蝶が頻に舞うてゐる。陛下の御臨幸を仰ぐことも出來ず、眼に看る春又去るを、翠輦曾て過らず。

語釋 長門（宮の名。漢の武帝の陳皇后の退き居りし處）○翠輦（天子の御車。翠羽を以て飾る故にいふ。）

登柳州鷲山

柳宗元

敘說 鷲山は柳州（廣西省府城の西に在り、山巓に石あり形鷲に似たり。故に名づく。柳宗元が柳州刺史たりし時の作である。

荒山秋日午。獨上意悠悠。
如何望鄉處。西北是瀧州。

通釋 秋の眞晝に獨り鷲山に登れば、我が思は悠々として極まる所を知らない。どういふものか西北の吾が故郷を望めば、故郷は見えないで只瀧州が見えるばかりである。

語釋 荒山（荒涼たる山。鷲山を指していふ。）○悠悠（遙遠なる貌。）○瀧州（柳州の北三十里に在り。）

秋風引

劉禹錫

敍說 秋風引は樂府題である。秋風の客心を驚かすことを述べた詩である。劉禹錫、字は夢得、中山の人。貞元元年の進士。監察御史となる。王叔文の事に坐して朗州司馬に貶せられ、召還せられて復出されて播州に刺たり。連州・夔州・和州に徙る。入りて主客郎中となる。裴度薦めて翰林學士となす。太子賓客に遷る。會昌の間、檢校禮部尙書を以て卒す。

何處秋風至。蕭蕭送雁羣。
朝來入庭樹。孤客最先聞。

通釋 何處から來たのか秋風が俄に起り、蕭々として雁の羣を吹き送る。他鄕に客となり常に旅愁を抱く所の我は、誰よりも先に今朝秋風の樹間に吹き入るのを聞いた。

語釋 蕭蕭(風の聲。) ○孤客(劉禹錫「自ら謂ふ。」)

輦路感懷

呂溫

敍說 滻縣は河南に在り。この詩は途上の感懷を詠じた詩である。呂溫、字は和叔、河中の人。陸贄に從つて春秋を治む。進士に擢んでられ、憲宗の時均州刺史に貶せられ、再び道州刺史に貶せらる。

馬嘶白日暮。劍鳴秋氣來。
我心渺無際。河上空徘徊。

通釋 長途日暮れ馬は疲れて嘶き、秋節正に至り、金氣秋の肅殺として腰間の長劍が特に鳴る。我が旅中の心は渺として託する所なく、空しく黃河のほとりを徘徊してゐる。

語釋 渺(遙なる貌。) ○河上(洛水は滻を納れて黃河に入る。) ○徘徊(さまよふ。)

古別離

孟郊

敍說 古別離は樂府題である。孟郊、字は東野、湖州の人。少くして嵩山に隱る。五十にして進士の第に登り溧陽尉となる。鄭餘慶

奏して參謀となす。卒して貞曜先生と謚す。

○欲別牽郎衣。郎今到何處。
不恨歸來遲。莫向臨邛去。

通釋 夫の去るに臨み別を惜んで其の袖を牽き、「一體どこへ往かせらるるか。歸りの遲いのは敢て厭ひはせねど、臨邛にだけは往つて下さるな」と、若しや卓文君のやうな美人がゐて、夫が其の擒となり、新愛に迷うて歸るのを忘れるやうな事があつては大變だと懸念する婦人の情態を寫したのである。

語釋 郎(妻から夫を指して言ふ。) ○到(往くに同じ。) ○臨邛(蜀の地名。臨邛の富人卓王孫の女の卓文君が漢の司馬相如の許に奔り、親の意に背いて夫婦になつた故事がある。)

尋隱者不遇

賈島

敘說 山中に隱者を訪うて遇はれなかつたことを叙した詩である。賈島、字は閬仙、范陽の人。連に第せず。遂に僧となり無本と名づく。東都に來るや韓愈之に教へて文を作らしむ。遂に進士に擧げられ、大中の末、長江主簿となる。

松下問童子。言師採藥去。
只在此山中。雲深不知處。

通釋 松の木の下で童子に師の行方を問へば、「師は藥草を採りに出かけられた」といふ。いづれ此の山の中に居るに相違ないが、雲が深く罩めてゐるので在處がわからない。

語釋 師(隱者を指して言ふ。)

宮中題

文宗皇帝

敘說 文宗の太和九年十一月二十一日、宰相李訓宦官を誅せんことを謀り先づ人をして金吾廳事の後の石榴に甘露降れりと奏せしめ、百官を率ゐて往き視しむ。帝宰相をして先づ往きて視しむ。訓陽り言ふ眞に非ずと。帝宦官仇士良をして諸宦官を率ゐて往き視しむ。士良等既に至り、風幕を吹き起し兵を執る者無數なるを見、驚き走りて變を告ぐ。訓事の濟らざるを知りて走る。これを甘露の變といふ

是より後仇士良權を專にす。帝憤りて此の詩を作る。

文宗皇帝、諱は昂、穆宗の子。宦官の專横を惡み、李訓・鄭注等を擢用し、將に大に爲す所あらんとす。而も事成らず、却つて宦官に制せられ、治功を立つる能はず、年三十三にして崩ず。在位十五年。

通釋 春になつても出遊することがないので草が輦路を埋め、上林苑の花は賞する者もなく徒に唉き誇つてゐる。高樓の上から此の景を眺めて無限の哀愁を起したが、侍臣の中にも朕が心中を知る者は一人もなく、誠に淋しさに堪へられない。

語釋 輦路（天子の御通路。）○上林（天子の御苑。）○憑レ高（高樓に登る。）○何限（無限に同じ。）

鑑論 通行本には輦路生二秋草一とあるが、今全唐詩に據つて春草と改めた。

輦路生二春草一。上林花滿レ枝。
憑レ高何限レ意。無二復侍臣一知。

勸レ酒

于武陵

敍說 酒を勸めて快飲せしめる詩である。于武陵は杜曲の人、大中間、李郢、李頻等と時を同うす。

勸レ君金屈巵。滿酌不レ須レ辭。
花發多二風雨一。人生足二別離一。

通釋 兎角花が開けば風雨が多く、人生には別離の悲が多くて良會は得難いものだ。幸に今君と花の下で會飲するのだから、杯を持ち溢るゝばかりに酒を酌み、之を君に勸めるから、辭退せずに飲むがよい。

語釋 金屈巵（トリテのついてゐる金製性の杯。）○滿酌（滿注といふが如し。）○足二別離一（足も多の意。）

秋日湖上

薛瑩

敍說 秋、太湖に遊ひ、吳越六朝興亡の跡を懷うて作つた詩である。薛瑩は唐末の人。

落日五湖遊。煙波處處愁。

落日五湖に遊ぶ、煙波處處愁ふ。

浮沈千古事。誰與問東流。

通釋　日暮に方り太湖に舟を泛べて遊べば、茫茫たる煙波往くとして愁を催さしめない處はない。浮沈興廢定めなき人生の事をば、誰と與に東流の水に問ふであらう。實に千古變らぬものは唯この東流の水ばかりである。

語釋　落日（夕方。）　○五湖（太湖・震澤等の名あり。今蘇浙江二省に跨る。湖中に小山散在多く、東西二洞庭最も著はる。）　○煙波（煙の籠めた波。）　○千古（古來。）

題慈恩塔

荊叔

敍說　慈恩寺（卷一、岑參の詩を見よ）の塔に題した詩である。荊叔は舒里詳ならず。洪邁の容齋隨筆に、慈恩寺有リ荊叔ガ一絕一字極メテ小ニシテ而端勁、其の詞意高遠、不レ知ラ爲ニヌル何ノ時ノ人一。必ズ唐世詩流ノ所レ作也とある。又山本北山の作詩志彀には、「此の詩もと終南山の石に刻みありし詩なり。毫末も慈恩寺の塔に干渉せず。而るに唐詩選に荊叔が作として題ニスル慈恩ノ塔一ニ詩とす。是れ品彙・正聲（皆詩集の名）の疎謬を踏めるなり。」郎瑛（明人）が七修類稿に終南山ニ有リ一白石一刻ニス一詩一ヲ詩有リ唐風一字ノ乃チ晉體、深サ五七分。惜ムラクハ無レキ名也。其ノ句漢國山河在リ云云。及レ讀ニムニ唐詩紀事一ヲ而此ノ詩亦曰レヒテ題レスト塔ニ係ニク於無名之下一ニ因テ考ニフルニ姓氏諸書一ヲ並ニ無シ荊叔トイフ者一。而シテ紀事ハ可レシ謂フ收メテ唐人ノ能レクスル詩ヲ者一ヲ盡上セリト矣。此レ特ダ好事ノ者寫ニス此ノ詩ヲ於塔一ニ。高廷禮不レシテ考ヘ而編ニ入ス於正聲一ニといふ。是を以て觀れば荊叔は詩を塔に寫す者の名にして作者の名にあらず。詩も亦題レスル塔ニ詩にあらず。世儒知らず牽合胡說して解を費す、痴人の夢を說くが如し」とある。

漢國山河在。秦陵草樹深。
暮雲千里色。無處不傷レ心。

通釋　秦・漢の世は已に滅亡してしまつたけれども、山河丘陵は今尙ほ依然として存し、草樹が鬱葱と茂つてゐる。千里一望暮色蕭條として物淋しく、一として我が心を傷ましめない處はない。

無名氏

敍說　伊州歌は樂府の曲調の名で、樂府詩集に、開元中、西涼節度使蓋嘉運ノ所レ進ムル也とある。この詩の作者を蓋嘉運とする者があるが、それは誤である。蓋嘉運は西涼地方の曲調を採進しただけである。

此の詩句を作つたのではない。伊州は今の新疆省哈密縣の地で、漢には伊吾盧というた。この詩は妻が胡地に遠征してゐる夫を思ふ意である。

聞道黃花戍。頻年不レ解レ兵。
可レ憐閨裏月。偏照二漢家一營。

通釋 風の便に聞けば夫の遠征してゐる黃花戍は、年年戰爭が息まないさうだ。されば夫も當分還る見込はなく、吾も其の地に行くことは出來ない。ただ吾が空閨を照すあの愛すべき月が、亦能く夫の居る漢軍の陣屋を照すであらうと思へば、それが責めてもの慰めである。

語釋 聞道(噂に聞けば)　○黃花戍(伊州に在る城塞の名。)　○頻年(年年といふが如し。)　○不レ解レ兵(兵連りて解けず。)　○可レ憐(愛すべしの意。)　○閨裏(閨中なり。)　○漢家(漢なり。實は唐なれども、漢を借りていふは屠詩の常例なり。)

其二

打二起黃鶯兒一。莫レ教二枝上一レ啼。
啼時驚二妾夢一。不レ得レ到二遼西一。

通釋 黃鶯兒を打起して、枝上に啼かしむる莫れ。啼く時妾が夢を驚かし、遼西に到るを得ざらしむ。

語釋 打起(おひはらふこと。)　○黃鶯兒(兒は助辭。)　○遼西(郡名。古城は今の直隸省盧龍縣の東に在り。)

餘論 全唐詩話には此の詩を春怨と題し金昌緒の作としてある。秋山玉山が之を端唄に譯して、「誰ぞやあの花ふみ散らす鶯を、いなせてたもれ、啼かすなよ。啼けばぞ賤が目もあはず、戀しき人を夢にだも、見せぬわいナ」としたと蜀山人の一話一言に見える。

哥舒歌

西鄙人

敘說 哥舒翰は吐蕃を禦いで勇名を轟かした將軍である。後安史の亂の時には潼關を守つて失敗したが、この詩は潼關敗績以前に西鄙の無名子が其の功を譽めて作つたのである。

北斗七星高。哥舒夜帶レ刀。

至レ今窺レ牧レ馬。不二敢過一臨洮一。

今に至るまで馬を牧せんと窺ふも、敢て臨洮を過ず。

通釋 夜更け北斗七星の高く大空に輝く時、哥舒將軍は尚ほ刀を釋かず警戒嚴肅であつた。されば今に至るまで胡虜が我が邊境を窺ひ馬を牧せんとするも、哥舒將軍の餘威を畏れて、敢て臨洮に入寇しない。

語釋 北斗七星(星の名。)　○臨洮(縣の名。隴西郡に屬す。)

答レ人

太上隱者

敍說 人の年齡を問へるに答へた詩である。太上隱者とは此の上なき至極の隱者といふ意。その姓名はわからない。

偶來二松樹ノ下一。高枕レシテヲ石頭ニ眠ル。
山中無レシ二曆日一。寒盡不レ知レ年ヲ。

通釋 偶〻松樹の下に來り、枕を高うして石頭に眠る。山中曆日無し、寒盡くれども年を知らず。自分は何といふ目的もなく偶然この松の木の下に來て石を枕に安眠してゐるのだ。山の中には曆がないから、冬が去れば春が來るのは知つてゐるが、今年は何年だなどといふ事は知らない。

語釋 石頭(石上といふが如し。)

唐詩選新釋卷七

七言絶句

七言の句、四句から成る詩をいふ。

蜀中九日

王勃

【敍說】九日とは九月九日、重陽の節句をいふ。此の詩は王勃が斥けられて蜀に在り、重陽の節句に臺に登り客を送つた時の作である。送別の爲に作つたのでないから、たゞ蜀中・九日と題した。

【通釋】九月九日望鄉臺。他席他鄉送客杯。
九月九日望鄉臺。他席他鄉客を送るの杯。
人情已厭南中苦。鴻雁那從北地來。
人情已に南中の苦を厭ふ。鴻雁那ぞ北地より來る。

【語釋】九月九日の節句に、望鄉臺に登り（重陽には高い臺に登り菊花の酒を飲み、一年中の厄拂をするのが當時の風習である）、他鄉の他席で送別の酒を酌むことになつた（臺の望鄉と名づくるは鄉思を起すの一なり。他席他鄉は其の二なり。客中客を送つて離杯を酌むは其の三なり）。吾は已に此の南方蜀地に流寓し、愁苦を厭ひ早く北に歸りたいと思ひ居るに、あの雁はなぜ北方京師の地から、わざとこちらへ飛んで來るのであらう（秋になれば雁は北から南に飛びかへるものである）。

【語釋】望鄉臺（臺の名。杜詩註に臺ハ成都ノ北ニ在リ、隋ノ蜀王秀ノ築ク所とある。）○北地（北方京師の地。王勃の故鄉。）○他席他鄉（他鄉の他席といふが如し。）○南中（南方の地方。こゝは蜀を指す。）○鴻雁（雁なり。）

【餘論】絶句は對句を用ひないのが普通であるが、この詩は第一句と第二句、第三句と第四句、それ〴〵對句になつてゐる。かゝる體を全對格といふ。有情の人を以て無情の鳥を尤むるは、最も悽怨の情の深きを見る。

渡湘江

杜審言

【敍說】湘江は湖南省の大川で、荆州記に「北流すること二千里にして洞庭（湖の名）に入る」とある。此の詩は事に坐して峯州（古の夜郎の地、今は佛領東京州に屬す）に流され、湘江を渡る時の作である。

遲日園林悲昔遊。今春花鳥作邊愁。
獨憐京國人南竄。不似湘江水北流。

遲日園林昔遊を悲む。今春花鳥邊愁を作す。獨り憐む京國の人南竄せられて、湘江の水の北流するに似ざるを。

通釋 昔は京にゐて春の日永に園林に遊び、花を見鳥の聲を聞いて樂んだが、今年の春は花を見ても鳥の聲を聞いても、旅の愁を催し徒に昔遊を悲むのみである。吾は北方京地の人でありながら南方に流されて、此の川の水のやうに北に歸ることの出來ないのを、獨り自ら憐んでゐる。

語釋 遲日（永き春の日。詩經に春日遲遲とあり、日脚のおそいこと。）○邊愁（邊地に居る旅愁。）○南竄（罪を得て南方に流される。）

餘論 此の詩も前の王勃の詩と同じく全對格である。且つ有情の人が無情の水を羨む趣も相似てゐる。

贈蘇綰書記

杜審言

叙說 蘇は姓、綰は名、書記は官名、記室ともいふ。唐書百官志に「元帥節度使有掌書記一人」とある。此の詩は蘇綰が朔方節度使の掌書記となつて北邊に赴くについて、己の感想を賦して贈つたのである。

知君書記本翩翩。爲許從戎赴朔邊。
紅粉樓中應計日。燕支山下莫經年。

知る君が書記もと翩翩。爲に許す戎に從つて朔邊に赴くを。紅粉樓中應に日を計ふべし　燕支山下年を經るなかれ。

通釋 余は君の文才の翩翩として飛鳥の滯なきが如く、自由自在であることを知る。されば今度掌書記となり軍に從つて北邊に赴くやうになつたのも、固より當然であると思ふ。然し君の令閨は君の歸りを指折り數へて待つてゐるであらうから、燕支山下の美女に心を奪はれずに、成るべく早く歸るがよい。

語釋 書記（書牘奏記などの文章。）○翩翩（魏の文帝の吳質に與ふる書に、元瑜書記翩翩とあるを用ふ。）○爲許（それゆゑに自ら許して怪まないといふ意。）○從戎（戎は軍なり、節度使は武官であるから戎といふ。）○朔邊（朔は北なり。邊は邊地。）○紅粉樓（粧樓、化粧室。妻の居る處。）○燕支山（塞外の山の名、この山に紅藍を產す、以て燕脂となすべし。西河故事に、祁連・燕支山ハ、冬温ニ夏涼シ畜ノ牧養ニ宜シ。匈奴二山ヲ失フ。乃チ歌ツテ曰ク、我ガ祁連山ヲ亡フ、我ガ六畜ヲシテ蕃息セザラシム。我ガ燕支山ヲ失フ。我ガ婦女ヲシテ顏色ナカラシムとあり。山下に美女多し。）

餘論 この詩は後の二句が對句になつてゐる。これを前散後對格といふ。

戲贈趙使君美人

敘說 刺君は刺史（官名）の稱。趙は姓、蓋し楚地の刺史であらう。美人が趙使君の聘に應じて粧を凝らし馬に乘つて往くのに遇つて、戲に贈つたものである。

紅粉青蛾映楚雲。桃花馬上石榴裙。
羅敷獨り向東方去。謾學他家作使君。

通釋 べにおしろいや黛を施した花の如き顏が楚山の雲と相映じ、桃花馬に乘り猩猩緋の衣裳をまとつてゐる、其のあでやかさは、筆にも口にも言ひやうがない。之を昔にたとへて見れば、羅敷（昔の美人の名）が東方に向つて夫の許に去らんとする時のやうだ。吾今この美人を見、ふと昔羅敷を挑んだ趙王のまねをして見やうかと思つたくらゐだ。

語釋 紅粉（べに、おしろい。化粧料。）　○青蛾（蛾は美人の眉。蛾の眉のやうに弓形をなしてゐて美しいからいふ。青はマユズミで畫いた色。）　○桃花馬（白い毛に紅のさし毛のある馬。つきげの馬。）　○石榴裙（裙は衣のすそ。石榴はザクロのことで、緋色をいふ。）　○羅敷（古樂府に陌上桑と題するあり。その大意をかいつまんで述べよう。秦氏に羅敷といふ娘があつて同邑の王仁といふ人の妻になつた。非常な美貌であつたので誰の目にもついた。ある時羅敷が桑を摘んでゐると、趙王が通りかかつて其の美貌に心を奪はれ、共に車に乘つて往かないかと勸めた所が、羅敷は大に腹を立て、使君自ら婦あらん、羅敷自ら夫あり、吾が夫は東方千騎の長なり。無禮を愼めと、にべもなく拒絕した。）　○謾（戲に。ふと。）　○他家（他人、卽ち趙王。）　○使君（趙王なり。）

餘論 趙使君の美人だから、昔の陌上桑の故事の趙王と羅敷とを借りて來て、かくは戲れたのである。

銅雀臺

劉廷琦

敘說 銅雀臺は河南省彰德府臨漳縣に在り、魏の武帝が建てたもので、大銅雀を鑄て之を樓頂に置いたから銅雀と名づけた。武帝の崩ずる時、「吾死せば總帳を樓上に施し、朝暮宮人をして帳中に歌吹し、吾が西陵の墓を望ましめよ」と遺命した。此の詩は臺の燒けて跡なきを見、懷古の情を述べたのである。

劉廷琦は開元の初の人とのみで、爵里等は明でない。

銅臺宮觀委灰塵。魏主園陵漳水濱。
卽今西望猶堪思。況復當時歌舞人。

銅臺の宮觀灰塵に委す。魏主の園陵漳水の濱。
卽今西望猶ほ思ふに堪へたり。況や復た當時歌舞の人をや。

通釋 銅雀臺の樓閣は燒失してしまつて、今は魏の陵墓が漳水（川の名）の濱に殘存してゐるばかりだ。（生前の樂地を見ず、たゞ死後の遺丘を存す）。今この銅雀臺の跡から西の陵墓を望み見てすら感慨に堪へないから、まして當時遺命を受け歌舞した宮女などは、定めて悲傷の情が深かつたであらう。

語釋 銅臺（銅雀臺。）○宮觀（觀は樓閣。）○魏主（魏の武帝曹操。）○園陵（みさざ。）○即今（今、今日。今）

○邙山

沈佺期

紋說 北邙山は洛陽の北に在り、古來共同墓地として有名である。此の詩は北邙山を見て、富貴榮華の頼むに足らぬことを悲んだのである。

北邙山上列墳塋。萬古千秋對洛城。
城中日夕歌鐘起。山上唯聞松柏聲。

通釋 北邙山の上には墓が多くならんで、昔から變りなく洛陽城と相對してゐる。さて洛陽の都人は朝となく晩となく、歌ひつ舞ひつ、歡樂を事としてゐるが、やがて三寸息絶ゆれば、墓の主となるのが人生の定めであつて、北邙山の上では唯物淋しき松風の音を聞くばかりだ。何と果敢ない人の運命であらう。

語釋 墳塋（墓をいふ。）○萬古千秋（千萬年の昔から。）○松柏（墓に植ゑてある木の名。）

送司馬道士遊天台

宋之問

紋說 道士とは道教を修め仙術を學び得た人をいふ。唐書隱逸傳に、「司馬承禎、天台山に廬して出でず。睿宗皇帝召して道を問ふ。幾もなく固辭して山に還る。朝士詩を贈る者百餘人」とある。此の詩は其の一である。天台山は浙江省台州府に在る。

羽客笙歌此地違。離筵數處白雲飛。
蓬萊闕下長相憶、桐柏山頭去不歸。

通釋 羽客の笙歌此の地に違ふ。離筵數處白雲飛ぶ。蓬萊闕下長く相憶ふも、桐柏山頭去つて歸らじ。

通釋 君は一曲の笙歌を名殘として永く此の地を去るのだ。(別に臨んで司馬道士が笙歌を奏したのであらう。唐書禮樂志に、司馬道士は音律に精しかつたとある)、折しも送別會の席上處處に白雲の飛ぶを見た。(後漢書方術傳に「薊子訓神異の道あり。去る日たゞ白雲の騰起するを見る。旦より暮に至るまで、是の如きこと數處」とある故事を用ふ)。吾等は、都にゐて長く君を憶ふも、君は桐柏山(天台山の別名)の頂に隱れて再び歸らぬであらう。名殘惜しいことだ。

語釋 羽客(仙人。司馬道士を指す。) ○違(去ること) ○離筵(送別の宴席。) ○蓬萊(宮殿の名)

送梁六

張說

敘說 この詩は張說が貶せられて岳州に在りし時、梁六が舟に乘つて洞庭湖中の君山に歸隱するのを送る作である。梁は姓、六は輩行、蓋し隱者であらう。故に詩中に梁六を呼んで神仙と謂つてゐる。

巴陵一望洞庭秋。日見孤峯水上浮。
聞道神仙不可接。心隨湖水共悠悠。

通釋 この巴陵(唐書地理志に「岳州巴陵郡に巴陵縣あり」とある)から洞庭湖上の秋景を望めば、日日君山の孤峯が水上に浮んでゐるのを見る。今君はあの君山に歸隱するのであるが、聞けば仙人は俗人とちがつて接見することは出來ないといふから、一たび別れては山は見えてもまたと相會ふことは叶はず。吾が君を慕ふ心は此の湖水と共に悠悠として盡きないであらう。

語釋 孤峯(洞庭湖の中にある山、君山をいふ。) ○聞道(聞く所に據れば、といふ意。) ○神仙(仙人なり。) ○不可接(接は近接なり、過ひ見ること。) ○悠悠(遙はてしなき貌。)

涼州詞

王翰

敘說 涼州は西北塞外の地、借りて樂曲の名となす。樂苑に「開元中、西涼府の都督郭知運の進むる所なり」とあり、西域記に「龜玆國王臣庶の樂を知る者と、大山の間に於て風水の聲を聽き、約節して音を成す。後飜して中國に入る。涼州・伊州・甘州の如き、皆龜玆の境なり」とある。涼州の地に行はれる聲調によつて此の詩を作つたから、涼州詞と題したのである。塞外の胡地に遠征してゐる兵士が痛飲豪興の狀を寫し、無限の哀情含めた傑作である。

王翰、字は子羽、晉陽の人、進士及第の後、昌樂の尉に調せられ、張說の推擧に由り開元中駕部員外郎となつたが、張說の相を罷むるに及び、出されて汝州長史となり、後道州司馬に貶せられた。杜甫の上三章左丞に與と題する詩に、李邕求レ識レ面、王翰願レ携レ鄰とあれば、當時詩人として有名であつたことがわかる。

蒲萄美酒夜光杯。欲レ飲琵琶馬上催。
醉臥沙場君莫レ笑。古來征戰幾人回。

通釋 葡萄の美酒を夜光の杯に酌み、飲まんとすれば馬上に琵琶を彈じて酒を侑める者がある。（酒宴の時は音樂を奏して興を添へるのが常である。之を侑めるといふ）。吾いま醉ひつぶれて此の沙漠に臥すとも、どうぞ笑つてくれるな。昔から胡地に遠征した者が幾人生きて還つたか。生きて還つた者は殆どない。自分の運命も推して知るべしである。せめて息の通つてゐる中に歡を盡さうと思ふのは當然だらうではないか

語釋 蒲萄（葡萄、蒲桃とも書く。果物の名。以て酒を釀す。）○夜光（玉の名。以て杯を作る。）○琵琶（樂器の名、もと西域から傳つたので、馬上で彈ずるを常とす。）○沙場（西域地方には沙漠がある。）○君莫レ笑（君とは廣く世人を指す。一說に琵琶を彈ずる者とす。今取らず。）

清平調詞三首

李白

敘說 清平調とは曲調の名。通典に「平調・清調・瑟調は皆周の房中の遺聲なり」とある。松窓錄に「禁中初め木芍藥（牡丹をいふ）を重んず。四本紅紫淺紅通白なるものを得、興慶池の東なる沈香亭の前に移植す。會〻花方に繁開す。上（玄宗皇帝）照夜白（駿馬の名）に乘り、太眞妃（楊貴妃）步輦を以て從ふ。詔して梨園弟子中の尤なる者を選び、樂十六色を得たり。李龜年歌を以て名を一時に擅にす。手に檀板を捧げ衆樂を抑して前む。上曰く名花を賞し妃子に對す。焉んぞ舊詞を用ひんやと。遂に龜年に命じ金花箋を持ち、宣して李白に賜ひ、立ちどころに清平調詞三章を進めしむ。白詔を承け筆を援いて之を賦す。龜年之を歌ふ。太眞妃頗梨七寶の杯を持ち西涼州の蒲萄酒を酌み、笑つて歌意を領することを甚だ厚し。上因つて玉笛を調し以て曲に倚せ、曲遍くして將に換へんとする毎に其の聲を遲くして以て之に媚ぶ。太眞妃飲み罷んで繡巾を斂め重ねて拜す。上是より李翰林（李

白は翰林學士たり）を顧ること尤も他の學士に異り」とある。此の詩は牡丹と楊貴妃とを併せ詠じて不即不離の妙を極めてゐる。

雲想二衣裳一花想レ容。春風拂レ檻露華濃。
若非二羣玉山頭見一。會向二瑤臺月下一逢。

通釋 雲を見ては楊貴妃の衣裳を想ひ、花を見ては楊貴妃の美貌を想ふ。楊貴妃の美しさは、徐に花檻を吹く春風にゆられ、しつとりと露を帶びて立つ牡丹に比することができる。かゝる美人は羣玉山頭に於てか、さらずば瑤臺の月下に於てのみ逢ふことが出來るであらう。到底俗界に於て見ることとは出來ない。

語釋 拂レ檻（檻は花壇の欄干。）○露華（露なり。）○羣玉山（西王母といふ仙女の居る所の山。）○瑤臺（仙女の居る所。楚辭に、瑤臺ノ偃蹇タルヲ望ミ佚女ヲ見ルとあり。註に、有娀ハ國ノ名佚ハ美ナリとあり。）

餘論 宋の蔡君謨が此の詩を葉想二衣裳一花想レ容と書いてから以來、雲は葉の誤であらうといふ者があつて、清の吳舒鳧の如きは、「この句は王昌齡の荷葉羅裙一色裁、芙蓉向レ臉兩邊開の句と倶に、梁の簡文帝の蓮花亂二臉色一荷葉雜二衣香一より脫出す、而して李は二の想の字を用ひ實を化して虛となし、尤も新穎を見る。知らず何人か誤りて雲の字となすや。而して解する者楚辭の青雲ノ衣兮白霓ノ裳に附會す。甚だ謂れなし」と言つてゐるが、王琦は之に反對して、「雲を改めて葉となせば便ち蠟を嚼むに同じく索然として味なし。此れ必ず君謨一時落筆の誤なり。意ありて金を點じて鐵と成すにあらず」と言つてゐる。若し葉とすればあまり牡丹にこびりつき過ぎる。且つ下に羣玉山だの瑤臺だのといふ仙境の文字があるから、仙氣を帶ばしめる爲に楚辭の青雲ノ衣を用ひ、風雲月露瑤玉等の文字を散點したので、雲とする方が意味深長であると思ふ。

其二

一枝濃艷露凝レ香。雲雨巫山枉斷腸。
借問漢宮誰得レ似。可憐飛燕倚二新粧一。

一枝の濃艷露香を凝らす。雲雨巫山枉げて斷腸す。
借問す漢宮誰か似るを得ん。可憐の飛燕新粧を倚る。

通釋 楊貴妃のあでやかさは、一枝の濃艶な牡丹の香に露がしつとりと置いた風情がある。昔楚の襄王は巫山の神女の雲となり雨となるのを見て斷腸の思をなしたといふが、此の風情に較べては、つまらぬものに強ひて心を勞したと謂ふべきである。さて數ある漢宮の美人の中で、誰か此の楊貴妃の美貌に比肩するに足るかといへば、かの可憐な趙飛燕が新粧を凝らし、自ら其の美を誇つてゐる所が稍似てゐると言はれよう。其の他には比肩し得べき者はない。

語釋 濃艶(あでやかなこと。) ○雲雨巫山(卷二、公子行の爲雲の中。) ○可憐(愛すべきこと。) ○飛燕(姓は趙氏、漢の成帝の皇后となる。) ○倚二新粧一(新粧は今化粧を施したばかりの所をいふ。倚は唐詩解頤に、倚ハ猶ホ負ムノゴトシ。自ラ其ノ美ヲ倚ムナリ。太白ノ詩ニ自倚嬌如花トアリ。舊解謬レリとある。今この說に從ふ。) ○枉(しなくてもよいことを强ひてするをいふ。) ○借問(かりに問ふといふ意。) ○漢宮(漢代の宮中。) ○飛燕(姓は趙氏、漢の成帝の皇后となる。) ○倚二新粧一(新粧は今化粧を施したばかりの所をいふ。倚は唐詩解頤に、倚ハ猶ホ負ムノゴトシ。自ラ其ノ美ヲ倚ムナリ。太白ノ詩ニ自倚嬌如花トアリ。舊解謬レリとある。今この說に從ふ。)

其三

名花傾國兩相歡。常二得君王一帶笑看。
解二釋春風無限恨一。沈香亭北倚二闌干一。

通釋 名花と傾國兩つながら相歡ず。常に君王の笑を帶びて看るを得。春風無限の恨を解釋して、沈香亭北闌干に倚る。

通釋 牡丹と貴妃と相共に歡を陛下に奉ず。皇帝は常に笑を含んで飽かず之を眺め給ふ。名花と傾國と能く皇帝の限なき春愁を一掃し去り、沈香亭の欄干に倚ることなれば、固よりさもあるべき筈である。

語釋 名花(牡丹をいふ。) ○傾國(美人をいふ。こゝは楊貴妃を指す。) ○君王(玄宗皇帝を指す。) ○解釋(釋も解なり。解も散滯釋なり。) ○沈香亭(亭の名。沈香といふ香木で造つたから此の名がある。) ○闌干(てすり。)

客中行

李白

敍說 唐詩解頤に、「此れ蓋し齊魯の間に遊びし時の作ならん」と言つてゐる。本集には客中ノ作と題してある。

蘭陵美酒鬱金香。玉椀盛來琥珀光。
但使二主人能醉一レ客。不レ知何處是他鄉。

通釋 蘭陵の美酒鬱金香。玉椀盛り來る琥珀の光。但主人をして能く客を醉はしめば、知らず何れの處か是れ他鄉。

語釋 蘭陵から產する鬱金香の美酒を、玉の杯になみ〳〵とつげば、琥珀のやうな美しい色に見

える。たゞ主人が能く客を待遇して快く醉はせてくれれば、全く旅愁を忘れて、どこにゐても他鄕のやうな氣持はしない。旅にゐて酒がなくては全く以てやり切れない。

語釋　蘭陵（唐の沂州の地春秋には魯に屬し、戰國には楚に屬す。荀卿の令となつた處。美酒を產す。）○鬱金香（鬱金草から取る香の名。酒に和して香氣を添へる。）○玉椀（玉の杯。）○琥珀（飴色とした鑛物の名。）○不レ知（忘れてしまふこと。）

峨眉山月歌

李白

叙說　舟中天上の明月を見んと欲して能はず、空しく渝州に下りしことを叙す。此の詩二十八字中、峨眉山・平羌江・淸溪・三峽・渝州の五つの地名を用ひて、少しも堆疊を感ぜしめないのは、さすがに李白の妙手たる所以である。

峨眉山月半輪秋。影入平羌江水流。
夜發淸溪向三峽。思君不見下渝州。

峨眉山月半輪の秋。影は平羌江水に入りて流る。
夜淸溪を發して三峽に向ふ。君を思へども見ず渝州に下る。

通釋　秋夜淸溪を舟出して將に三峽に向はんとする折しも、峨眉山上に半輪の明月輾り出で、その影が平羌江の水に入つて流るゝを見たが、いつしか影を沒して復た見るべからず。空しく渝州まで下つて來た

語釋　峨眉山（四川省嘉定府蛾眉縣に在る。）○半輪（上弦即ち陰曆の十日以前の月。）○平羌江（四川省の雅州城北に在る。下りて嘉州に至りて長江に入る。羌夷の入寇した時、諸葛亮が此處で之を平げたので此の名がある。）○淸溪（縣の名。成都府の東に在り。後內江縣となる。）○三峽（峽とは兩山の間に夾まれた急流をいふ。三峽には異說があつて一樣でないが、こゝは夔州府に屬する西陵峽・巫峽・歸峽と見たらよからうと思ふ。）○君（月を指す。）○渝州（今の重慶なり。）

餘論　葉弘勛云く、「夜淸溪を發するは始なり。三峽に向ふは終なり。平羌江・峨眉山・渝州は中間なり。太白の奇たゞに地名を五用するのみならず。又顚倒錯亂して人をして、測られざらしむ」と。

上皇西巡南京歌二首

李白

叙說　天寶十五載六月、安祿山の兵が帝都長安を陷れたので、玄宗皇帝は蜀に出奔した。七月肅宗が靈武といふ處で天子の位に卽き、玄宗を尊んで上皇天帝といつた。至德二載十月、長安を回復し、上皇を蜀郡より迎へ、十二月蜀郡を以て南京となした。天子の出遊を巡狩といふ。此の詩は玄宗・

が賊を避けて蜀に奔つたことを叙したのであるが、玄宗が蜀から還つて後、既往の事實を追叙したのであるから、上皇とか南京とかいふ名稱を用ひ、蜀は長安の西に在るゆゑ西巡といつた。本集には十首あるが、ここには其の第二首と第十首とが選錄してある。

誰道君王行路難。六龍西幸萬人歡。
地轉錦江成渭水。天廻玉壘作長安。

通釋 誰か我が君が蜀郡に幸し給ふ行路の難きをいふ者ぞ、車駕一たび蜀地に到れば、萬民は歡呼の聲を揚げて迎へ奉り、天地も爲に廻轉して錦江は渭水の美觀を呈し、玉壘山は長安の景勝を示し、蜀中の山川盡く我が君を護り奉るものの如くである。行路難などは少しもない。

語釋 六龍（天子の御馬車。）○錦江（蜀に在る川の名。）○渭水（長安に在る川の名。）○玉壘（蜀に在る山の名。）○長安（唐の都。）

其二

劍閣重關蜀北門。上皇歸馬若雲屯。
少帝長安開紫極。雙懸日月照乾坤。

通釋 玄宗皇帝は蜀の北門たる劍閣（山の名）を開いて蜀にはいられたが、長安に還幸し給ふにより、北門再び鎖され、車馬雲の如く屯集して長安に乘り込んだ。肅宗皇帝が已に天子の位に卽いて長安に居られるから、日月相並んで天地を照すが如く、肅宗と玄宗と相並んで天下を治め給ふことになつた、誠にめでたき限りである。

語釋 若レ雲屯（雲の如く集る。その多きをいふ。）○少帝（肅宗皇帝を指す。）○紫極（帝座をいふ。）○日月（肅宗と玄宗とに喩ふ。）○乾坤（天地なり。）

餘論 重關を幾重もかさなつてゐる關門といふ意に解するのはよくない。第一首に胡塵輕拂建章臺。聖主西巡蜀道來。劍壁門高五千尺。石爲樓閣九天開とあるのを、最後の第十首で劍閣重關蜀北門と言つたのであるから、再び閉ぢたといふ意に解するがよい。

聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄

李白

叙說 龍標は唐の沅州龍標縣。沅州は漢の武陵郡の地。王昌齡は江寧縣丞から龍標縣尉に貶せられた。左遷とは貶謫せられたこと。李白遙に此の詩を寄せて感懷を述ぶ。

楊花落盡子規啼。聞說龍標過五溪。
我寄愁心與明月。隨風直到夜郎西。

通釋 目には楊花の落つるを見、耳には子規の血に啼くを聞き、心のむしやくしやして霽れない折も折、君が龍標縣尉に貶せられて五溪を過ぐるを聞いた。慰問しようと思へども道なく、たゞ愁心を寄せて天上の明月に託したから、月光が風に隨つて直ちに夜郎の西まで往くであらう。どうぞ月光を見て我が相思の情を酌み取つてくれよ。

語釋 楊花(柳絮な り。) ○龍標(王昌齡を指して言ふ。) ○五溪(鄭道元の水經注に、武陵ニ五溪アリ。皆蠻夷ノ居ル所ナリとあり。龍標に至る途中に在る。) ○寄ニ愁心一與ニ明月一(徐幹の詩に將レ心寄ニ明月一。流レ影入ニ君懷一とあるを用ふ。) ○隨レ風云云(曹植の怨詩に願作東北風。吹我入ニ君懷一とあるを用ふ。) ○夜郎(地名。今の貴州省遵義府に屬す。)

餘論 李白の傳を見ると、永王璘の謀叛に參したので夜郎に竄せらるとある所から、此の詩をば李

白が夜郎にゐて作つたものとして解する者があるが、それはよくないやうだ。漢書の西南夷傳を見ると、「西南の君長十を以て數ふ。夜郎最も大なり」とある。故に龍標あたりの總稱として夜郎を用ひたのであらう。且つ李白は未だ夜郎に到らぬうちに赦に遇つて途中から歸つたのであるから、夜郎にゐて王昌齡の左遷を聞いたとすることは出來ない。

◎黄鶴樓送ニ孟浩然之ニ廣陵一

李白

叙說 黄鶴樓は湖北省武昌府城の西南に在り、前は長江に臨んでゐる。廣陵は江蘇省揚州府。

故人西辭黄鶴樓。烟花三月下ニ揚州一。
孤帆遠影碧空盡。惟見長江天際流。

通釋 吾が友孟浩然は西の方黄鶴樓を去り、霞だなびき花笑ふ三月の好氣節に、一葉の舟に乘り揚州を指して長江を下る。吾名殘を惜んで樓上より見送れば、孤帆の影は漸く遠く、やがて碧空の中に

消えてしまつて、たゞ茫茫たる長江の天に連つて流るゝを見るのみである。

語釋 故人（舊友をいふ。ここで）　○烟花（唐詩解頤補遺に、詩ノ烟花ノ語多シ。通ジテ烟景ヲイフ。必ズシモ花ニ在ラズとあり。）

餘論 唐汝詢の評に、目力已極、離思無レ窮、悵望之情、具在二言外一とある。一二句は送別の正文。三四句は別後の悵望。

陪二族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至一遊二洞庭湖一

李　白

敍說 族叔とは從祖兄弟をいふ。刑部侍郎・中書舍人は官名。李曄は乾元二年四月嶺南に貶せられ、賈至は至德中岳州司馬に貶せられ、李白は夜郎に貶せられて乾元二年の巴陵洞庭の間に至り、三人相伴つて洞庭湖に遊んだ時の作である。すべてで五首あるのであるが、此は其の第一首である。

洞庭西望楚江分。水盡南天不レ見レ雲。
日落長沙秋色遠。不レ知何處弔二湘君一。

通釋 洞庭湖上より遙に西望すれば、岷江の來り注ぐのがハツキリと見え、飜つて南望すれば水光渺渺として天に接し、一點の雲翳をも留めない。今や落日は西に傾き、秋色は遠く長沙に及び、萬物澄澈、蒼茫幽遠で、湘君の廟を弔はんと欲するも、其の何處に在るかもわからないくらゐだ。

語釋 楚江（長江の上流なる岷江をいふ。西から流れて來て洞庭湖に注ぐ。）　○分（ハツキリと見えるといふが如き意。）　○長沙（洞庭湖の東南にある。）　○湘君（舜の南巡して蒼梧の野に崩ずるや、二妃蛾皇・女英舜を追ひて及ばず。沅・湘の間に溺死し、湘水の神となる、卽ち湘君なり。湘水は南より流れ來りて長沙の界に入り洞庭湖に注ぐ。）

餘論 この詩は洞庭湖の宏闊の狀を述べ、暗暗裡に惻惻悲哀の情を含めたもので、不レ知何處弔二湘君一とは、賈至の詩（後に出づ）に白雲明月弔二湘峨一とあるのを受けて言つたのである。

望二天門山一

李　白

敍說 天門山は安徽省太平府當塗縣の西南に在り、二山長江を夾む。東なるを博望といひ、西なるを梁山といひ、合せ名づけて天門山といふ。此の詩は李白が宣城郡から金陵に下る時に、舟中から遠望した實景を叙したのである。

天門中斷楚江開。碧水東流至レ北廻。ル
兩岸青山相對出。孤帆一片日邊來。

通釋 天門山がとぎれて長江の碧水が其の間を東流し、更に山勢に隨つて北方に屈折してゐる。この兩岸の青山が相對して峙つ間から、一片の白帆の下り來るのを回顧すれば、實に天日の邊から下つて來るのかと思はれる。實に畫のやうな景色だ。

語釋 楚江開(楚江は長江の上流、卽ち峽江。開の字は上の天門の二字を受けていふ。) ○日邊(太陽のほとり、卽ち天上。帝都長安を指すと解するは非なり。)

2. 早發二白帝城一 李白

敍說 題の意味は朝早く白帝城を出發したといふので、舟で長江を下る時の迅速なる狀を敍したのである。白帝城は夔州に在り、後漢の公孫述の築いた所で長江に臨んでゐる。

朝辭二白帝彩雲間一。千里江陵一日還。ル

通釋 朝に辭す白帝彩雲の間。千里の江陵一日に還る。

兩岸猿聲啼不レ住。輕舟已過二萬重山一。ノ

通釋 朝早く彩雲の棚引く頃、白帝城を舟出して、千里もある江陵へ其の日の中に着いた。兩岸の山で啼く猿の一聲が、まだ終らないうちに、吾が乘れる舟は早くも萬重の山を突破し去るほど、流が急速であつたから。

語釋 彩雲(曉の空に出る美しき雲。) ○江陵(湖北省荊州府。) ○一日還(還の字を用ひたのは韻脚の爲で、還の字は單に到着の意と見てよい。) ○萬重山(幾重も重つてゐる山。)

餘論 盛弘之の荊州記に巫峽江水の迅きを述べて、「朝に白帝を發して暮に江陵に到る。其の間千二百里。奔に乘り風に御すと雖も以て疾からざるなり」とあり、又「峽の長さ七百里、兩岸の連山略絶ゆる處なし。重山疊嶂、天を隱し日を蔽ふ。常に高猿の長嘯するあり。屬引清遠なり」とあるを粉本として此の傑作を成した。この詩は三四句の二句で、一二の二句を說明する體で出來てゐる。

秋下二荊門一 李白

叙說 荊門は山の名、湖北省荊州の江岸に在り。上合ひ下開き形門に似たり、故に此の名あり。李白こゝより舟に乘りて吳に入るなり。

霜落荊門江樹空。布帆無恙掛秋風。
此行不爲鱸魚膾。自愛名山入剡中。

通釋 荊門山の邊の江樹は霜降り葉落ちて空しく、秋色正に酣なる時、布帆を掛けて風波の難もなく長江を下る。昔晉の張翰は秋風の起るを見て、故郷なる吳の蓴菜の羹、鱸魚の膾を思ひ、官を罷めて歸つたといふが、我が此の行は名山を愛して吳の剡縣に入るのである。

語釋 江樹(江邊の木。) ○布帆(帆。ぬのの) ○無レ恙(無事なる。もいふ。) ○鱸魚(魚の名。) ○膾(魚肉を細く切つためもの。) ○剡中(剡は縣の名、吳の會稽郡に屬す。名山水多し。)

蘇臺覽古

叙說 蘇臺は卽ち姑蘇臺。今の江蘇省蘇州府に在り。吳王夫差の都した處。覽古は懷古に同じ。人生の果敢なく、自然の長久なことを述べた詩である。

舊苑荒臺楊柳新。菱歌淸唱不レ勝レ春。
只今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。

通釋 昔吳王夫差の豪奢を極めた姑蘇臺は、今や苑舊り臺荒れて見る影もなく、柳が昔ながらの綠を呈してゐる。昔の紘歌の聲は絶えて、今はあちこちで採菱歌を歌つてゐる。之を見之を聞いては實に感慨に堪へない。たゞ今日まで殘つてゐるのは西江の上に輝く月のみで、この月こそ昔吳王の宮女(西施等を指す)どもを照した所のものである。

語釋 菱歌(湖上に菱を採る女どもの歌ふ歌。) ○淸唱(よい聲でうたふこと。) ○不レ勝レ春(春の思にたへられない。) ○宮裏人(宮中に仕へた人。)

越中懷古

叙說 越王勾踐、吳王夫差を破り、一時の榮華を誘りしも、今滅亡して跡なきを述ぶ。前三句は昔

日の全盛を述べ、末の一句は今日の荒涼を寫す。

越王句踐破レ吳歸。義士還レ家盡錦衣。
宮女如レ花滿二春殿一。只今惟有二鷓鴣一飛。

通釋 越王句踐が吳を破つて國に歸るや、戰に從つた忠義の士は恩賞にあづかつて錦衣玉食の榮華に誇り、宮中の美女は花の如く粧を凝らして殿中に滿ちてゐた。それも一場の夢と消え滅び、今はたゞ鷓鴣の飛びかふのみである。

餘論 芭蕉の「夏草やつはものどもの夢の跡」といふも此の詩と同意である。

與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛

李白

叙說 史は姓、郎中は官名、欽は人名。黃鶴樓は前の李白の詩に見ゆ。笛聲を聞き故鄉を思ひて作る。

一爲二遷客一去二長沙一。西望二長安一不レ見レ家。
黃鶴樓中吹二玉笛一。江城五月落梅花。

通釋 遷謫の身となり將に長沙に向つて去らんとするに方り、遙に故鄉長安を望めども悠遠にして見えず。愁に堪へざる折から、黃鶴樓の上で落梅花の曲を吹くのを聽き、此の江城に於て、五月落梅の時節に遇ひしことを痛感し一入懷鄉の思を深うした。

語釋 遷客（謫せらるる人。）○長沙（前の李白の詩に見ゆ。）○長安（唐の都。）○江城（川のほとりの城下、武昌を指す。）○落梅花（笛曲の名。）

春夜洛城聞レ笛

李白

叙說 洛城は唐の東都なる洛陽をいふ。此れも笛聲を聞いて懷鄉の情を起したことを述ぶ。

誰家玉笛暗飛レ聲。散入二春風一滿二洛城一。
此夜曲中聞二折柳一。何人不レ起故園情。

通釋 誰が家の玉笛ぞ暗に聲を飛ばす。散じて春風に入つて洛城に滿つ。此の夜曲中折柳を聞く。何人か起さざらん故園の情。

通釋　どこで吹くのか知らないが、笛の聲が春風に吹き散らされて、洛陽城中に響き渡る。特に離別の時に奏する折楊柳の曲を聞けば、誰でも故郷を思ふ情を起さぬ者はあるまい。

語釋　暗（どことも、はつきりわからぬ意。）　○折柳（折楊柳として離別の時に吹く笛曲。）　○故園（故郷。）

春宮曲

王昌齡

敘說　春宮曲は樂府題である。この詩は君寵を失つた宮人が新に君寵を得た宮人を羨むことを賦したもので、沈德潛の評に、「王龍標（昌齡）の絶句は深情幽怨、意旨微茫、昨夜風開露井桃の一章、只他人の寵を承くるを說きて、而も己の失寵悠然として思ふべし。これ響を絃指の外に求むる者なり」とあるは適評である。

昨夜風開露井桃。未央前殿月輪高。
平陽歌舞新承寵。簾外春寒賜錦袍。

通釋　昨夜は風が暖いので井戸の邊の桃の花も咲いた所から、未央宮の前殿には夜のふくるまで昨夜風に開く露井の桃。未央の前殿月輪高し。
平陽の歌舞新に寵を承け、簾外春寒うして錦袍を賜ふ。

御宴が開かれた。昔漢の武帝が平陽公主の家に幸して、歌舞の女を寵し給ひしと同じく、今も新に君の御寵愛を得た女があつて、簾外の春は尙ほ寒かるべしとの御意で、錦の袍を賜はつた。との話だ。實に羨ましいことだ。

語釋　露井（屋根のない井戸。）　○未央（宮殿の名。）　○平陽歌舞（漢の武帝が平陽公主の家に幸した時、衞子夫の歌舞を善くするを見て大に悅び、載せて還り、遂に立てゝ皇后にした。平陽歌舞とは新に君寵を得た宮人を指して言ふ。）　○錦袍（錦のうはぎ。）

西宮春怨

王昌齡

敘說　これも樂府題である。西宮とは長信宮をいふ。漢の成帝は初め班婕妤を寵愛したが、後趙飛燕を納るるに及んで、班婕妤は全く君寵を失つてしまひ、且つ趙飛燕の妬忌を憚つて、長信宮に入り太后に供養せんことを求め賦を作つて自ら傷悼した。この詩は此の事實を詠じたのである。

西宮夜靜百花香。欲捲珠簾春恨長。
斜抱雲和深見月。朧朧樹色隱昭陽。

通釋　西宮夜靜にして百花香し。珠簾を捲かんと欲して春恨長し。
斜に雲和を抱いて深く月を見れば、朧朧たる樹色昭陽を隱す。

通釋　この西宮へは君の御臨幸もなく、夜は一入物淋しくて、たゞ百花の暗に香氣を漂はすばかりである。さて珠簾を捲き上げて景色でも賞したらと思はぬではないが、心がむしやくしやして其の氣にもなれない。うさはらしに琴でも彈かうと、斜に琴を抱いて簾中からおづ〳〵月を見れば、朧朧たる樹木が昭陽宮を掩つて明には見えない。あの昭陽宮には趙飛燕が君の御寵愛を擅にしてゐると思へば、怨めしいやら悔しいやら。

語釋　百花香（夜が靜だから花氣が一層發散するのである。）　○珠簾（珠を貫いて作つた簾。）　○雲和（琴の類。）　○深見レ月（簾を捲かずに簾中から見るのである。この三字には、月を見れば昭陽宮が見えるが、見まいと思へば尚更見たくなる。その複雜な意味を含んでゐる。）　○朧朧（不明な貌。）　○昭陽（宮の名。趙飛燕の居る所。）

西宮秋怨

王昌齡

敘說　これも樂府題で、怨思二十五曲の中に、閨怨・西宮春怨・西宮秋怨等あり。前の西宮春怨と同じく班婕妤の事を賦したのである。

芙蓉不レ及美人粧。水殿風來珠翠香。

芙蓉も及ばず美人の粧。水殿風來つて珠翠香し。

却恨含情掩秋扇。空懸明月待君王。

通釋　美人が粧を凝らして水殿に君の御臨幸を待つてゐる。風が頭上の珠翠を吹いて香氣を散ずる。その艶麗なことは池中の芙蓉も及ばない。かゝる艶麗な美人なれば君の御寵愛を得べき筈であるのに、意外にも寵を失つたので、この美人は情を含み秋扇を掩ひ、明月を懸けて、空しく君の御臨幸を待つ身の、却つて芙蓉に如かざるを恨んでゐる。

語釋　芙蓉（蓮花をいふ。西京雜記に、卓文君臉芙蓉ノ如シとある。）　○珠翠（珠玉や翡翠の羽で作つた首飾。曹植の洛神賦に、金翠ノ首飾ヲ綴キ、明珠ヲ綴リテ以テ軀ヲ飾カスとあり。李周翰曰く、首飾トハ鈒冠ノ屬ヲイフ。黃金翠羽ソノ鈒ヲ裝ヒ明珠ヲ上ニ綴リ、以テ其ノ首ヲ光曜スルヲ言フ也と。）　○秋扇（班婕妤の寵を失ふや、怨歎行と題する詩を作り、自ら扇に比し、秋になり扇が棄てられると同じく君寵を失つたことを嘆いてゐる。掩とは掩うて見ないこと。見れば身の薄命を痛感するゆゑ。）　○懸ニ明月ニ（漢の武帝の陳皇后、別れて長門宮に考る。司馬相如爲に長門賦を作つて主上をさとしたので、皇后は復た寵愛せられるやうになつたその賦中に明月ヲ懸ケテ以テ自ラ照スの句がある。月天上に在りて懸るが如きをいふ。）

長信秋詞

王昌齡

敘說　長信は宮の名。前の西宮春怨・西宮秋怨と同じく班婕妤の事を賦したのである。

眞成薄命久尋思。夢見君王覺後疑。

眞成に薄命久しく尋思す。夢に君王を見て覺めて後疑ふ。

火照二西宮一知二夜飲一　分明複道奉レ恩時。

通釋 ほんとに我が身はなぜかう薄命なのかと、久しく自ら尋ね思うたあげく、君に遇ひ見た夢を見たが、覺めての後に眞か夢かを疑つた。何となれば彼の昭陽宮（西宮春怨に見ゆ）では夜飲方に酣なるものの如く、火燭煌煌として此の西宮（長信宮）までも照すほどであるが、現に今の今、自分も複道に在りて車駕を迎へ、主恩を承けたことがあり〳〵と頭に殘つてゐるから。

語釋 眞成（眞實の意。成は誠に通ず。樂の箇文帝の詩に眞成恨已マズとある。）　○薄命（薄倖なり。）　○分明（歷歷といふが如し。）　○複道（閣道に同じ。高い廻廊。）　○奉レ恩（君側に侍して御寵愛を受けること。）

青樓曲

敍說 これも樂府題で、宮苑十九曲中の一である。青樓とは婦人の居る所をいふ。又娼婦の居る所をいふこともある。青樓の少婦が箏を鳴らして樓に倚り、遙に其の夫婿が馬を馳せて天子の遊幸に從ふを望む得意の狀を寫したのである。

王昌齡

白馬金鞍從二武皇一　旌旗十萬宿二長楊一。
樓頭少婦鳴レ箏坐。　遙見飛レ塵入二建章一。

通釋 少婦の夫は白馬金鞍に跨がつて武帝に扈從し、旗を建てつらねた十萬の兵に交つて長楊宮に宿し、それから還つて塵を飛ばして勇ましく建章宮に入る樣子をば、樓上に箏を鳴らしてゐた少婦が、遙に目送して獨り悅に入つてゐる。

語釋 武皇（漢の武帝。唐の玄宗の行事は漢の武帝に似てゐるので、唐人は玄宗を武帝に比して言ふことが多い。この詩もさうである。）　○長楊（宮の名。盩厔縣の東南三十里に在る。武皇の遊幸する所。）　○建章（宮の名。）

敍說 夫の遠征した後に、少婦が春色の酣なるを見て、忽ち思慕の情を起したことを賦した。

閨怨

王昌齡

閨中少婦不レ知レ愁。　春日凝レ粧上二翠樓一。
忽見二陌頭楊柳色一。　悔教二夫壻一覓二封侯一。

閨中の少婦愁を知らず。春日粧を凝らして翠樓に上る。
忽ち陌頭楊柳の色を見て、悔ゆらくは夫壻をして封侯を覓めしめしことを。

通釋　閨中の少婦は未だ世故に通じないから、離愁などは知らないので、たゞ夫をして早く功名を立てさせて、榮華を極めたいといふやうな淺墓な考で、夫に從軍を勸めたが、春の陽氣に化粧を凝らして翠樓に上り、路傍の柳が春に逢つて綠の色を呈してゐるのを見て、忽ち夫が戀しくなり、たとひ手鍋さげても夫の側にゐる方がよいことを悟り、功を立て大名に封ぜられるやうにと夫に勸めたことを自ら悔いた。

語釋　翠樓（一樓に同じ。前の青樓曲を見よ。）　○陌頭（路のほとり。）　○夫壻（をつと。）　○封侯（大名に取り立てられること。）

出塞行

王昌齡

敍說　これも樂府題で、鼓角橫吹十曲の一である。邊塞の軍事を賦す。この詩は三體詩には旅望と題し李頎の作としてある。そして白草を百華、東來を西來としてある。然し白草と黃河とは、色彩の字を用ひて映發せしめたので、馬首東來は左傳の語を用ひたのであるから、唐詩選の方がよいやうに思はれる。

白草原頭望京師。黃河水流無盡時。

白草原頭京師を望めば、黃河水流れて盡くる時なし。

秋天曠野行人絕。馬首東來知是誰。

通釋　われは今邊塞を出て胡地を指して行くのであるが、白草の生えてゐる野原から京の方を望めば、唯黃河の水の滔滔として東流するのを見るばかりだ。澄みきつた秋の空、茫茫たる曠野には往來の人影も絕えて至つて物淋しき折から、たゞ一人馬首を東して京の方へ馳せ行く人がある。誰だか知らないが羨ましいことだ。

語釋　白草（胡地には白草が多い。漢書西域傳に、鄯善國ニ白草多シとある。白草は原の名ではない。）　○原頭（頭はホトリの意。）　○京師（天子の都。即ち長安。）　○馬首東來（來の字は助辭で意味はない。左傳に晉侯秦ヲ伐ツ。荀偃令シテ曰ク、井ヲ塞ギ竈ヲ夷ゲ唯余ガ馬首ヲ是レ瞻ヨト。纘鑒曰ク、余カ馬首東ストとある。）　○知是誰（知は知ラズといふか如し。七古の人日寄杜二拾遺の明年人日知何處の知と同じ用方で、誰だかわからないとの意。）

從軍行三首

王昌齡

敍說　從軍行も樂府題で軍旅の苦辛を述べる詩である。

烽火城西百尺樓。黃昏獨坐海風秋。
更吹羌笛關山月。無那金閨萬里愁。

烽火城西百尺の樓。黃昏獨坐す海風の秋。
更に羌笛を吹く關山月。那ともするなし金閨萬里の愁。

通釋 烽火城の西の高き戍樓に、海風に吹かれながら、夕方に獨り坐してゐると、荒涼寂寞、感慨無量である。況んや胡人が月の冴えた夜に笛を吹き、關山月の曲を奏するのを聽くと、萬里の故郷に居る妻を思ふの情が〳〵むら〳〵と起つて奈何ともし難い。

語釋 烽火城（ノロシを擧げる場所。邊塞の處處に在る。）○百尺樓（高い戍樓。戍樓は備兵の居る櫓の如きもの。）○海風（海は青海。蒙古のココノール）○羌笛（羌はエビスの名。）○關山月（笛曲の名。ここは關山の月下といふ叙景の意味をも含むものと見るがよい。）○金閨（禁城をいふ。謝朓の詩に、既ニ金閨の籍ヲ通ズなどとあるは此の意である。然しこゝは婇女の居室と解した方がよい。）

其二

青海ノ長雲暗ニ雪山一。孤城遙ニ望ム玉門關。
黃沙百戰穿ニ金甲一。不レ破ニ樓蘭一終不レ還。

通釋 青海から雪山にかけて暗雲低迷する時、孤城より遙に故國の方の玉門關を望めば、人をして萬斛の愁を起さしめる。然したとひ幾度となく沙上に戰つて鎧に孔があくとも、樓蘭を破らないうちは斷じて故國へは還らない。

語釋 青海（前の詩の海風を見よ。）○雪山（山のみ。天山ともいふ。）○孤城（卽ち烽火城。前の詩を見よ。）○玉門關（漢土と西域との境に在る關所。）○黃沙（胡地の沙漠。）○穿ニ金甲ニ（鎧が破れて孔があくこと。）○樓蘭（西域の國の名、善宇ともいふ。）

其三

秦時ノ明月漢時ノ關。萬里長征人未レ還。
但使ニ龍城ニ飛將在一。不レ敎ニ胡馬度ニ陰山一。

通釋 秦漢以來戍の兵を明月關に遣して、胡人を防がしめる習になつてゐるが、悲しいかな萬里遠征の途に上つた兵士は未だ嘗て生還した例がない。たゞ龍城に漢の飛將軍李廣のやうな名將が、若し今の世にもあれば、胡馬をして陰山を渡つて入寇せしめることはないだらう。かゝる名將がないのは返す返すも殘念なことだ。

語釋 秦時明月漢時關（明月は關の名。揚雄の賦に明月ニ堺ヲツクルとあり。揚炯の詩には、望ハ斷ユ流星驛、心ハ馳ス明月關とある。關名たること疑なし。今巧に明月關の三字を析き用ひて、秦時の上に明月の字を置き、漢時の下に關の字を置いた。）

○龍城（匈奴の地名。漢書匈奴傳に、匈奴ノ單于天ヲ祭リ大ニ諸國ヲ會ス。其ノ處ヲ名ヅケテ龍城トナスとある。）　○陰山（塞外の山の名。漢書匈奴傳に見ゆ。）

梁苑

王昌齡

敍說　梁苑は漢代の諸侯たりし梁の孝王の苑で河南省歸德府に在り。苑内に修竹園があつた。孝王は詩賦を好み、四方の文士を招き集めたので、この苑は一時文學の中心地となつた。この詩は王昌齡が其の遺跡を弔ひ、懷古の情を述べたのである。

梁園秋竹古時烟。城外風悲欲暮天。
萬乘旌旗何處在。平臺賓客有誰憐。

通釋　梁園の跡を來り訪へば、時方に秋で、竹樹は烟を含んで昔の俤を留めてゐるが、其の他はすべて荒廢して、城外には悲風の日暮に凜凜たるを聞くのみである。孝王の全盛を誇つた頃の旌旗は、今は既に亡びて見るべからず。平臺の賓客にも比ずべき吾（王昌齡自ら謂ふ）今來り訪へども、孝王既に逝いて在らねば、誰も愛憐を垂れてくれる者もないと、暗に文士を愛する諸王のないことを嘆じたのである。

語釋　梁園（梁苑に同じ。）　○萬乘旌旗（萬乘は天子の稱。孝王を尊ぶのあまり、帝に譬うて車服すべて天子に準擬したから、萬乘の字を用ひたのである。）　○平臺賓客（平臺は臺の名。賓客とは孝王の招き集めて置いた文士連を指すので、鄒陽・枚乘・司馬相如等をいふ。こゝは王昌齡が暗に自ら比したのである。）

芙蓉樓送辛漸

王昌齡

敍說　芙蓉樓は江蘇省鎭江府城の西北隅に在つて、前は長江に瀕してゐる。この詩は王昌齡が江寧縣丞たりし時、辛漸の洛陽に歸るのを送つた作である。

寒雨連江夜入吳。平明送客楚山孤。
洛陽親友如相問。一片冰心在玉壺。

寒雨江に連つて夜吳に入る。平明客を送れば楚山孤なり。
洛陽の親友如し相問はば、一片の冰心玉壺に在り。

通釋 寒雨の霏霏たるを冒し、夜君と舟を同うして吳に來り、天明け雨霽れて後、君が楚を經て洛陽に赴くのを送れば、遙に楚山の孤立するを見るのみ、吾が心も亦隨つて孤寂を感ぜざるを得ない。（一二句景中に情を寓す。連の字は辛と竝載の意を含み、孤の字は別後一身漸く孤なるを狀す）。さて洛陽の親友だちが我が近狀を問うたならば、我が心は一片の冰の玉壺の中に在るが如く、いよ〳〵ます〳〵清澄廉潔であると答へてくれよ。

語釋 平明（よあけ。曉。）　○客（辛漸を指す。）　○玉壺（玉で作つたツボ。鮑照の詩に清キコト玉壺ノ冰ノ如シとある。）

送薛大赴安陸

王昌齡

敍說 安陸は縣の名。湖北省德安府に屬する。この詩は王昌齡が沅湘の間に流落してゐた頃に、薛大（大は行第一なるを大といふ）の安陸に往くのを送つた作である。

津頭雲雨暗湘山。遷客離憂楚地顏。
遙送扁舟安陸郡。天邊何處穆陵關。

通釋 渡船場のあたりは雲雨が濛濛として、湘山の方まで暗くして見えず。楚地に客たる余は心に憂愁を抱いて顏色爲に憔悴してゐる。まして君が一隻の小舟に乘つて安陸郡に往くのを送れば、安陸は遠くして見るべからず。安陸に近き穆陵關すら其の何處にあるやらわからない。離愁の一入深きを感ずる。

語釋 津頭（津はワタシバ。頭はホトリ。）　○湘山（洞庭湖の中に在る山、ヌ山ともいふ。）　○遷客（遷謫せられてゐる人、王昌齡自ら謂ふ。）　○離憂（離は遭なり。憂にあふこと。楚辭に公子ヲ思ヒテ徒ニ離憂スとある。）　○楚地顏（沅湘のあたりは昔の楚の地である。暗に楚の屈原の顏色憔悴、形容枯槁の語を用ひた。）　○扁舟（小舟。）　○穆陵關（卷三の劉長卿の詩を見よ。）

送別魏二

王昌齡

敍說 魏二は和刻本には魏三とあるが、本集・古唐詩合解等には魏二（二は輩行）とある。又全唐詩には送ニ魏二ニと題してある。

醉別江樓橘柚香。江風引雨入船凉。
憶君遙在湘山月。愁聽清猿夢裏長。

通釋 醉うて江樓に別れて橘柚香し。江風雨を引き船に入つて凉し。君を憶ひ遙に湘山の月に在つて、清猿を愁へ聽いて夢裏に長からん。

通釋 魏二と酔を江樓に盡して別るれば、時方に秋で橘柚が香氣を放つてゐる。魏二の船に乘らんとするや、江風忽ち起り、雨を帶びて船に入り、頓に酔を醒まして凄凉を感ぜしめる。あゝ魏二去つて後、余は獨り遠く離れて湘山の月下に猿聲を聽きつつ、夢寐の間にも憂愁が絶えぬであらう。

語釋 湘山（前の詩を見よ。） ○清猿（猿の聲の哀遠清徹なこと。）

餘論 この詩の第三句、全唐詩には憶君遙在瀟湘月とあり。月、一作レ上、また作湘山月と註してゐる。前詩に津頭雲雨暗湘山とあるので、この詩の瀟湘が訛して湘山となり、前詩の湘山は送別の地であるから、此の詩の湘山も同樣に見て、作者の居る處と解せねばならないやうになつたのであらう。余は全唐詩に從つて、第三、四の二句を、「君は此の地を去つて遙に瀟湘の月下に在り、猿聲を聽いて夢寐にも心を痛ましめるであらう」と解するがよいと思ふ。

盧溪別レ人ニ

敍說 辰州に五溪あり。盧溪は其の一。漢の武陵郡の地。この詩は王昌齡が龍標縣尉に貶せられし後の作である。李白の七絕、聞二王昌齡ノ左一遷龍標尉一遙有二此寄一を參照せよ。

武陵溪口駐二扁舟一。溪水隨レ君向レ北流。
行到二荊門一上二三峽一。莫レ將二孤月一對猿愁。

通釋 武陵の溪口に故人（舊友をいふ）の舟を駐めんとするも留らない。（故人が留らないと言はないで怨を流水に寄せた所が、殊に情趣が深い）。ここは蠻夷の地であるから、君が北に歸るは固より其の欲する所ではあらうが、これから荊門山に到り更に三峽に上らば、孤月に對して哀猿を聞き、さぞかし客心を痛ましむるであらう。蠻夷の地にゐて長く我と伍する方がよいではないか。

語釋 武陵溪（卽ち盧溪。沅水に入り湘水に合し、北流して洞庭湖に入る。） ○扁舟（小舟。） ○荊門（山の名。） ○三峽（李白の峨眉山月歌を見よ。）

餘論 第三四句、己の歸る能はざる恨を明言しないで、人に向つて留まらんことを求むるは、優婉の情尤も深きを見る。この詩の如きは王昌齡の本色を最も善く現したものである。

重別二李評事一

王昌齡

叙說 評事は官名。大理事に屬す。重とは纔纔として別るゝに忍びず、遂に再び別筵を開いたのである。

莫レ道秋江離別難。舟船明日是レ長安。
吳姬緩舞留レ君醉。隨意青楓白露寒。

通釋 おい君、別れが悲しいなどとは言ふまいぜ（言ふまいと互に誓ふのは却て別れが悲しいことを痛切に示してゐる）。一たび舟に乘れば明日は長安の人になるのだ（一たび別れると忽ち天涯萬里だ。これが悲しくなくてどうせうぞい）。せめては今宵一夜を永うせんと、吳姬をして歌舞して君を醉はしめるのだ。まよ青楓に白露が落ち、更闌けて夜寒を感ずるとも、頓着せずに飲まうぢやないか。

語釋 長安（唐の都。送別の場所は明かでないが、吳姬だの青楓だのとある所から見れば、江南地方で作つたものに相違ない。されば實際は十日や二十日で長安までは往かれないが、一たび別れよと忽ち遠く隔つて音信も通じ難いとの意を強く示す爲に、明日は長安の人となると言つたのである。）　○吳姬（吳地の美人。）　○緩舞（しなやかに舞ふ。）　○隨意（一任・遮莫に同じ。そんなことはどうでもよい。）　○青楓（江南に多い。楚辭招魂に、湛ダル江水、上ニ楓林アリ。日予里ヲ極メ、春心ヲ傷マシムとあり。杜甫の夢李白と題する詩に、魂來ル楓林青ク、魂返ル關塞黑シとある。この時李白は江南にゐたから楓林の字を用ひた。高適の送李少府貶峽中・王少府貶長沙と題する詩（七律の部參照）に青楓江上秋天遠とある。）　○白露（秋の夜下ル露。）

王維

叙說 少年行は樂府題で、少年任俠の意態を述ぶ。

出身仕レ漢羽林郎。初隨二驃騎一戰二漁陽一。
孰知不向二邊庭一苦。縱死猶聞二俠骨香一。

通釋 身を官に致し漢に仕へて羽林郎（宿衞の兵士）となり、初めて驃騎將軍霍去病に隨つて漁陽に戰つた（當代のことを言ふのを憚つて、漢代のことに假設して言ふ）。然し「一將功成つて萬骨枯る」で、少しも功名を成すことは出來ない。邊境に從軍して苦勞せず、たとひ邑里にゐて死んでも、猶ほ俠骨を以て名を顯すことが出來るとは心附かなかつたが、早くそれと知つたら從軍などするのであつた。

はなかつた。

語釋 漁陽（北邊の地名。）　○孰知（何ぞ知らん）に同じ。）　○邊庭（匈奴に北庭。南庭あり。）　○縱死（たとひ邑里の間に死するとも、の意。）　○俠骨（俠氣ふが如し。）

餘論 唐代には外夷の入寇が屢で、之を拒ぐ爲に無數の國民を驅り骨を沙場に暴さしめたから、戰を詛ふ詩が澤山ある。これも其の一で、少年任俠の事を借りて暗に戰爭の厭ふべきことを述べたのである。

九月九日憶二山中兄弟一

王維

敍說 九月九日卽ち重陽の節句には高い處に登つて宴を設け、茱萸を佩びて惡氣を避ける風習がある。續齊諧記に「汝南の桓景、費長房に隨つて遊學す。長房桓景に謂つて曰く、九月九日汝が家當に災厄あるべし。家人をして各絳囊（紅色のふくろ）を作り茱萸を盛り以て臂に繫け、高山に登り菊花酒を飮ましめば此の禍消すべしと。景その言の如くす。擧家山に登る。夕に還れば雞犬牛羊一時に暴死す云云」とある。此の詩は王維が他鄉にゐて遙に故鄉の登高の會を憶うて作つたのである。時に彼は年十七であつたといふ。唐詩品彙には題の山中を山東としてある。

獨在二異鄉一爲二異客一。每レ逢二佳節一倍レ思レ親。
遙知兄弟登レ高處。遍挿茱萸少二一人一。

通釋 獨り客となつて他鄉に居る身は、平生もさうだが況日などには、一層故鄉の親兄弟を慕ふ情が深くなる。今日は重陽の節句だから故鄉の兄弟どもは皆高い處に登り茱萸を頭に挿して惡氣を祓ふについて、唯この我一人缺けて俱にしないことを遺憾に思つてゐるであらう。

語釋 異鄉（他鄉に同じ。）　○異客（異地に在りて客となること。左傳に見ゆ。）　○佳節（よき節句。上巳・端五・七夕・重陽などの日。）　○一人（王維自身を指す。）

餘論 たゞ自分が遙に兄弟を思ふといふよりは、兄弟が自分一人が缺けて仲間にはいらないことを遺憾に思つてゐるであらうといふ方が一入懷鄉の情が深い。

與二盧員外象一過二崔處士興宗林亭一

王維

綠樹重陰蓋四鄰。青苔日厚自無塵。
科頭箕踞長松下。白眼看他世上人。

敘說 盧は姓、員外は官名、象は名。崔は姓、處士とは官に仕へない人の稱、興宗は名。盧象と處士崔興宗の林亭を訪うて作つたのである。

通釋 上は青葉が茂り合つて四鄰を蓋ひ、下は青苔が厚く生えて一點の塵をも留めない。（俗人の來り訪ふ者なき幽邃の地である）。さて此の村莊の主人たる崔興宗は世俗の禮儀作法などには少しも頓着せず、帽子もかぶらず松の木の下に足を投げ出して坐し、世間の俗物どもをにらみつけてゐる。

語釋 科頭（頭巾や冠などをかぶらないこと。）○箕踞（兩足を伸ばしてすわること。其の形箕の如し。故に箕踞といふ。傲慢の態である。）酒と琴とを持つて來れば青眼を以て迎へた、といふ故事。白眼はにらみつけること。）○看他（みること。他は助辭で意味はない。）○白眼（晉の阮籍よく青白眼をなす、禮俗の士を見れば白眼を以て之に對し、嵇康が

餘論 綠樹、青苔、白眼等色彩に關する字を點用して趣を添へた。

送韋評事

王維

敘說 韋は姓、評事は官名。其の從軍して邊地に赴くのを送る詩である。

欲逐將軍取右賢。沙場走馬向居延。
遙知漢使蕭關外。愁見孤城落日邊。

通釋 いま君（韋評事を指す）は將軍の幕僚となり、匈奴の首魁を擒にしようと、馬を沙漠に走らせて居延城に向ふ。誠に豪壯の極である。併し漢使たる君が一たび蕭關を越えて匈奴の地に入り、一片の孤城を落日の邊に望んだならば、英氣頓に挫けて悲愁に陷るであらうと思ふが、まア折角辛抱して功を立てて歸るがよい。

語釋 ○逐將軍（逐は屬官として從ふこと。）○右賢（匈奴は左賢王と右賢王とある。）○沙場（沙漠をいふ。塞外には沙漠がある。）○居延（漢の縣名。張掖郡に屬す。今の甘肅省酒泉郡の塞外。）○漢使（韋評事を指して言ふ。）○蕭關（關所の名。甘肅省固原縣の東南に在り、關中四關の一。匈奴との通路に當る。）○孤城（漢の戍兵の居る居延城を指す。）

送沈子福之江南

王維

敘說 沈子福が江南の郷里に歸るのを送る詩である。

楊柳渡頭行客稀。罟師盪槳向臨圻。
唯有相思似春色。江南江北送君歸。

通釋 楊柳渡頭行客稀なり。罟師槳を盪して臨圻に向ふ。
唯相思の春色に似たるあり。江南江北君が歸るを送る。

敘說 柳が綠の絲を垂れてゐる渡津の頭には乘客も至つて少く、漁夫が楫を動かし舟を漕いで、たゞ君一人を乘せて向岸の港を指して行く。君もさぞかし淋しいであらうが、我が君を思ふ情は此の春景色と同じで、江北から江南に亘つて何處までも君に隨つて行くから、心強く歸るがよい。

語釋 罟師（罟は魚を捕へる網。）　○盪槳（槳は楫なり。盪は搖すこと。）　○臨圻（圻は岸なり。曲岸頭なり。）　○相思（相想ふ情。）

春思二首

賈至

敘說 春思は古の樂府題で、此の詩は春の情思を叙したものである。

賈至、字は幼鄰、洛陽の人、父曾は開元の初制誥を掌つた。至も玄宗の時に起居舍人・知制誥に任ぜられた。肅宗の時中書舍人となつたが、至德中事に坐して岳州司馬に貶せられ、寶應の初故の官に復し、大曆七年、右散騎常侍を以て歿した。年五十五。禮部尚書を贈られた。

草色青青柳色黃。桃花歷亂李花香。
東風不爲吹愁去。春日偏能惹恨長。

通釋 草の色は青青として柳の色は黃色味を帶び、桃も李も花盛りで其の香があたりに漂つてゐる。春風は物を吹くものであるが、一向我が愁へを吹き去らず、春日は人を樂ませるものであるが、却つて我が恨を引き遲遲として暮れない。なぜ春風も春日も我に對しては、かくつれないのであらうか。

語釋 歷亂（爛漫といふが如し。花の咲き亂れること。）　○東風（春風。通行本には春風とあるが、今全詩に據つて改めた。）

餘論 この詩は一二の句、三四の句、各對句から出來てゐる。これを全對格といふ。この詩を岳州に貶せられてゐた時の作として解するのは不穩當である。

其二

紅粉當レ壚弱柳垂。金花臘酒解二酴醾一。
笙歌日暮能留レ客。醉殺長安輕薄兒。

紅粉壚に當つて弱柳垂る。金花の臘酒酴醾を解く。
笙歌日暮れて能く客を留む。醉殺す長安の輕薄兒。

通釋 美しく化粧を凝らした美女が柳の絲の垂れてゐる酒屋の店頭に坐して、舊臘の中に釀した黄金色を呈せる酴醾酒の樽を開いて客に勸めてゐる。然も夕方になると笙歌を奏して客の足を引き留め、長安の輕薄兒どもをば醉ひつぶれしめる。

語釋 紅粉（化粧を施した美人。）○當レ壚（壚とは土を累ねて爐の如くし、酒瓮を置く處。酒屋の店なり。）○弱柳（わかい柳の絲。）○金花（酒の色に就いていふ。）○臘酒（臘は十二月を云ふ、十二月の寒い時に釀した酒。）○酴醾（山吹をいふ。こゝは酒の名。その色が山吹の花のやうに黄色だからである。歲時記に、唐ハ寒食、宰臣以下ニ酴醾酒ヲ賜フとある。解とは樽を開くと。輦下）○醉殺（醉はせること。殺は助辭。）○輕薄兒（うかれ男。）

餘論 前詩は自己の愁思を叙し、後詩は他人の宴遊度なきを叙す。他人の宴遊度なきは卽ち自己の愁思する所以である。

西亭春望

賈至

叙說 西亭は西に在る亭といふ意。西亭から春四方を眺望して作つたといふのである。此の詩は賈至が岳州に貶せられてゐた時に作つたものである。

日長風煖柳青青。北雁歸飛入二窅冥一。
岳陽城上聞二吹笛一。能使三春心滿二洞庭一。

日長く風煖にして柳青青。北雁歸飛して窅冥に入る。
岳陽城上吹笛を聞き、能く春心をして洞庭に滿たしむ。

通釋 時正に春で日も長く風も暖く柳が青青と綠の絲を垂れてゐる。天上を仰ぎ北の我が故鄕の方に歸る雁を羨み望めば、いつしか雲の奥に姿を消してしまつた。折も折とて岳陽城の上で吹く笛の音を聞き、忽ち我が客愁をして眼下にひろがつてゐる洞庭湖の水と同じく、渺渺として盡くることなからしめる。

語釋 北雁（雁は春になれば北の方に飛び行き、秋になれば南の方に飛び行く。）○窅冥（あを空をいふ。）○岳陽城（岳陽樓なり。岳州府城の西の門の樓で、洞庭湖を一目に見下すことが出來る。）○春心（春愁。客愁。楚辭に目千里ヲ極メテ春心ヲ傷マシムとある。）○洞庭（支那第一の大湖。）